
馬鹿の世界リフォーム記

零夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿の世界リフォーム記

【Nコード】

N2550Y

【作者名】

澪夢

【あらすじ】

貧乳で普段着の和服がそれを助長される無表情で俺を椅子で殴りまくるあの子が好き
貧乳で傾国の美声で優しくて心配症でちょっぴりおどしてる幼馴染なあの子も好き
豊乳で私様でテンション高くて俺を奴隷扱いする血縁関係無いけど、姉貴なあの人好き
豊乳で清楚だけどドジっ子眼鏡で巫女服何時も乱れてますよっていうギャップのある幼馴染その2のあの子も好き

皆皆、好き、ダイスキ、愛してる

だから……悲しませるしか能の無い世界、俺が全部壊して綺麗にしてやるよ

誰も悲しみなんて望んでない、皆が、俺が、望むのは……きっと後から先にも笑顔だけ

（カッコいい事言ってますが主人公は馬鹿です、女の子が好きなだけです↑）「この作品は『愛された故に憎んだ青年の物語』に出る一人、葵〓ウインデル〓ひすい、が其処に至るまでのお話……」

『天才（ジーニアス）』の救済を求めし紙切れ

□

強くなりないのなら言い訳なく戦え
賢くなりたいたいのなら貪欲に求めろ
富が欲しいのなら他人を騙せ
名声が欲しいのならヒトを蹴落とせ

何か自らに能力を求むならば、
それは即ちそれ相応の覚悟が要る

もしも、汝が全能である事を望むなら
汝は孤独と共にあらなくてはならない、全てが可能なものは最早
ヒトではない
故に、ヒトの理解など求めてはならない

もしも、汝が無能である事を望むなら
汝は皆と共にあらなくてはならない、全てが不可能なものは必要
とされることは無い
故に、ヒトからの救済を得られる為に絆を育まねばならない

様々な人種、能力、性別、感情
それら全ての違いから、争いは生まれ命は絶たれ涙は止まること
を知らない

私は思っただ

今まで無能なものはいただろうか、と

愚かなものは掃いて捨てるほど見てきたが、無能なものは見たい事がない

ヒトは何かしら才能を持って生まれてくるのだから

もしも、無能なものがこの世に生を受けていたのなら

その時初めて、セカイは救われる

無能故に持ち得る唯一の才能

絶対の信頼をヒトに寄せる、愚かしいほどに真っ直ぐで、比類なき程に尊いその才能で

私は信じている

何時しか、無能なものが王となり生きとしいける全てのものと共に、頂点の頂に辿りつくのだと

そして、その頂にて孤独と共に生きる全能へと

真っ直ぐに手を伸ばしてくれることを、

私は何時までも何時までも、信じ続けている……』 <名も無き『
天才』の救済を望むモノ>

回想と日常

少し強めの風、柔らかな温かい季節

優しく差し込む木漏れ日、とても穏やかでまどろみを誘う心地良さが身体を包む

セピアと白の花弁が舞うその場所で、一人の少年がすやすやと眠っていた

栗色の髪が時折、その少女のように愛らしい頬を撫でてはゆるりと肩に掛かり、

分厚い本を抱えるようにして眠ったまま小さく、誰かの名を呟き幸せそうに笑い本をぎゅっと抱き締める

ふと、その少年に静かに少女が近づいていく

大きな眼鏡をかけ、眠っている少年と同じくらいの大きさの本を両手に抱えている

待ち合わせをしていたのだろうか……

待ち人が来たというのにまだ眠っている彼を見て、お人形のように整っている顔が苦笑の色を燈す

舞う花弁と同じ、白の長い髪をかき上げながら少女は少年にゆっくりと近づき、

『
』

名を呼ぶその声に誘われたのか、

眠っていた少年が赤と黒、蒼と翠がそれぞれ入り混じった右左の瞳を開き、少女を見据え微笑む

少女へ小さく柔らかな手を伸ばし、彼は優しくその名を口にした

『——「お目覚め下さい葵様、殺しますよ？」——!？」』

嫌な予感……を越えた殺気に飛び起きると、サラサラのセピア色のツインテール、海を思わす青い瞳をした少女―セイレン―が椅子を振りかぶり、つてええ?!

「っおおお起きた起きた起きたぜっ!!!」

「ああ、お早うございます、バット……ぐつとなタイミングで私も嬉しいです」

親指をぐつ……と立てるが何時もの無表情は変わらない

ちなみに、和風の服装が助長する貧乳具合も何時もどおりである

(……つて、ちよっとおい待てっ!!!)

「ちよ、おまつ、今バットって言ったろ?!なあ、言った、言ったよな?!」

「うるさいです、おだまりなさい」

目が胸の部分にいったのに勘付いたのか不機嫌な顔を隠そうともせず、

夫婦喧嘩またかよーと、笑っている教室のクラスメイト達をも無視し、セイレンはそのまま重力の力も借りて……

せーの、という声さえも聞こえそうな勢いで俺の頭に振り下ろす

（——つつっ!!?）

ガツンッ、と音が頭に輪唱するように響き広がり、冗談抜きでリアルデフォルメお星様が目の前をチカチカと飛び抜ける
何とか、強制シャットダウンしようとする意識に逆らったが、

「あ、まだお目覚めですね」

「つつ……お、まえが起こしたんだ、つが!!」

続けざまに來た、横からのフルスイングに視界がブレる感覚と腰辺りに來た激しい激痛に、何て理不尽なんだ!と、泣きそうになる
薄れる視界で、三発目をチャージ中の俺のマイハニー（ただ今絶賛片思い!）が俺の頭に向かって大きく振りかぶって、

「こーらこらこら!!セイレן=マクシス、二発までにしときなさ
いって言うてんじゃんよ!!」

パシッ、とセイレンの細い腕を掴み教師ジャンスが苦笑する

……丁度、俺の眼前5cmの辺りで椅子がピタリッと止まっていた
椅子を持っている張本人は少し考えるような素振りをした後、椅子を下ろし手をポンッと叩く

「……そうでしたね、忘れていました」

（つて、忘れんなよっ!）

そもそも何で二回までは黙認されるんだ、と内心では暴れているが
表面では正直喋れない

セイレンの言葉以外聞き取れない、はは、愛の差だぜ

「教師ジャンス、もう殺してもいいですか？変態の目をして私を見えます、破廉恥です、犯罪です、死ねばいいのに」

「はは、最後のはちよつとねえ……」

何気に酷いことを言っている二人に、正直俺の意識はもうあの空の彼方へ旅立つ寸前である

かなりどうしようか迷ってるんだＺＥツ　！！と、最早脳があじやばー状態である

……あ、元々だった

「せ、先生……あの……」

ふいに、小さいけれど鈴を転がしたような綺麗な声が聞こえた
ああ、この儚く守ってやりたいと思わせる美声は恐らく、

「お、どしたフェルディーン＝アラン？」

傾国の美声の持ち主（姿も滅茶苦茶可愛いんだぜ！）フェルちゃんだ
少しおどしているがそれがまた、いい……いいっ！

「……教師ジャンス、殺していいですよ、ええそうですよね許可を貰いましたので殺ります」

「ふええ、だ、だめえっ！！」

またもや俺の眼前３ｃｍ（近いっ！）で椅子が止まる
直後、呆れたような教師の苦笑が聞こえ……

「じゃあ、葵＝ウィンデル＝ひすいを保健室までよろしくするわ、フェルディーン＝アラン」

「は、はいっ！」

「食われないよう、お気をつけください、何かあったら大声を上げて民家に助けを求めるのがいいかと思われます」

（俺は不審者かなんかかよ?!）

好きなヒトに此処まで嫌われているのはショックだ、ショック……カアルチャアアアショック!!!!

俺が精神的ショックでぐらついた所を、いい匂いのする豊かなクツシヨンが受け止めた

おお、マシユマ口通り越してなんだ、なんだこの感触は!!俺のゲージが上がるんだぜっ!!

てか、それ以前にこの感触をもつのは二人しか居ない!!ってことでこの俺と同じ洗髪料の臭いは……!!

「ふっふふふ!教師、私様もドレウィーを介抱しに授業サボるわ!サボるサボる、サボタージュよ!!クハハ、素晴らしいっ素晴らしいっすぎる!!ってことで行くわ!」

「おいおいおい……弟心配を建前にサボるなアイシス!!ウィンデル……また留年すつぞ?」

そう、俺の姉、学校で一、二位を争う豊富な胸の持ち主

教師の言葉に、姉は俺をその胸に押し付け、付け、うつつ息がっ……

（む、胸で窒息など、全国の美女が、まだ見ぬ俺の嫁が泣き過ぎて世界が沈むぜってか、まじ、し……っ）

急速に薄れていく意識の中、楽しい姉達の声聞いた気がした

「あははははっ!!その時はこのドレウィーも一緒よ!!サラバツ!」

「あ、えと、その、待ってくださいアイシス先輩!」

「あー、しゃーねえから起きたら戻って来いよ!!」

「アイアイサー!!」

あの三人、

約一名は気絶していたが、取り合えず送り出した後授業を再開しようとして黒板に向かうと、

「…………教師ジャンス」

あの三人が出て行った後をぼ…………と眺めていたセイレン「マクシスが僅かに寂しそうな顔でオレを見る

ん、何？と先を促すと口を開こうとするが、すぐ閉じて自分の席に着いてしまう

そしてまたちらちらと三人の出て行った扉を見ては、オレを寂しげにじつ…………と見るを繰り返す

（はっはーん、なんだあいつ…………葵も隅に置けんなあ…………）

葵、と癖で心の中で名前呼びになっている事に気付いて思わず苦笑する

血は繋がって居ないが、葵とアイシスとは家族…………養子、という訳でもないが何故か同じ家に住むことになった為、家族と俺は思っている

だからつい…………って、イカンイカン、教師は公平じゃないとな頭を振って思考から追い出すと、どうやら自分に苦笑したと思っらしいセイレン「マクシスが微かに赤くなる

初々しいその姿に自然とにやけかけるが、ばれないように黒板へと振り返ると、

「先生えー、俺も葵んとこ行っちゃ駄目っすかー」

「あ、アタシも行っちゃ駄目ですか？」

「あ、うちもー」

「僕もー」

皆が皆立ち上がり挙手してオレを見る

（ああもう、コイツ等ときたら……）

普段は殴る蹴る笑うからかうのオンパレードなのに、

寝込んだり誰かがやり過ぎたりすると、途端に葵を心配しだす

愛されてんねー……と、微笑ましくなるがこんなに大人数で行けば

校長が怖い

そう、葵が心に傷を負った……などと勘違いして泣き喚き正直煩いのだ、何を命令し出すかも分かったもんじゃないし……

「……取り合えず、放課後まで後2時限だ、それまで我慢な」

そう言い、黒板に向かうと一斉に生徒全員がブーイングしてきた
侮り難し、1年B組

取り合えずなだめつつ、何故葵がこんなにも皆に心配されているのか分かっていないらしいセイレンの戸惑うような不思議そうな顔をチラッと見て、苦笑する

（なんだ、アイツ好きだ好きだいう割には何も話してないのか）

初心だねえ……と、ストレートな馬鹿を思い浮かべては、

「おら、嫌いぞおまえら……」

「にぎやっ……」

「おお、教師ジャンスは今日もチョーク投げ絶好調……あえだっ！
？」

「はは、黒板消し飛ばしもみたいだね」

いまだ過去を引きずり回し、内側はあの時の……

死にかけゾンビのような青白い顔のままなんだろうなあと、不甲斐なく思い、笑った

乾いた笑いになっていないかが、少しだけ気になった

回想と日常（後書き）

主人公：葵ⅡウィンデルⅡひすい

呼び名：葵、ひすいクン、葵様、馬鹿

参考：世界最大級の馬鹿 & a m p ・女の子好き（現在はセイレンに猛烈片思い中…… だけど女の子好き）
↑

ヒロイン1：セイレンⅡマクレス

呼び名：セイレン、セレン、マクレス

参考：貧乳無表情主人公に対してのみバイオレンスティックなお人形さん並みに整った顔立ちの少女

ヒロイン2：フェルディーンⅡアラン

呼び名：フェルディーン、フェルちゃん、アラン

参考：貧乳傾国の美声おどおど優しい幼馴染で皆の癒し系、ずっと昔のある事件をキツカケに右目を失っている

ヒロイン3（？）：アイシスⅡウィンデル

呼び名：姉ねえちゃん、アイっちゃん、アイシス、ウィンデル

参考：学校で一、二位を争う豊乳の持ち主で私様（俺様の改良版）で弟の主人公をドレウィー（訳：奴隷）と言うが大事な場面では空気を読む、てか弟が可愛いお年頃

教師：ジャンスⅡウィンデル

呼び名：教師、教師ジャンス、ウィンデル氏

参考：主人公のクラス1年B組の問題児を上手くやりくるめる凄い人で主人公、アイシスとは家族という括り、ちなみに血縁関係は皆無

トラウマ+馬鹿騒ぎ=平和な一日(前書き)

感想、鍵猫様、どうも有難う御座いますッ!!

トラウマ+馬鹿騒ぎⅡ平和な一日

空が赤い

風も赤く、そして熱い

全てを飲み込まんとする炎が燃え上がり其処にあるだけのモノにさえ襲いかかる

『っはあ……はあっ……!!』

むせ返るような暑さと、血の臭いと、炎の中……一人の少年が走る胸に少女と交換しあった大きな本を抱いて、息が切れるのにも関わらず荒れ果てた、別世界のような見知った場所をただただ走る
目指すのはそう、少女と何時も約束を交わすあのヒカリ溢れる優しい空間

『はあっ……あ!!そん、な……』

ガクンッ、と少年が膝を付く
色の違う双方の目に映るのは、優しかった思い出を否定するかのように荒れ果てた場所

木漏れ日で何時もまどろませてくれた大きな木が、燃えていた
少女を待つ間寝転がっていると何時も優しく受け止めてくれた芝生が、挟れていた

頬を撫でるように吹いていた心地よい風が、熱く荒々しいものに変わっていた

白とセピアの花弁を躍らせ舞っていた美しい花が、枯れていた
全てがそう、優しい思い出を否定するかのように……

ただただ呆然としている少年の大きな瞳から、涙が零れる
声は上げない、たが押し殺している訳でもない
悲しみを感じる心が麻痺したかのように、ただただ放心した顔で涙
だけを流す

『……………あお、い……………？』

ふと、立ち尽くす少年の耳に、聞きなれた少女の声が入る
はっ、として振り向くと何時もと同じ姿の少女がいた

『っ、無事だったんだね！』

涙を拭い嬉しげに少女の下へ走る少年に、少女は怯えたように叫ぶ

『来ちゃダメッ！！』

『えっ……………？』

あと少し、そのタイミングで少女の声と同時に風の音が聞こえ、

『いやぁっ！！あおいっ！！！！』

見えたのは少女の絶望と怯えに満ちた声と周りに飛び散る赤いアカ
イ…………

「ドオオオオレエエウイイイ！！！！！！」
「ぶふうっ？！」

よく分からない掛け声と共に、身体の上に何かが押し掛かる
凄まじい弾力を持ったいい匂いのする何かが…… つかギブギブツ
！！死ぬ、死ぬ！！

「あ、あのアイシス先輩っ！ ひすいクン潰れてますっ」

「あら、このドレウィー私様の胸に潰れて圧死しそうなね！ やつてみたいけど呆気ないの嫌いだからやってやらない！！ 嫌い、嫌いよ呆気ないのねえ！！」

ああ、相変わらず姉ねえちゃん姉ねえちゃんだな……

そんな事を思いながら、頬を容赦なくビンタされつつ上体を起こすきやは、とか言いながら体勢を崩した姉ねえちゃんを反射的に抱きとめると、まるで成長を喜ぶ母のような顔をし、頭を撫でられる

「ふふふ、ドレウィーも一端の狼紳士のスキルを手に入れたようね！ これで赤頭巾ちゃんを攻略出切るわ！！」

「おおお、さっすが！！ 姉ねえちゃん、その狼紳士ってのかけえ！！」

きやいきやいと、そのままの体勢で何時ものように騒いで居ると、微笑みながら見ていたフェルちゃんがふいに、俺の額に触れるひんやりとしたその感触と、優しく撫でられる感覚が思いの他心地良く…… 目を閉じて身を任せていると、思考が徐々にぼんやりとしてくる

「ひすいクン、撫でられるの、好きなんだね」

フェルちゃんだからだよ、と告げると嬉しげに笑うのが見えたそのまま撫でられていくと、さっき見ていた嫌な——過去という名の悪夢——それを見たくない、と気張っていた身体から力が抜けて

いく

ああ、不味いなあ……ぼんやりと頭の隅で思った瞬間、姉ねえちゃんに柔らかな頬を包まれる

「葵、もう一眠りしなさい？今度は怖い夢見ないよう、一緒に寝てあげるから」

「わ、私も……その、一緒に、側にいるから……安心して、ね？」

まるで子供扱い、だよなあ……ふと、そんな事を思い

（てか、得役だけど、さ……）

情けねえ、本当に……情けねえ、やっぱり、俺って……微かに抱いた自己嫌悪は睡魔と、ゆっくりと身体を包み込む二つの体温に掻き消され

「ん……」

トロン……と、意識が蕩けるように沈んでいった

▲ ▼ ▲ ▼

二人して抱き締めると、頑なに拒んでいた眠りへと葵は誘われていった

こちらに身を任せ、子供のように幼い顔で眠る彼を眺めながら小さく笑うと、フェルが珍しいものを見たとも言いたげな表情でこちら見ていた

「なあに、そんなに珍しいかしら、私様の微笑」

「あ、え、その……はい、とっても……その笑みの色は……珍しいです」

「……笑みの色？」

（笑みに、色なんてあったかしら？）

少し首を傾げると、フェルがしまった、といった顔を少し焦ったように何でも無いですつ、と叫び

もそもそ……と、眠っている葵に更にくっつくように布団に潜り込む（あらあら、葵も隅に置けないわねえ……私様ちよつと妬けちゃうわよーいゃん、クリーム塗らなきゃッー！）

頬を押さえ腰を少し揺らすと、ギシッ、とベットが軋む音が上がる

「……………」

もう一度揺らすと、やはりギシッと軋む間違うことなく、ギシッと、軋んでいる

「あ、あの……アイシス、先輩……？」

フェルが眠る葵に抱きつきながら、怯えたような声をあげる

その様子と、以前より太ったかもしれない……という懸念に、何かがこみ上げてきて……

「っ、う、うらやましいなんて思っていないんだからねーいゃんっ！」

「へ、え、せんぱ、ひうあ？！」

膝立ちになり、回りも気にせず激しく身体全体を思いっきり揺らす途中フェルの悲鳴のような声が聞こえた気がしたが、それどころではない

(ドレウィーの分際で、もうっ！私様に嫉妬の心を抱かすなんて……いやん、ステキッ！！)

ギシッギシッギシッギシッ、と休まず揺らすと何となく腰辺りがシエイプアップされた気がした

「ふふん、これはこれでいい……いいわっ！！」

「ひいんっ、せんぱ、あやややーっ?!」

●
●
●
●

「よし、じゃあ今日の授業は此処まで写せたらオレに見せに来て、終わりな」

一瞬にして此れでもか、とばかりに黒板前面に書き殴るように今日の授業内容をまとめた教師ジャンスは、必死に写し取っている生徒達を見て微笑んでいた

(……何時もと違い、何故最後にまとめを……?)

奇妙な教師ジャンスの行動……理解は出来ないが、逆らう理由も無いので大人しく従う事にした

教師ジャンスの文字は、よく言って走り書き……悪く言えば、ただのミミズが黒板中を這っているに過ぎない

一つ上の行に文字を重ねるわ、間違った文字をそのまま何本か線を加えて無理やり文字にするわ、挙句の果てに……「あー、めんどいから教科書見るか、うん、うわあー……綺麗な文字だな、今度からこれ見よう、先生書くのめんどいわ」などと、給料詐欺もいい所だ……と、客観的に分析して当て嵌まる

そうこうしている内に、一番早い生徒が終わり、二人目、三人目……

…と、次々と終わり許可を貰って教室を飛び出していく

（皆様、葵様を慕ってらっしゃるのでしょうか？）

ぼんやりと、手にノートや辞書、筆箱、鞆…何故かハリセーンを持って出て行こうとする皆様を見てみると、教師ジャンスが苦笑する

「あー……お前ら、暴力はあんまし」

「愛・情・表・現ッ……！」

思わず、教師ジャンスも引く程の剣幕で返した彼らは廊下に飛び出し、そのまま失踪した

……しばらくして、何かを蹴飛ばした音と、何かが零れる音……そして、「貴様等……走るなやああああっ……！」と、事務のおじ様の悲鳴が聞こえた

（ええ分かります、皆様あのハリセーンでドメスティックバイオレンスのような事を早く葵様にしてさしあげたいのですね、暴力は愛情表現でありますから）

そこまで考えて、教師ジャンスの黒板消し飛ばしやチョーク飛ばしは、やはり愛情表現の一環……そういう結論に至った

（さすが、生徒思いでありますね……侮り難し、教師ジャンス）
コクリ、と頷きながら書き綴っていると、

「うああああ？！おま、おまつ、おまえらちよっ」

「両手に花で眠ってるたあいご身分だなこの野郎」

「ああ？あ、本当だ……いい匂いがすると思ったら、俺ってば得役じゃん……！」

「……あああああああああつ成敗……！」

「げ、ちよ、あだだだだっ……！」

聞き慣れた悲鳴とハリセーン協奏曲が聞こえ静かになった

ああ、皆様の愛情表現は無事成功したようですね……そう思い、最

後の一行を書き終え顔を上げると、

「……何時の間にか、最後となっておりましたね」

窓から見えるのは茜色に染まった空

視線を戻し前を見ると、教壇の机にもたれ掛かりながら教師ジャンスが眠っているのが見えた

（……どうしたものでしょうか）

許可が貰えないと帰れない……なのに、教師ジャンスは眠っているじつと見ていても起きる様子が無く……爆睡中のようだ、と結論付け、

手を軽く……透明な壁に添わすように上げ、静止させると、音も無くディスプレイ画面のようなものが現れる

「……この状態を記録し、後で咎められる状況に陥ったならば校長ライムに提出すると脅す事を選択します」

ピツという音と共に、

<了解致しました>と画面に表示され、それ——アイコン——がカメラモードとなり……難なく物的証拠を手に入れたそれを確認し、証拠隠滅……と上げていた手を下げ、アイコンを消す何事も無かったように帰り支度をしていると、

「あのお……」

廊下側の扉から、若干舌つ足らずの甘い声が聞こえた顔を上げると見えたのは、クラスメイトの……

「ああ、黒髪ロング巫女の豊乳マゾヒスト魔、楓様ではありませんか」

「あう、ま、マゾヒスト……ゾクゾクする響き……」

恍惚とした表情を浮かべる楓様は、今日もマゾヒスト絶好調の様子（ふむ、どうやら黒髪ロング巫女の豊乳ドM魔、と改める必要があるようです……）

密かに、頭の中の情報を書き換えていると、

「って、こんなことをするつもりで来た訳じゃないですよ！セイレンさん、今書き終わった所ですよねぇ？」

「はい、楓様の目が胸に栄養を取られ過ぎて節穴になっていないならば、そう判断して頂いてよろしいかと」

「はうっ……な、なんかゾクゾク来ますねぇ……って、私Mじゃないですよ？！」

「はい、大丈夫であります、楓様はドMで御座います」

「ううう……毒舌って、い、いい……じゃ、じゃなくて!!」

パンツ、と顔を真っ赤にしながら私の机を叩く楓様

（ああ、楓様は人外の、特に無機質な机にラブを感じる御方でしたか……新発見です）

メモメモ……と、楓様には見えないように記し本題に戻る頃合だと判断する

「それで、どういった御用ですか？」

「あ、え、ああ……葵クンを一緒に迎えに行きませんか？」

「なるほど、そうして私と葵様両方に苛めてもらう魂胆ですか」

「はあ、想像しただけでゾクゾク……って違います違います違いますうう!!!」

パンツパンツパンツ、と私の机に愛情表現をする楓様

（……そんなに迫らなくても、机は逃げないのに……初心ですね、

ああそうだ、気に入っているようなので差し上げることにしましう、明日くらいに)

代わりに私は、隣の葵様の机を貰いましょう……密かに明日の計画を立て、まだ顔を真っ赤にして否定している楓様に、

「煩いですよ、弄られたいなら御黙りなさい」

「あう！もって弄ってえっ！！じゃ、な、なななくてっ……！！」

パクパク、と口を動かし、今しがた言ってしまった本音に混乱している楓様の頭から湯気が……

「……おいおいおい、お前さん等……何してんさ、神聖な教室で？」

「あ、日々楓様を苛めて悦楽を得ている自称紳士な黒髪ドS、鴻苑様……葵様流に言えば、公園様」

「ってご挨拶さねえ、相変わらず……ってか、公園は止めれ、オレ、そんな口利かないように素直にしたいくなるんさ」

「それはいけませんね、全力で回避させて頂きたくあります」

私の言葉に、にいつと鴻苑様が笑い、誘うような黒の瞳を向けてくる（ああ、そういえば、本に書いてありましたね……）

友情とは、時には殴りあい蹴りあい、動けなくなるまで戦いお互いの健闘を讃え合うのだと

と、いう事は鴻苑様は、私と友情を育みたいのでしょうか
ならば……

「——もちろん、実力行使を持つて」

言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、鴻苑様が何かを横に振った

反射的に楓様を教師ジャンスがいる方へ蹴り飛ばし（いつ、もつと蹴ってえ！！By楓）バックステップで飛び去る

見えたのは、白銀の棒状の何か——金属バットだった

（……用意周到な方ですね……女性に人気があるでしょう）

そんな事を考えている間にも、鴻苑様がバットを持って飛び掛ってくる

ふと、これは淑女暴行——もとい、犯罪——ではないのか……と、思いあたった

すなわち、そう

「セクハラですね」

「っは、へ?!」

ピタッ、と鼻先5cmの辺りで金属バットが緊急静止する

心なしか、鴻苑様が震えている……その様子を表すなら、そんなまさかつ、いや、違う……といった感じだろう

「もう一度います、男の子から女の子に言い寄る、それは正にセクハラ……セクシャルハラスメントではありませんか」

「うっ」

「当然、紳士の風上にも置けません」

「ぐあっ」

「しかも貴方は、私の返事を聞く前から武器を用意してらっしゃった……ただの野獣ではありませんか」

「ふぐうっ」

わなわな、と震える鴻苑様

最早最初の勢いは何処へやら……の、状態に私はせめてもの情けに、静かに葵様の椅子を手取る

「紳士なドSと名乗っている割にはこの有様……ヘタレですね」
「がはっ」

「いえ、最早……うじ虫ですね」

「あぐうっ」

「……ちゃんとしてんのかこのヘタレうじ虫変態野郎……で、あります」

「ぐはあっっ!!」

どうやら今の言葉がクリティカルヒットしたらしく……戦意消失したように膝を付く鴻苑様

ちなみに、眠っている教師ジャンスの近くでは、楓様が物欲しそうに顔を真っ赤にしてこちらを見ていたので、

「見てんじゃねえぞこのドMド変態めっ……で、あります」と言う
と、鼻血を噴出しダウンした

取り合えず無視し、廊下を背に葵様の椅子を大きく振りかぶる

「敗者に情けをかけてはプライドを挫くらしいですね、ですので思
いっきり……やります」

今まで殴ってきた中で……葵様を殴るスピードに続く二番目の速
さで、椅子を振り下ろしていく
狙うは、頂垂れている頭……

これできつと鴻苑様はプライドが挫かれる事無く、復帰できるだろ
う……そう思い、振り切ろうとした、瞬間

——むにゅ……——

「……………はい？」

胸に、何が触れた

加えて言えば、後ろから抱きすくめられている感覚がある

そこまでは理解出来たが、突然の事に思考が停止する

振り下ろしかけていた椅子も中途半端な場所で止まり、身体の動きまで停止する……それに気をよくしたのか、

——むに、むにむに——

胸に触れていた何かが、遠慮なしに動く

顔を蒼ざめつつも、真っ赤にしている楓様が、私の後ろを必死で指差す

何が……ようやく動き始めた思考で感じたのは、後ろから香ってきた見知った匂い

それと同時に、

「セイレン、そういう事していいのは俺だけだって言ってるだろ？
確実に他の奴だと死ぬからさ……てか、セイレン……案外柔らかいんだな！！もつとハードなのを想像してたぜ！！」

本日二度目の、思考停止が訪れた

- - - - -

保健室での襲撃の後、あれだけの騒ぎにも関わらず寝ていた姉ねえちゃんとフェルちゃんに布団を掛け、何だか大変なことになっていると直感したので俺のやり方で止めてみたが……

（あつれえ、可笑しいな？）

俺はセイレンの胸を揉……めるほど無かった……触りながら、首を傾げる

もつとハードなのを想像していたのだが、存外柔らかい……ずっと触っていたと思う感触だ

と、まあそれはそれとして……困った、セイレンが動かない

殴られるくらいはしてくる、と思っていたのに、期待を裏切り動かない

（つて、べ、別に、セイレンに殴られるのが好きな訳じゃないんだからな！！）

混乱し過ぎて自分に言い訳を始めている、厄介な状況だ

ちなみに、何故か教壇の机で寝ていた先生が何時の間にか起きて…

…若干落ち込んでる鴻苑と、興奮したり蒼ざめたり忙しい楓を引っ張って出て行った

「セイレン？」

胸から手を離し、セイレンの身体から離れる

脇腹に手が掠めた時、ピクリツと反応があった……ふむ、弱点はあそこか……じゃ、なくて、

「えーと、怒った？」

顔を覗きこむと、微かに顔を赤くして……

不覚にも、その顔にドキッと胸が高鳴った

「き………」

小さく震えながら、セイレンが、き……と音を発する

おお、まさか……き、から始まる言葉といえば……

（え、何、もしかして「き」から始まる可愛らしい悲鳴あげちゃうわけ?! え、あのセイレンが、このセイレンが?!）
期待と、ほんの少しの不安に頭が混乱し出す

ここでもし、セイレンが「き」から始まる可愛らしい悲鳴を言えば、俺の中で過去が肯定される

セイレンはやっぱり、『あの子』なのだと、肯定してしまう
期待と不安が入り混じる嫌な時間がほんの少し流れる

そして、待ち望んだ回答が今……セイレンの、彼女の口から……

「き、ちがい……っ!!」

（え、え、そっち?!）

びくびくドキドキして損したあ!!と、内心残念にも安堵にも似た
気分陥った瞬間、

視界がブレ、腰辺りに激痛が走るというデジャビュを経験した

「いいいいってえ、アガッ!!」

続けざまに、今度は頭に……またしてもデジャビュだ

今日はデジャビュ記念日としておこう、と心の中にメモしてから、
ふらふらする頭を押さえ何とか立ち上がる

と、同時に今度は背中に衝撃が来た

「ふっ……!!」

息が、詰まる

無様に床に転がり、続けざまに来た頭へのもう一撃に視界がぼやけると、その時やっとなにが口を開く

「っ、の、変態！うじ虫っ！ケダモノっ！……っ、はぁ……セクハラです」

途中から落ち着いたらしく、ドカ、ガンッ、ゲシゲシッ、とセイレンは蹴り飛ばしてくるだけになった
そして、抵抗すら出来ない俺をふみふみ……と、踏みながら、

「……私が折角……何時もより早く、ノート写し、したというのに……」

ポツリと、呟かれる言葉

正直蹴られ叩かれ過ぎて視界がぼんやりとしているが、寂しげなその顔（脳内補整でセイレンは何時もクリアなんだぜ！）を見て……無意識に、口端が上がる

（ああ……全然脈ねえと思ってたけど、良かった……嫌われてはねえみたいだ）

セイレンはただ、不器用なだけの女の子なのかもしれない
言葉に、行動に上手く表せなくて……こういった暴力行為で表現するしかないのかもしれない
そう思うと、蹴る殴る踏む叩きのめす、その一つ一つの行為がセイレンによって行われると思うと愛おしく……

「何蹴られて喜んでいるのですか、ドMですか変態ですかキモいですよ、もう存在自体がセクハラですのでご臨終下さい」

そんな声と同時に視界が大幅にブレ、続けざまにガンッ……と、衝撃が襲い、

「――！――！」

本日三度目のデジャビュを経験した、と認識したと同時に何も分からなくなった

……次に目が覚めた時思ったのは、
セイレンと居ると、自分が何時か本当にドMになりそうで怖いなあ
……ということ
冗談で済めばいいと、本^{マジ}気で思った

トラウマ+馬鹿騒ぎⅡ平和な一日（後書き）

ヒロイン4：比奈乃ひなの 楓かえで

呼び名：楓、比奈乃

参考：黒髪ロング豊乳ドMな巫女さん。兎に角物凄くドMで、苛められるのが大好き。鴻苑クンとは、結構仲良し、双子のお姉さんが居る

友達：東ひがし 鴻苑こうえん

呼び名：鴻苑、東、公園（笑）

参考：自称ドSな紳士、だが毒舌なセイレンには勝てなかったもよう……中途半端に紳士で中途半端にS、即ちヘタレ

無人島＋課外授業Ⅱサバイバル

空が、青い

……昨日も青かったけど何となく改めて思ってみた
目を閉じて、もう一度開く

「空、青い」

やはり、空はどこまでもどこまでも青い
この時期は何時もそうだ、天気は崩れず快晴が数週間と続く

「……嫌いじゃ、ねえんだけどなあ……」

んー、と伸びをしながら寝転がっていた芝生から身を起こし、頭を
掻きながら眼下——今いる崖の上から約50m下——を見やる

其処には、クラスメイト達が俺を除いて全員居る

なんせ、今日は地獄の課外授業——無人島で実戦模擬——だ

ちなみに手元にあるプリントからするに今回の内容は……『鬼』と

呼ばれる一人を『桃太郎』と呼ばれる他、1年B組全員が追いかける
期間は開始の合図から日没まで

それまでに、どんな手を使ってでも『鬼』に触れれば触れた『桃太
郎』の勝ち、逃げ切れば『鬼』の勝ち
単純なサバイバルである

「はあー……」

そして俺は、本日5度目の溜息を吐き下をぼんやりと見る
聞こえてくるのは、先生と皆の声で……

「さあて、今日のサバイバルの『鬼』は皆も知っての通り、葵〃ウ
インデル〃ひすいだ」

「おー、楽勝じゃん！」

「はは、そう思って今回の『桃太郎』の制約は『鬼』の半径3m以
内は、自分から近づいちゃいけない、だからな」

「それでも楽勝っスよ！！」

（おいおいおいおい、案外ひでえなー）

まあ事実だけだよ、と崖の上から笑いながら静観することにした

何せ、俺は今回のサバイバルの『鬼』だ

クラス全員で俺を含めて10人、王様ゲーム宜しくのくじ引きで引
き当てたのには、正直運が無さ過ぎると泣きたいくらいだ

他のクラスから、「もう無理だ！」と追い出された問題児集合体の
寄せ集めである1年B組を全て敵に回すことになった

しかも、俺以外はただ個性が強過ぎただけで戦闘能力がかなり強い
のだ、皆何かしら特殊能力を扱える
ははは、泣きたいぜこんちきしょう

「おいおいお前等、『鬼』が弱いと『桃太郎』同士でのやり合いが
激しくなんの知ってんだろ？」

「あー……確かに、最初に触れたもん勝ちなんさもんねえ」

「早い者勝ち、だもんねえ……は！も、もしかしたら……私が頑張
ったら皆妨害に来てくれるかもお？！」

「はは……ドMさねえ、楓は」

「はう、鴻苑クン……一日経って復活してるう、素敵っ！！」

頬を染めて鴻苑に抱きつく楓に皆が苦笑しているのが見えた
心の中を代弁するなら、『もうお前等お似合いだからくっ付けよ』
って所だろう

（さすが、真性ドMだよなあ……けど、ドMは侮り難し）

妨害されようと恐らく本気で頑張ってくる筈だ

飛道具が得意な比奈乃は、本気になればどんなに遠くとも命中させる事が出来る……ちなみに、本気モードのキーワードは、『頑張れば苛めてやるよ』だ

……ドMも此処まで来たら最早神だ、神

「ようし、お前等！気合入れていけよ！一番の奴にはなんと、授業サボリ券6枚を贈呈だからな」

「おおつつ！！！」

先生の言葉に皆の眼つきが一瞬にして変わる、そりゃあもう色んな意味で……

まあ共通してるのは、

「かなり、張り切ってんなあ」

これは本気で逃げないと殺されるかもしれない
何せ相手は、倒れて保健室で寝ていた罪無き俺（昨日のあれは事故だ、故意であんなことする訳さすがにねえぜ！）を襲撃する外道共だ、鬼畜街道まっしぐらの鬼だ、鬼
故に色々と現実逃避しちまう訳であって、

「あー……今日もセイレンは可愛いなあ……」

ツインテール＋貧乳＝最強だ、いや、正義だ

隣にいるフェルちゃんは可愛い、兎に角もう癒される、心の良心だ
その前に居る姉ねえちゃんは……

「いい、いいわ！逃げるドレウィーを捕まえる私様……そしてその
後お仕置きと称してあーんなことやこーんなこと」

「おいおい、授業中くらいは自重しろ、アイシス＝ウィンデル」

言うまでもない、絶好調だ

（にぎやー、とか言いたい気分なんだけどさあ俺……これって降伏
なしだからなあ、負けたらペナルティだし……）

「おおう、本格的に落ちこぼれの俺を辱める授業だぜい！！」

言ってから想像した……なんか良いかもしれない、新たな扉が開か
れそうな……

しかも相手がセイレンなら尚良し！！俺犬にでも下僕にでも喜んで
なっちゃうよ？！

「で、えー……大体こんな感じが、何か質問は？」

俺が妄想で悶えている間も眼下では真面目に授業が進む

皆黙って首を振っている姿に、

ふと、何時も何かは質問するあの二人——車椅子に乗っている儂く
も愛らしい金髪幼女、エリス＝リアライ（エリスちゃん）と、何時
もその車椅子を押す同級生B的な……もうお前等付き合っ（以下略）
的なウルシエン＝アズウィー（ウルシー、ロリコン）——が居ない
ことに気付いた

（……今日はエリスちゃんの両足のメンテナンスの日、だっけ？）
彼女の両足は、義足だ

何故かは、まだ知らないが……いつか話してくれると信じている

この所はお互い様だから

(……俺も左腕が肩から義腕な理由話せてねえし……ってか何俺、愛らしい幼女とペアルック的な?!やべえテンション上がったあつ!!!)

再び妄想世界にログインすると、

「さて……そろそろあの馬鹿が暇過ぎて犯罪級の妄想し始めてるか
ら皆、殺つてこーい!」

「イエッサーッ!!」

(って何か先生笑顔が恐ろしい……ってか、げ、始まった!!!)
妄想世界からログアウトするには十分過ぎる要因を与えられ、すぐ
さま身を起こしその場から離れようとする、と

「あの一」

「ひゃひい?!」

背後から聞こえた声に思わず裏返った声を上げながら振り返ると、
居たのは車椅子幼女、エリスちゃん

「って、僕のこと忘れてない?ねえ忘れてるよね?」

後ろのモブキャラである、珍しく眼鏡を着用している同級生Bはも
ちろん無視だ

あ、何か落ち込んだ

「みなさま、何してらっしゃるですか?」

きよとん、と首を傾げるエリスちゃん

表情は見た目に比べてかなり薄い、何処となくセイレンを思わせ
て愛らしい……って、俺はロリコンじゃありませんよ?……ホント

ダヨ？

「あー……今日はな、エリスちゃん、課外授業なんだよ」

「かがい……じゅぎょお？」

若干舌つ足らずで鸚鵡返しをするエリスちゃん

（ああ畜生カワウイーなこの野郎俺ロリもいけるわってかセイレンに継ぐ正義だわ、これ）

悶えかける……が、俺は狼紳士なので耐える

勇者よ、今はその時ではないのです……ほら、俺専用の妄想女神様（セイレン似）がこう言ってる！我慢だ俺！！

「そ、課外授業……『鬼』を『桃太郎』が追いかける奴、知ってるだろ？」

「あ、分かりましたです……エリスの好きなのですね」

ばあ……と、花が咲いたように微笑むエリスちゃん

（ああ畜生萌える……セイレンに継ぐ<以下略>）

さつき叫んだしそろそろ危ない……そう判断して、詳しい事は先生に聞いてくれ、と言葉を残しカッコよく去ろうとするが、

「ちょ、ちょっと待ってくれないかい？」

影の薄いモブ扱いされてるロリコンが話しかけてきた

ストレートに思った事を口に出したら凹んだ、いや沈んだ、しかも頭に……先がトイレのスポスポになってる矢が刺さって……ああ、幸の薄さもモブ並みかウルシー……って、まさか！

「おーっほっほっほいのほいっ！！見つけたわドレウィー！！さあ神妙にこの姉ねえ様に捕まりなさいっ！！」

「あ、まだ捕まっちゃだめえー！！妨害沢山されてからあー！！」

（どっちだよ、おい）

目の前で姉ねえちゃんと楓が騒ぎ出しているので突っ込むタイミングを失い、そのまま背を向ける
その時、

「あ、あの……ひすいクン」

所在なさげで不安そうな声が響く
守ってやりたくなる本能が騒ぐこの、ある意味で一番脅威な美しい
声が泣きそうに震え……

「い、行っちゃ……やだあっ……」

「——つつっ！！」

（これ反則じゃねえ？！なあそうだよなあ、おい？！）

反射的に振り返ってしまうのが悲しき男の性……振り返って後悔した、本泣き5秒前くらいの状態だ

（こ、これが演劇部の力か？！そうなのか、そうなんだな？！何て
けしからん、本能が騒ぐぜ！！）

一歩、思わず足がフェルちゃんに向く

安堵したような顔になるフェルちゃん、ポロリと涙を一粒流し……

「ひすいクンっ……」

零れた涙はそのままに、嬉しげに手を伸ばして近づいてくる

更に一歩、足がフェルちゃんに近づいた時、ゾクリと……ゾクリと、
背筋に寒気が走った

「……葵様……私だけでは飽き足らず、フェル様まで毒牙にかける
と言つのですか」

「あ、せ、セイレンっ?! って、毒牙にかけるって、俺まだ妄想の
中ですらしてねえよ?!」

「当たり前です、そんな事をしていればこの世界から抹殺しますか
ら、ええ痕跡一つ残さずに」

セイレンが、何かを水平に構える

手に握っているそれは正しく……刀ですかい?!

「え、ちょ、マジそれ死ぬって!!」

「ええ、ですから……死んでください」

ひゅん、と音が聞こえた……そう感じた瞬間、俺の身体は垂直に高
く高く空に舞っていて

(え……?)

身体はちゃんと離れていない、そう認識したと同時に意識が白んで
いく

微かに薄れる視界で見えたのが、俺の垂直真下辺りにセイレンが立
ち、じつ……と落ちてくるのを待っている姿

目の前に俺が落ちてから拾おうとは、思っただけらしく、受け止め
ようと手を広げていた

そんなセイレンに、思わず温かいものがこみ上げてくる

(案外、優しいよなあ……バイオレンスティックで歩く毒舌だけど
……って、あ)

ふと思った、セイレンに出会ってから毎日と言っていいほど気絶さ
せられてるよなあ……と……

偶にはラブラブみたいなのしてみたい、と思ったと同時に視界がシ
ャットダウンした

セイレンの気配を感じ、安堵のような溜息が聞こえた瞬間、

「……っ!!」

重力に従って落ちている筈の身体が、急激に吹き飛ぶ感覚を感じて
セイレンの気配が遠ざかり……

「葵様……っ!!」少しだけ焦ったような声が聞こえたと同時に、
残っていた意識が途切れた

本日の課外授業……

物凄い勢いで吹っ飛んで行く馬鹿が二回程目撃されたとかしなかつ
たとか

そして、太陽が無人島の真上に昇りきる……それが前半戦終了と共
に、静かに……後半戦が幕を開いた合図だった

無人島＋課外授業Ⅱサバイバル（後書き）

ヒロイン5：エリスⅡリアライ

呼び名：エリス、エリスちゃん

参考：儚く愛らしい車椅子金髪幼女で、両足が義足。年齢は10歳だが、何やら飛び級したらしく葵達と同じ学年

友達：ウルシエンⅡアズウイ

呼び名：ウルシー、ウルシー君、モブ男（笑）

参考：エリスの車椅子を押す役目として定着している、同級生B的なモブ並みの幸の薄さと、時たま影の薄さを誇るロリコン

順調＋予想外＝恐怖と不安と、泣きそうな叫び

(……身体が、痛え……)

ぼんやりとした意識の中で思うのは、そんな事身を起こすと、其処はどうやら森の中のように太陽も見えず、ただ森が続くだけだった

(此処、何処だ……いや、無人島だったのは知ってるけど……)

んー、と伸びをしながら体を回す

パキッ、やらポキッ、やら不吉な音がした……もう年なのかもしれない

「って、俺はまだピッチピチの16だぜ！」

自分に突っ込んでみた、虚しさが3上がった気がした

(ってかてかてか！俺なんでこんなとこに寝てんだよ、桃太郎に見つかったらヤバスッ……って、今まで見つからなかった俺スゲー！！)

鼻歌を歌いながら状況を確認する……うん、此処何処だー的なあれだな、ははは

よっこらせっ……と、立ち上がり、

(あ……？滝の音が、これ？)

何もする事が思いつかないので、遠くの方で聞こえた音に向かって耳を澄ますと、何やら他の音も聞こえる

ちなみに俺はこれでも、聴力視力共にランクSSS並みだ

……ウソじゃナイヨ？

「んー……静かだなあ、俺こっぴうの苦手だぜえー」

暫く歩いてしたが、ひっそりとしたこの森の雰囲気に寂しくなったので、セイレンや皆は今頃俺を捕まえようと気張ってんのかなあ、とか思ってみたりしたが……

「……………うわ、寒気した」

鬼の形相で物騒なものを振り回している姿が鮮明に浮かび、すぐ頭から消しのんびりと音を辿る事にした

義腕が少し軋んだ音を立て、痛みが走るのに気付かないフリをして……

▼ ▲ ▼ ▲

夢を、見ていた

ずっとずっと長い間ずっと……

それだけを望んだのに、それだけが全てだったのに、叶わなかった消えてしまいたいのに、消えさせてくれずまた残され……何も救えず独りきりになった夢……

「……………忘れたと、思ったんだがなあ……………」

滝の真横にある古びた小さな小屋の中で椅子に座る、黒い布で両目を隠した青年が嘲笑を浮かべ呟いた

彼の腕や足には鎖が巻き付いており、椅子から立ち上がれないように繋がれていた

その肩や小屋には、埃が降り積もっている

「今日……来んのかなあ」

義腕の両腕で、無雑作に伸びた琥珀の髪を掻き、端正な顔に不釣合いな不精髭に触れる

ちくちくーとか、感じたら面白いのになあ……そうクスクス笑う彼は、独りだった

「どっちでもいいけど……眠らせて欲しいぜ、まったく……」

すると、少しずれて見えた右目の色は赤と黒の混ざった……血のように暗く澱んだ色だった

●
●
●
●

「……………」

無人島全てが見渡せる程高い崖の上で、私はただ黙ってすぐ横を流れ落ちる滝の水を眺めていた

止まる事無く、流れ続ける大量の水

まるでヒトの感情のようですねと、ただ淡々と結論付けた

ふと、視線を感じ……その視線の方を向き直れば、フェルディン様がちょうど私に話しかけようとしている所だったらしく、安堵したように息を吐き言葉を続けようとする、が

「え、と……マクス、さ」

「セイレン！ドレウイーの居場所が何となくだけど分かったらしい

わよつてもう凄すぎよね、フェルディーンは!!」
「ふにゃ?!」

言葉をアイシス様に遮られるばかりか抱き締められ、その大きな…
…女性を象徴付けるアレ——大きいのが女の価値という訳ではあり
ません——で圧迫される

徐々に顔色が悪くなっている気がするのは、恐らく気のせいではな
いだろう

(……あなるほど、大きいと邪魔だと思いましたが使い方によつ
ては殺傷機能を兼ね揃えるのですね、興味深いです)

女の武器、というのはこれで亡くなられた方が居るからかもしれな
い……其処まで思い、アイシス様を見て、自分のを……見て見ぬ
フリをして、視線を戻す

「アイシス様、フェルディーン様がご臨終一步手前であります」
「ふふふ、女武器は女にも聞くって訳ね!女つて最強だわ!!」

見せ付けるように大きさを主張するアイシス様に、ふと自分のを…
…見なかった事にし、何とか会話を続行する

「……ソレより、葵様の居場所が分かったのでは?」

「そう、そう、そうなのよ!!ねえフェルディーン……って、ちょ
っと何寝てるの、起きなさい、ねえ?!」

「きゆうう……」

ゆさゆさと激しくアイシス様が振り回すが、どうやら本当に気絶し
てしまっているらしい

しつこく揺らすが、別な所が激しく揺れているのが目に入り……今
度は明後日の方向を見てやり過ごした

(ふう、侮り難し……ですね)

正直、女性の武器とやらが此処まで強力だとは思わなかった
直視し、自分のを見れば……確実に凄まじい敗北感に苛まれるだろ
う、恐るべし、女性の武器……

「皆ー、こつちには居なかったよおっ！」

聞こえてきた声に振り返ると、
アイシス様に負けず劣らずの武器を装備している楓様が、鴻苑様よ
り早く探索から戻って来た
目に入るのはやっぱりアレで……

「……此れはいじめですか」
「ほえ？」

成り行きで一緒になった彼女等に、何時もと違って心が折れそうに
なるのはきつと……

フェル様が気絶してらっしゃるのと鴻苑様が遅いのと、しつこいく
らいに好意を真っ直ぐに伝えてくるあの、居たら迷惑で居ないと何
となく手持ち無沙汰になる、彼が居ないからだろう

思い出すのはたった2時間前、予想外の妨害が入った時のこと
初めて心の底から恐怖を感じた……あの瞬間……

2時間前……

半分気絶した葵様を受け止めようと、私は真下で手を広げて待つて
いた

（……これなら、『鬼の半径3 m以内に、桃太郎からは近づかない』というルールにも違反してませんし、私の勝ちです）

その慢心が、油断を誘った

半径3 mを切った、後2 m、1……勝利を確信し、手加減はしたが始めての峰打ちにも関わらず、思いの他無事な葵様の姿に安堵の溜息を漏らした瞬間、叩き付けるような音が聞こえ

「っ 葵様……！！」

葵様が重力に逆らい森の方へと吹き飛んだ

微かに、カクンツ、と全身から力が抜けていたのが見えたから、恐らく本格的に気絶したのだろう

何故か……神経を逆撫でられたような感覚が身体に広がり、音がした方を見据える

（あれは……エフェクト戦闘効果、アタック攻撃……『飛ぶ打撃』といった所ですか、これを扱う方は、クラスで一人……）

「卑怯ではありませんか、帷様」

帷様は将来、国の為に戦う事を選んだ、騎士学科専攻の攻撃特化タイプ

誇り高き騎士の理念を信仰している彼が、こんな卑怯な事を好んでするなんて……よほど、騎士学科は厳しいのでしょうか……

思考している間、攻撃する気配はない

葵様も飛んで行ってしまったので、刀を仕舞うと静かに……青の髪と金の瞳を持った鏡園寺 帷その人が、もう一人……赤髪の目立つ髪をした忍者装束した少女を従え姿を現した

（あ……彼女は確か、）

「隠密学科専攻にしてあまりに派手な髪で全然忍べてないブラコン

の柚李さんではありませんか」

「せ、セイレン殿酷すぎるでありますう！！せ、拙者はっ、ブラコン等と軽い気持ちで兄者を慕っている訳ではないで御座る！！」
「ああ、世界が認めるラブの方で御座いましたか、これは失礼致しました」

別な所を弁解すべきでは、と思いつつ頭を下げると黙っていた帷様が焦ったように柚李様を嗜めていた
彼はまだこのクラスに居る稀有な……常識人というカテゴリーに居るようだ

「御見苦しい所をお見せして申し訳ない」

「いえ、構いません……が、どうして私の邪魔をなさるのですか？」

「簡単な事だ、某達は……いや、某は柚李の為に、彼を捕まえるのは某達の手で、と望んでいるからだ」

「あ、兄者っ……！！」

キラキラと、嬉しげに帷様を見つめる柚李様
そんな彼女に、力強く頷き……

「柚李は、だらしが無いからな」

「ううっ……」

持ち上げて、叩き落とした

（要するにシスコンですか……）

そうは思いながらも、無意識の内に飴と鞭を使い分けるその巧みさには油断出来ない

（さて、どうしたのですかね……）

そう考えていた瞬間、風切り音が耳に入った

「!？」

「むっ?!」

「あでえっ!？」

三者三様の反応をし、その場から離れる

額に矢が刺さった——先はトイレのスポスポ——柚李様から目を離し、視線を戻すと

「ああ、みいなさん揃って邪魔のしあいつこ出来ますねえ、うふふう」

目が半分逝っている楓様が弓を構えていた

その隣には一日経って復活している鴻苑様がいる

……何気に、安全範に避難しているアイシス様達と、その影の薄さでエリス様の気配も掻き消しているモブ男……ウルシエン様が羨ましい

「存在感がある、というのも大変で御座いますね」

それだけ呟き——どうやら聞こえたらしく、ウルシエン様が頂垂れていた——刀を水平に構える

「こらこらドM、ちゃんと狙って打てよ下手糞さねえ」

「はぁーい……あ、鴻苑クン何処行つたのお？」

「んー、オレにも色々あるんさ、色々と……」

楓様の長い髪を弄りながら笑う鴻苑様に、楓様が蕩けた表情で寄り添う

ちなみにあっちでは、

「む、取れんな……」

「あ、兄者、い、痛い、で御座りまするうっ!!」

「す、すまん、だか少し我慢しくれ、貴殿の為だ柚李」

「ああ兄者が拙者の為につ……わ、分かりました!!」

何やら兄弟でイチャコラしている

そして向こうでは車椅子幼女とモブ男が仲良くニコニコと（以下略）

もういつその事お似合いだからとつとくっ付けばいい

そんな事を思い浮かべては、また頭に、飛んで行った彼の姿が浮かぶ（……何故でしょう？葵様の顔が浮かんでは消えて浮かんでは……）ああ、どうして彼はこの場にいらないのだろう？居て欲しい、この場に……私の側に……そして、

「思いつきり、一発と言わず殴らせて頂きたい所望であります、ええ」

このやり場の無い胸のモヤモヤを発散すべく、このクラスの唯一の常識人を巻き込まない程度に、

「^{イコン}進化への扉よ、私、セイレン」マクシスの能力解放を」

< ^{パワー}出力、^{エフェクト}戦闘効果、^{ジャンル}戦闘種類を選択してください >

「制限60、閃光を伴う疾風、種類は……」

前を、見据える

弓を構えるように指示し、自らも能力を発動させる鴻苑様と、頷く楓様

回避と退避を選択した兄弟、安全圏の4人……ふと、安全圏にいる一人が、笑う

「……ふふ」

楽しみに此方を見る幼い瞳と、目が合った
刹那、背中に走ったのは身が竦む程の悪寒

「つ、種類は退避^{レレユジア}……!!」

自分より年下の相手に感じたのは、恐怖
ただそれだけだった

<了解致しました>

無機質な声と同時に、選んだ能力が発動する

「っ?!」

「ひゃうっ?!」

目を開けていられない程の閃光と共に、吹き荒れる風
安全圏と思われる場所まで近くにいた彼らと共に飛んだ、直後

バキ、ともビキッ……とも言えない音が響き、さっきまで私が居た
場所の地面が裂け、閃光の中……黒い何かが蠢いた

「——っ?!」

その得体の知れない何かは、閃光が消える前に消えた
閃光が収まった後、裂けた筈の地面まで元通りに……まるで、何事
も無かったかのように、戻る

(理解……不能、で、あります……)

呆然と思つた言葉と同時に、身体に感覚が戻ってくる
ふ、と力が抜けかけるが、何とか持ちこたえ振り返ると……エリス
様とウルシエル様が、居なかった

——『鬼』のひすいクンを探しにもう行っちゃったの——

途中から目が覚めていたらしいフェルディーン様の言葉を聞いても、
凍りついたような身体は中々言う事を聞かなかった
それを心配した彼女達が、何処かで休もうと提案し……
勝手に手を出さない、と誓ってくれた鏡園寺兄弟が葵様を探しに行
った

そして、ようやく身体も落ち着き……今に、至っている

「……………」

（私も、恐怖……等を感じるのですね）
未知なるモノへの恐怖、といった感じだろうか？
確かにこの身は疎み、咄嗟に選んだのは回避……

「葵様は……無事、でしょうか」

鬼を探しに行くと、彼女は言つたらしい
ただこの授業に純粹に参加しているからこそ出た言葉なのか、それ
とも……彼を狙っているのだろうか

その考えに至つた瞬間、心がざわめく

それだけはならない、と
彼だけは守らなくてはいけない、と……

「セイレン」

ふいに、

——むに……——

何かが、後ろから胸に触れた
加えて言えば、物凄い弾力を背中辺りに感じる

「あ……？」

「ふふふ、隙ありーってね」

遠慮なしに触りながら、後ろでアイシス様が笑う
さすが兄弟と言った所か、まったく同じ触り方である

「っ……は、破廉恥です……」

「何、照れてるのセイレン？」

「そ、そのようなこと……せ、セクハラですっ」

「ふふふ、残念ねセイレン、セクハラは異性に対してあーんな事や
こーんな事をした場合であって、同性ならセクハラじゃないのよ？」

ふと思った……なんて理不尽なんだ、と

決して多くは無いが、そういう趣向の持ち主は居る……そんな人か
らの熱烈過ぎるアピールがあつたとしても、それで気を病んで……
いけない道に走る人が居たとしても、罪にはならないのだという

（な、なんて理不尽なんでしょう……）

固まっていると、「私様ばかりが触ったら理不尽よね、理不尽って素敵だけど此処は平等だわ！私様偉い、大人ね！！」と言いながら私の手に胸を押し付けてきたその瞬間、

（っそ、そんな……！！）

格の違いを見せ付けられた

ああ……月とすっぱんという例えを通り抜けたら人はなんと形容するのだろうか？

最早色んなショックでキャリアオーバーしている私に、アイシス様が小さく笑う

「……ドレウィーが、そんなに心配かしら？」

心配……正直、分からないがその言葉が一番馴染むような気がしただから、小さく頷く……するとぽんぽん、と頭を優しく叩かれ、

「大丈夫よ、ドレウィーは丈夫なんだから」

貴女もよく知ってるでしょう？そう言う彼女は何時もと違い、温かくて……

本来なら、二つ年上なのだという事実……身体だけじゃなくて心の面もそうなのだと、頷けた

「……アイシス様は、葵様が心配ですか？」

「んー、そうねえ……あの子は、馬鹿だから」

思い出したように笑い、

「馬鹿だから、守るって決めた誓いは絶対守るのよ……だからドレウィーは、例えばどんな怪我しても、大丈夫なのよ」

「そう、ですか……」

葵様なら有り得ますね、と思えない程度にしか彼を知らないのだと、
今更ながら気付いた
その事に何か思っ前に、

「ひゃ、わ、ひゃうつ……！！」

短い悲鳴のような声が聞こえた
振り返ると、バランスを崩したらしい楓様が崖の上から空中にその
身を投げ出していて、
フェルディーン様がいち早く手を掴むが、そのまま二人して宙に……
鴻苑様が必死に手を伸ばすが、その手は空を切るだけで届かない
二人の瞳が、絶望に染まったのがハッキリと見えた

「っ……はは……」

その時微かに、鴻苑様が笑った
そしてそのまま、

「っな……！？」

身を、投げ出した
一瞬にして二人の場所まで辿り着き、フェルディーン様と楓様を掴
み、崖の上に放り投げる

そして彼はそのまま……

「あー……ちょ、くっ……はは、はははっ……」

何故、人は飛べないんさねえ……ふ、と悟りに至ったような顔で彼が呟いたのは、そんな事で泣きそうな楓様を見て、なんとも言えない顔をして、一言、

「悪いっ!!オレこれ………确实、死んださねえ………」

叫び、呟き………困ったように、諦めたように、笑ったそして私達が口を開くよりも早く、鴻苑様の身体が、重力に従い……

「っ鴻苑クンッッ!!!!」

叫ぶ声も虚しく、30m下の滝へと落下していった

順調＋予想外＝恐怖と不安と、泣きそうな叫び（後書き）

ヒロイン：鏡園寺 柚李きようえんじ ゆい

呼び名：柚李、鏡園寺

参考：「兄者を助ける忍びになりとう御座る！！」という理由から
隠密学科を専攻としたが、その鮮やかな赤い髪から忍ぶ所が目立ち
まくりなブラコンさん

友達：鏡園寺 帷きようえんじ とばり

呼び名：帷、トバッチリ（笑）

参考：騎士学科専攻の、将来お国のために頑張る気満々の割と常識
人に入る貴重な人。無意識なシスコンで、飴と鞭を見事に使い分け
る人

公式? : 圧倒的な力"危機

東 鴻苑、彼が滝に向かって落下する少し前……

セイレン達がその上に居るとも知らず、葵は飛沫を上げる滝の真下に来ていた

「お? でつけえ滝だなあ!! って、何か家ある…… そうだ、道聞いたら教えてくれっかな?」

古びた小さな家…… 小屋と言った方が正しいようなその建物に俺は近づき、何の躊躇いもなく扉に手を掛けると、

「み、見つけたで御座る…… てえ!! ちょ、ちょちょちょ待つたで御座るよ!!」

妙にどもったような御座る口調の声が聞こえた

（この声は柚李ちゃん…… って、まさか桃太郎に俺見つかった?!）
しまった、と振り返るとやはり桃太郎の一人、ブラコン忍者が木の辺りに居た

「って、何気に失礼な事を思っで御座らんかその顔は?!」

…… 思ったとおり、全然忍べては無いがその分他の要素が優秀らしく無駄に鋭い

が、今は無視だ無視

（ブラコン忍者の側にシスコン騎士あり、って方程式が成り立つちまうんだよなあ、マジやべえ……俺はセイレン以外には捕まる気はねえってのー！）

始まってすぐくらいにフェルちゃんに惑わされたとかは……あーもうきっぱり忘れたんだぜい！！

逃げ場を無駄とは知りつつ横目で必死に探す

と、別なモノを発見

（畜生、シスコン騎士なんて見つけてどうすんだよ俺の馬鹿ー！！）

心の中で自分の無能さに溜息を吐きながら、ばれたと分かったらしいシスコン騎士も姿を現したのでマジ困る

（はーあーマジどうしよう）

リアル万事休すだ

じりじりと追い詰められるように後ずさりトン、と軽く音を立てて小屋の扉に背がぶつかる

無意識の内に扉を探るように動いていた手が、ドアノブに手が触れたその瞬間

——入れよ、なあ葵……——

頭の奥に語りかけるような声と共に、身体が痺れる

頭の隅までもが痺れたように思考が停止し、身体が勝手に……

「お、おい！？」

「えええちよ、葵殿？！」

驚き、手を伸ばしてくる二人を見た

……もつとも、その事を認識出来たのは小屋に入り、閉めた扉に鍵をかけた後だった……

無意識の内に流れ作業をこなした身体と頭はまだ痺れており、自分の意思で動かせない

（ああ、何か機械みたいだなあ……）

何故か勝手に動く身体にぼんやりとそんな感想を抱く

外に居るであろう二人は、必死に扉を叩き何か叫んでいる……が、残念ながら何を言っているかまでは理解できない

靄がかかった思考……手放した方が楽になれる気もするが何となく、身体のままに従いそのままにいることにした

埃だらけの玄関……と思しき場所から遠ざかり、ある部屋に辿り着いた瞬間、突如頭の中がクリアになっていき……

「……………はっ?! 俺何勝手に人ん家入ってんだよ、不法侵入じゃねえ?!」

どうでも良い事を、思い切り叫んでいた

▼ ▲ ▼ ▲

某達が近づくと、葵が後ずさった

そこまでは納得出来た、だが扉に触れた——正確にはドアノブだろう——瞬間、まるで電流が走ったかのようにビクリツ、と身体を震わせ……

今まで見たことの無いようなスピードでまるで別人のように……何も感じていないかのような無表情を浮かべ、小屋に立て籠もってしまった

「あ、あああ兄者、ど、どどどうしたらよいで御座ろうかつ？！」

隣であわわわっ……！！と慌てふためく柚李に、逆に落ち着けた明らかにさっきのは葵の様子がおかしい

（何らかの力の影響を受けたのか……？）

現状ではそれが一番可能性が高い、とそう結論付けドアノブに手をかけ開けようとする、が

「……開かない？」

蹴破ってしまおうか、と背中に背負っている大剣を構えた瞬間、

「ああ、あああ兄者！！そ、そんな事したら器物損害罪で捕まってしまう……！」

そう叫ぶ柚李に思わず、頭をなでたくなる衝動に駆られた（臨機に弱い癖に、割と冷静か……其処は評価出来るな）と、何時もの癖の採点付きで

……確かに此処は今戦場では無い為、通常の方法に縛られるが……友を助ける為だ、と言えば見逃して貰えないだろうか……

某が困っていると、ここぞとばかりに柚李が針金を取り出し、

「拙者に任せてくだされ！！」

そう宣言し、鍵穴に突っ込みガチャガチャと動かし……

すぐ、カチャッ……と音がした

「……凄いな、久方に見直したぞ」

「あ、兄者に褒められたで御座るっ……えへへ……」

何故か微かに頬を染め、意気揚々と柚李がドアノブを回す
ぎいい……と音と共に扉は少し開く、が

ドカツ……

「……？」

何かにぶつかつたような音を立て、途中で扉が止まる

パタン、と何事も無かつたかのように扉を閉め、何かの間違いであ
つて欲しい……と、傍から見ても分かるような顔で向かって拝み、
もう一度開ける、が……

ドガッ、ドガドガッ……

「……………」

「……………」

どうやら、思つた以上に法律を守り救出するというのは困難なようだ
次の案が失敗したら扉を粉碎しようと心に決め、さっきから存在を
主張している滝の方を見上げると、

「っ……………?!」

よく知っているクラスメイトが遥か上から落下し、派手な音を立て
て滝へと突っ込んでいった

「い、一体何が……って、兄者?!」

扉と格闘していて音しか聞いていない柚李の声を無視し、少し流れの早い滝ツボに飛び込む

さつきちらつと見たのは黒髪、恐らく鴻苑だろう

相当上から落ちたらしくその衝撃で気絶しているのか、もがくような素振りさえない

(っ、流れが邪魔だっ……!!)

近づこうとすれば、まるで水が意思を持っているかのように邪魔をしてくる

息がもたず一度水面に顔を出し、

「はあっ……く、致し方あるまいっ」

左手を大きく掲げ守護^{イコン}への扉を呼び出す

黒い画面に文字を打ち、入力画面を表示する

<主殿、ご命令を>

「我に刻まれし水の刻印によって命ずる、流れを止めよ」

言うだけいい、そのまま大きく息を吸いもう一度潜り

<御意>

耳にそれが届いたと同時に……一時的に止まった水の流れに安堵しながら鴻苑の元へ泳いでいく

(くっ……今日程この大剣が憎いと思った事は無いなっ)

今度から少し小さめの……セイレンに刀の入手を頼もうか、と密かに思う

「つぶは……!」

大分時間が掛かったが、何とか水面に顔を出す
兄者っ……！！と、泣きそうな顔の柚李には申し訳ないが、それ所
ではない

「鴻苑、おい、大丈夫か」

軽く片手で頬を叩くが、反応が無く……ぐったりと力が抜けている
その身体は思いの他重い
（大分水を飲んでいるのか……なら、御免っ！！）
心の中で謝罪しつつ容赦なく鴻苑の腹を殴ると、

「がつ、は……！！げほ、げほっ！？」

激しくむせつつも水を吐き出したようだ
少し安堵していると鴻苑がだるそうに片目を開け、状況報告を乞う
かのように某を見る

「某は、落ちてきた貴殿を拾っただけだ」

簡潔明瞭な答えを返すと、納得したような顔をした後、

「う、腹……痛いさ……」

腹を擦すり恨めしい目で某を見る

少々やり過ぎた感はあるにあって、咄嗟の事だ……許せ、とだと
告げ、柚李に手伝ってもらい何とか引き上げる事に成功した

「ふう……鴻苑、貴殿何故紐なしバンジー等を試みたのだ？」

「はあ……あー……紳士だから、って痛っ！」

「……ふざけるなら手を挙げさせてもらうが？」

「もう挙げてる……って悪い悪い、もう殴らないで欲しいさ……」

弱弱しく頭を庇うその様子に、少し罪悪感を感じ顔を逸らすと、

「……いきなり地面が揺れたんさ……んで、楓とフェルが落ちかけて……」

地面に倒れたまま、目を覆うように腕を被せ言葉を続ける鴻苑
口は笑みの形を作っているが微かに声が震えて聞こえる

「失うかと、思ったんさ……ほら、オレってあれじゃん、紳士だし、だから、だから……」

「……分かってる、もういい……ほら、紳士が何時までも寝てる訳にはいくまい……起きろ」

言葉を遮るように、ぐいつと半ば強引に鴻苑を立たす

黙って一部始終を見ていた柚李が珍しく空気を読んだらしく静かに離れ、一人で扉と格闘し出す

(……柚李も少し大人になったのだな……少し、誇らしい)

少し頬が綻んでいたのか、「柚李見て何にやけてんのさ、シスコン」と指で頬を突つかれながら鴻苑が笑う

……報復として支えていた手を離すと、無様に地面に転がった、は、ざまあみろ

「つつ……いい性格してんさね、帷」

「ふん、お前ほどではない」

其処まで言って、ふと……

鴻苑が崖の上に残したらしい彼女等は大丈夫なのだろうか、と気に

なり上を見上げると

「……………は？」

「へっ?!」

某達の眼前に淡い紫色で輝く転移陣が現れ、其処から……

(な、足……人か?!)

その場から離れろ、と脳からの反射的な警告に従うには些か遅すぎた

「わ、わ?!」

「ひえ?!」

「っ!」

「あらら？」

崖の上から転移してきたらしい女性陣四人に、容赦なく押し潰される事となった

(どうやら今日は運が悪いようだな……)

泣きそうな表情で「だ、ただだめで御座る兄者から離れてくだされええっ!!!」と、駆け寄ってくる柚李を見ながら、そんな事を思った

▲ ▼ ▲ ▼

はい、今どうしても、どーでもっ!! 良い事だけど俺、葵〓ウィンデル〓ひすいはプチパニック継続中です

何か勝手に身体は動くは、変な部屋に入ってしまったは、オマケに天才かと思える流れ作業で鍵まで掛けちゃった

って、俺天才、天才だったのか俺?!

すっげえ俺マジ無意識の方が最強じゃね?! え、ちょ、訳分かんねえけどヤベえ!!

(ちょ、おいおい俺!! いや、ちょっと前の俺、出てこい!! んで此処開けてくれよ俺開け方分かんねえんだよ!!)

いくら心の中で叫んでも、もちろん答えなんて返ってこないぎゃー!! と、もう一度叫んでいると、

「……賑やかな百面相だなあ、おまえ」

幽霊よろしく誰もいないと思っていた後ろから声が聞こえた

しかも、砂を噛んだ時のようなざらざらとした感覚が残る、嘎れて掠れた声

(ああああ悪霊?! え、悪霊悪霊悪霊?! マジヤベえ、もう何がヤベえか分かんねえくらいヤベえよセイレン助けて!!)

思い人に助けを求めるといふ情け無い頭の中とは違い、何故か身体は率先して後ろの声の元へ行こうと奮闘してくる

「え、ちょ、待って俺の身体!? そっちマジ危険って俺のアンテナが訴えてるんすけど?!」

にぎゃー!! と叫ぶが虚しく……

後ろ向きで数歩足が勝手に歩き、ぐりん!! と身体が回転し声の主が見えた

無雑作に長く伸びた琥珀の髪、整っている顔立ちに生える不釣り合いな不精髭……

目を覆う機能を中途半端にしか果たしていない黒い布、その隙間から見える俺と同じ、黒と赤の入り混じった右目

座っている椅子同様に埃が肩に積もっていて、

オマケに鎖で両腕両足をぐるぐると椅子に結わえ付けられていた

「……よお、葵」

ニコ、と……手が動かせるなら手を挙げて言っているだろうと容易く想像できる程の気軽さで、何故か俺の名前を呼んだ
教えてもないのに、俺の名前を……今日初対面なのに、俺の名前……

「おおお俺もう呪われターゲットオン?!」

(ヤバイ、俺誰かに怨み買うようなこと……)
頭に過ぎるのは、ワザとでは無いとはいえ壊した数々の物と怒る人々の姿

胸に触れたのはワザとは言え(?)謝ったにも関わらず真っ赤な顔で殴ってきた女性陣の姿

その他諸々が一瞬にして頭を過ぎる

(……ははは、怨み買い過ぎてもう訳分かんねえ!!)

開き直ろう、うん、それが俺だ、美学だ、座右の銘にしよう!!

何とか落ち着かせ、俺の名前を知っている幽霊^{ゴースト}くんを見る

……心なしか、何処かで見たとような顔だと思い、

「幽霊くんさ、俺と会ったことねえ？」

「いきなり喚いて混乱して収まったと思ったらそれかよ、まあ予想はしてたけどさあ……」

ぽりぽり、と頭を掻きたそうな顔で苦笑する幽霊くんは、無い、とハッキリと否定した

(……俺の勘違い、なのかあ……)

まあ正直俺も今日が初対面だと思う

だけど、根拠も何も無いが……見た事あるような気がしてならない

「幽霊くんさあ、やっぱ俺と」
「無いつて」

（あれえ？……やっぱ勘違いなのか俺の……）
んー、納得いかねえ……そうは思いつつ、在り来たりな口説き文句を口にするのもテンションが下がってきたのでこの話題はやめにした（だって俺やっぱ男だし、言うなら女の子がいいし）

「んー……幽霊くんさあ、此処から出る方法知んねえ？」

早く俺セイレンに会いたいんだよなあ、と告げると苦笑される
幽霊くんの肩が揺れる度に、鎖のぶつかり合う耳につく音が静かな部屋に響く

（……あれ、邪魔じゃねえのかな？）

「知ってるけど……そうだなあ、もうすぐ……」
「……あ？もうすぐ？」

ニツコリ、と笑いながら幽霊くんが一言、

「来た」

その瞬間、地響きとも言える揺れと共に幽霊くんのすぐ横の床が割れ、

「お、おおおおう?!?!」

黒い触手のような（やべえ触手って何か破廉恥な響きだぜ!!）が現れる

正直な感想を言えば、見ているだけで気持ち悪い

「ちょ、幽霊くん危なくねえ?!」

「ん? ああ……迷惑だよなあこれ、俺の小屋壊してさあ」

(危ねえとは思わねえのかよ!!)

じ……っと触手を見ながらそう呟く幽霊くんは、俺の言いたい事が分かったのか苦笑し、

「だって、ほら……」

カチ、カチ、ジャララ……耳につくのは、金属の擦れ合う音

音に反応したのか、触手がゆっくりとその鋭く尖った先を幽霊くんにあわせ、

「俺さあ、動けないし」

諦めきつた声色に、幽霊くんの姿がある少女と重なり……俺は気付けば、反射的に飛び出していた

お世辞にも俺は反射神経、運動神経、学力……全てが良いとは言えないが、

(音に反応すんなら、話は別だぜ!!)

側にあつた小さな椅子を握り、壁に当てながら幽霊くんの元へ走る
ダンダンダンダンツ!!と派手な音につられ触手の標準が幽霊くんから外れる

それを横目で確認し、出来るだけ遠くへ椅子を放り投げ幽霊くんに
タツクルするかのように飛びついた

微かに驚いたような顔と目が合った、瞬間……

「つつつ!!」

狭い部屋を押し潰すかのように触手が、扉付近に投げた椅子目掛け
て大きくしなり、壁を突き破った

1 + 1 + 1 + …… 〓 意外と大きな力

（今日は本当に訳が分からない日ね）

とても不可解な現状を思いながら思わず笑ってしまう

退屈しなくて素敵だと思う自分は相当可笑しな女なのだろう、元々だから気になんてしてないが

（鴻苑が無事なのは良かったわ、楓もフェルディーンも泣いちゃって大変だったもの）

彼が落ちてから、特に楓が酷かった

泣き喚き後追いかけるかのような勢いで暴れる彼女を気絶さそうかと企んでしまったくらいだ

まあ、結局フェルディーン of 転移陣で移動させてもらったが……思った以上に元気だったので満点だったのだが、

「……アフターサービス等もご理解致している触手様で御座いますね」

「ふふふ、花丸あげたいくらいだけど……ちょっとサービスし過ぎだわ」

臨戦態勢を取っているセイレンの横で高みの見物しゃれ込みたいところだが、少し刺激が強すぎるかもしれない

そんなことを考えながら、少し真面目に状況を分析してみる

一度目の地響きと共に、ドレウィーが立てこもっているらしい小屋から触手が出てきた

そして二度目の地響きでは、小屋の扉を破壊した

あのドレウィー、セイレンによって新たな属性が目覚めかけている途中だというのに……

（いきなりハードル高いものにチャレンジだなんて、何て向上心豊かなのかしら！！）

私様に言えはいくらでも調きよ……ゲフンゲフン、教育してあげるというのに

いつの間に内気な子に育ってしまったのだろうか？そう思っているとやあ、僕椅子と何処でも一心同体さ！！と言いそうなスタイルのちよつと好きなタイプの男性と一緒に、ドレウィーが床に転がって居るのが見えた

（あらやだ、ドレウィーったら……そっち系属性もいけたのかしら？）

これはこれで私もいけるかもしれない

脳が確実に一歩、禁断な方へ進んだと同時に、

隣のセイレンが猛スピードで触手の近くで倒れているドレウィー達に近づいていく

（こ、これは……嫉妬、嫉妬ね！！ドレウィー、段々と確実にフラグ成立に向けて準備が整っているじゃないの！！）

助け起こされるドレウィーと椅子と一心同体な男性を熱烈な視線で眺め、思わず舌なめずりをする

退屈しないですみそうね……普段の喧騒に加わるであろう一波乱を思い浮かべ、『享樂^{イコン}の扉』を呼び出し一つの命令を下す

▼ ▲ ▼ ▲

「いやん、妬ける、妬けちゃうわ!!」

毎度の事ながらアイシス様が頬に片手を当て、楽しげに叫ぶ

もう片方の手は高速に命令を打ち込んでいるらしく止まる事がない

(葵様に続く不思議な方でありますね)

助け起こすと同時に飛びついてこようとした葵様に、大人しく運べるように一発ぶち込んだ後静かになったのを確認し、

「……大丈夫ですか？」

椅子が倒れている為、する事が無いのか空をぼーっと眺めていた男性に話しかける

(ふむ……鎖で椅子と身体を繋げる程椅子にラブな方がありますか)

……これは楓様と近いものがありますね)

一瞬で頭の中に情報を付け加えていると、

「セイ、レン……?」

その男性のものらしい、掠れた声が耳に届いた

ざらざらとしたようであるが何故か不快ではなく……寧ろ逆の念を

抱かされる声に、思考が一瞬停止する

喜びの様な、悲しみの様な……複雑に入り混じった瞳に、私が真っ直ぐに映る

何処かで見た事がある、そう感じた瞬間

「あ、」

ふと、視線を少しずらし彼が呟いた

それでやっと、もう一人(一つ?)の存在に気付き近づいてくる風

切り音の軌道に合わせ刀を向けた瞬間、

「くっ……!!」

腕が痺れるような衝撃と共に、身体が吹き飛ばされる
しまった……鋭い尖端が迫ってくる中、それだけが頭に過ぎる
直後、

「守護^{イコン}への扉よ、某の仲間を守れ!!」

「活^{イコン}かしの扉よ、兄者を援護するで御座る!!」

目の前に現れた大きな青いボールに包まれた盾が触手を一時的に止めた

（戦闘中に考えることなど……私も役立たずですね）

ビキリ、と盾にひびが入るのを横目に、『進化への扉』を呼び出す

「選択を、私セイレン」マクシスは決断する」

見慣れた画面が浮かび、それと同時に帷様の「セイレン!!」という叫びと共に、盾が崩れ去っていく
それを確認し、

「北方より来るは冷たき風!!」

倍速の力を足に宿らせ、大きく跳ぶ
一拍遅れて触手が地面を抉るが、それと同時に

「はいはいはあい!!」

「準備完了ですう!!」

テンションが上がり切り、高揚しているアイシス様と少しぐったりしている鴻苑に抱きつきながら弓を構える楓様が叫びを上げる

「ねえねえ見たい？私様のおっきのショー、見たいわよねえ？！」

「み、見たい、です！！」

「ふふふ、なら見せてあげるわ！！隅々まで魅了して胸を熱く焦がしてあげる！！」

「いきますいきますいっちゃいますよお？！開け『破邪の扉』^{イコウ}古代より比奈乃家血族にのみ受け継がれし力、我が弓に宿れえ！！」

「っはあ……派手にブチかますんさ……判決は下り戒めは解かれたり！！東家頭首、鴻苑が今此処に許可する！！」

<条件、満たされました>

無機質な機械音と共に、それぞれが求めた力が展開されていく

アイシス様は炎、比奈乃様は雷……

それぞれが自らの属性を纏い、狙いを定めていく

その間、鏡園寺兄弟が触手を引き付け準備は少しずつ整っていき、

（いけますっ……！！）

そう確信した瞬間、鴻苑様の息が段々と荒くなっていつているのに気付いた

楓様の力が増大するに従って、反比例するかのように彼の力が減少していく

楓様は気付いてない様子で……

「鴻苑様……？大丈夫で」

「セイ、レンっ……！！」

まるで私の言葉に被せるかのように、声を荒げる鴻苑様に、思わず

言葉が止まる

にいつと笑い、視線だけで葵様達の方を示し、

「あそこの馬鹿共を、頼むさっ!!」

それだけ告げ、弓を持っている楓様の手に自らの手を添える
すると弓に集まる力が増したが逆に鴻苑様は……

(ああ……そう、だったのですか……)

鴻苑様の扱う『扉』は恐らく譲与……つまりは、そういう能力だった訳だ

「……あちらはお任せを」

それを返事とし、触手が生えている根元辺りへ急ぐ

走りながら、何時か何処かで誰かが言っていた言葉を思い出した

——愛する男の誇りプライドを立ててやるのも女というものだ——

なら、その誇りのせいで大切な人が失われてもそれで良しと出来る
のだろうか

其処まで考えて、ふと我に返る

見ると、いつの間に復活したのか葵様が慣れない手つきで椅子と一心
同体の男性から椅子を引き離そうと鎖を弄っていた

「……何をされているのですか」

「ん、ああセイレンも手伝ってくれよ!!この鎖中々外れなくてさあ」

こういうの俺の専門外なんだよなあ……ばやく葵様に、何専門なのか聞こうと思ったが、止めた

何故だか激しく後悔しそうな気がしたからだ
どうしようか、と少し迷っている間にもあちらでは緊迫した戦闘が
行われている

（時間が惜しい、ですからね……）
スッ……と水平に刀を構えると、少し男性が青ざめた

「き、切るなら此処にしてくれ」

そう言い、自分の足元辺りへ視線を向けた
それを辿ると、結び目のように雁字搦めになっている部分を見つけた
ふと、初対面にも関わらず私の次の行動が読まれた事に違和感を覚
えたが、時間も無い為無言で刀を振り切る
風の加護を付けている為、刃こぼれせず鎖が切れ、

「ふう……サンキュ」

ニコ、っと笑みでそう言われた

その笑みに、やはり何処かで見たとがあるような錯覚を覚えたが、

「踊りなさい炎、魅了の火の粉を纏いて動きを止めよ……！！」

「破邪の矢よ、我等に仇為す闇打ち射ぬかん……！！」

炎と雷、享楽と破邪……同時に開かれた扉から、力が溢れ出し、

「舞え！！」

「射抜け！！」

容赦なく触手へと、襲い掛かった

● ● ● ●

（相変わらず開くべき扉と鍵をセットで持つてゐる奴はすげえなあ……）

目の前で圧倒的な力を見せ付ける二人と目の前の光景に、息を呑む無能である自分とは違う、力ある者の戦い方……素直に、すごいと思つた

「……何、呆然としてらっしゃるのですか」

「ん、あ、いや……何でもねえよ」

やはり触手も痛みを感じているのだろうか
痙攣を数度起こし、ゆっくりと地面に倒れ伏す

「……割と、あつけねえんだなあ……」

「葵様が言いますか……今回気絶してばかりで足で纏いだつた葵様が言いますか」

「に、二回も言つなよセイレン！！俺が理解力悪い馬鹿みてえじゃん！！」

「ああ、気付いてらっしゃいましたか、それはとても残念です」

それだけ告げ、まだ喚いている葵様を刀の柄で殴つて大人しくさせ（またの名を気絶）、

やっと椅子から離れられたらしい男性に振り返る

いつの間にか触手が消えており、同級生も集まってくる

「……さっそくですが……椅子がラブな貴方は何者ですか」

「思ってた通り滅茶苦茶いきなりだなあ……えーと、其処の葵が言うには幽霊くん」

「ひ、ゆ、幽霊?!」

「ほ、ほほほ本当に居たで御座るか?!」

「神社家系のうちでも見たことありませんですよ?!」

「あ、あはははは!!ゆ、ゆゆゆ幽霊なんて怖くありませんわよ、ええ全然これっぽっちも!!」

私を除く此処に居る女性陣全員が顔を少し青くする

(幽霊、ですか……確かに、声だけは当て嵌まりそうですが……) 目の前の男性をちらつと見る

黒を基調とした埃だらけのジャージのような上下を着ている……見た所、ちゃんと足が……足が?

「両腕だけでなく、両足も義足……ですか?」

「ひ、ひい!!足が無いって事は本当に幽霊なんですね?!」

横から茶々を入れてくるドMを鴻苑様に半ば押し付けてもう一度尋ねると、苦笑される

「見ての通り、だ」そう言い、少し裾を捲ってみせる

見えたのは、確かに機械だが……見たことの無い素材のように感じた深く考える前に見えなくされ、仕方なく次の質問をする事にする

「幽霊様、貴方お名前は?」

「ん?俺?俺は、あおい……あ」

(え……?何処かかなり……聞き慣れているような……?)

同じく、怪訝な顔をした同級生が見え、怪訝は確信へと変わった、

だがその瞬間、

「お、俺は藍〃イウィーア―！」

「え……さっきと少し発音が違うような……」

「いやいや―！俺は藍、藍〃イウィーアだ―！」

少し必死に、頼む信じてくれ―！的なオーラで言う彼に、皆して勢いで頷いてしまう

すると、ぱあ……っと子供のように目を輝かせ、嬉しげに宜しく、とまで宣言される

（何だか、名前だけではなくて……少し馬鹿な所まで葵様に似ていますね）

其処まで考え、

ああ、雰囲気的な何かが葵様そっくりだったから知っているような気がしたのか……と、妙に納得してしまった

取り合えず、彼の住んで居た小屋も壊れてしまった事だし、藍様を此処に放っておくのも何なので……

「……で、結局なんだ？鬼を捕まえた報酬無しでいいからコイツの宿探しを手伝えと？」

「はい、お願い出来ないでしょうか教師ジャンス」

ロープでぐるぐるにした葵様と藍様を横に並べて言うと、少し困ったような顔をされる

学生にしちゃちょい大人過ぎだし……かと言って得体の知れない奴を無責任に放るのもなあ……思いつき顔に思っている事が表れている教師ジャンス

恐らくだが、今日も校長ライムの我俣に付き合わされたのでしよう

……ご愁傷様です

少し合掌していると、

「なあ、なあ、先生！藍を先生として学校に雇ったりって出来ねえのか？！」

何があつたのか知らないが、藍様に懐いている葵様が提案する少し考えてみたが、悪くないように思うわれる

「葵様にしてはまともな意見ですね、私も賛成です」

「確かに馬鹿にしちゃ、気の聞く意見さねえ……オレも賛成さ」

「確かに、葵クンにしては……でも、私も賛成です」

「ドレウィーにしてはまともね、私もいい男が教師となったら目の保養出来て……素敵！！素敵過ぎてよだれが出ちゃうわ！！はしたないっ！！」

「あ、アイシス先輩落ち着いてください……で、でも、私も賛成です」

「うむ、某も珍しくまともな葵の意見に賛成だ」

「拙者も！！馬鹿な癖に、良い事言うで御座るな」

「ひ、ひでえ！！皆俺を馬鹿にし過ぎだろ！！」

「だって馬鹿じゃないか」フェルディーン様以外の皆様ではもるように口調を揃えて言う、撃沈した

これはこれで静かになって話易くなる為、非常に便利である

（今度から皆で相談してレパトリーを増やしておきましょうか……）

そんな事を考えていると、唸っていた教師ジャンスが藍様に向き直る

「オレも割と生徒達の意見に賛成なんだが……お前、何が出来る？」

「は……？何が出来る、って言う……？」

「だから、まあ簡単に言えば……教師として雇うには秀でた一芸が必要ってこった」

そう言われ、少し困ったような顔で何故か私達を振り返ってくる視線がどうも私に向かっているようなので、そのまま後ろを振り向くと……

「……いらっしゃったのですね、モブ男様」
ウルシエン

「い、居たよ?! エリスちゃん共々皆が此処に集合した辺りから居たよ?! ってかモブ男かつこウルシエン様って言っの止めようよ!」

最後のは無視し、未だ私を見つめている藍様に少々困る

後ろのモブ男様が撃沈しようが構わないが、出会って僅かなのに全幅の信頼を置いているような顔で見られるので、取り合えず思いついたことを、

「……校長ライムの好みのタイプです」

言ってみた

まじまじと教師ジャンスは藍様を見た後、確かに……と頷き高速でアイコンを呼び出し、

「っ、わ?!」

写真を撮り、そのまま校長に送る

すぐさま返事が返って来たらしく、教師ジャンスが笑って私を見る

「ビンゴみたいだな、許可来たよ……まあ、何を担当させるかは後で考えるとして、これから宜しくだな、藍先生?」

「はあ……つて、え、え？」

状況が上手く飲み込めて居ない藍様は疑問符を飛ばしまくるが、如何せんもう授業は終わり暗くなってきた

「話は後ですから、取り合えず来い」と、半ば誘拐のような形で教師ジャンスが藍様を船に乗せ、

「よし、帰るぞお前ら」

『操作の扉』を起動させた

公式?・遠足〃家路に着くまで

少し、色々な事があつたが何とか無事家路につけそうな気がする
そう思い甲板から空を見上げていると、少し真剣な顔をした葵様が
近寄ってきた

「……何か御用ですか?」

「ん? ああ……まあ、うん……」

心此処に有らず、といった表情で私の隣に腰かけ、葵様がぽつりと

「俺って役立たずだよなあ……」

そんな事を呟いた

横目で表情を確認すると、嘆いている訳でもなくかといって自暴自
棄になっている訳でもなく……ただ、静かだった

(……今日あつた戦闘に、触発されたのでしょうか)

『何時も通り』と違った授業に、イレギュラーがあつた

二つの予定外が重なつた……恐らく、少なからず誰もが役立たずだ
と思つてのことだろう

正直、私自身も……酷く、自分は役立たずだと思つている

それは確実に事実なのだろうが……

「そうですね、戦闘では役立たずです」

「はは……セイレンきついなあ……まあ、分かつてんだけど、な」

鍵も扉も持つてゐる皆と違って、俺は自分の扉さえもどんなものか知

らねえ……オマケに、鍵もねえ……ほんと、役立たずだ……そう言い、藍様と似たような顔で葵様が苦笑した
やはり、この年になってまで能力が開眼していないのを気に病んでいるのだろうか

ああ、また柄にも無い事を考えている……彼に元気がないと、少し調子が狂ってしまう

私だけではなく、皆が皆……彼が馬鹿をしていないと、不安になってしまう

だから、

「……話は最後まで聞いて下さい、戦闘では役立たずですが……他は、そうでもないです」

「他……？」

「葵様が……葵様は、皆様を疑念の余地もなく信じてらっしゃいます、ですから、皆様は自分を信じる事が出来、最大限の力が出せるのです」

ですから足手纏いではありません、そう告げると、彼が驚いたような顔になり、

「そつかあ……そつ、かあ……」と、噛み締めるように何度か呟いたその後、しばらく無言が続く……が、ふいに彼が吹っ切れたような顔で笑う

「俺、セイレンのことも信じてんだぜ」

真っ直ぐな瞳で、そう言い頭を撫でてくる

その言葉も、彼の動作も、嫌では無かった……だから、

「私も……信じてますよ」

ただ、

「だからと言って、セクハラ行為をすれば全力で吹き飛ばすのでそのつもりで居て下さい」

彼の顔が、少し引き攣る

（気付かれていないと思ったのですかね……やはり、葵様は馬鹿です）

ゆつくりと、私のお尻辺りに伸びていた手を掴みそのまま……

「それでは葵様、到着次第起こしますのでお休み下さい」

「え、ちょ、待ってセイレン！！マジごめんなさ、い……っ！！」

地面に全力で叩き付け、撃沈させる

油断も隙も無い……そう思い、本日四度目の気絶を経験した彼を抱き抱える

恐らく、起きていれば煩いであろうお姫様抱っこで割り当てられている簡単な個室へ彼を寝かすと、ふと……妙に左腕がブラブラしていると気付いた

「……ちよつと、失礼致します」

長袖に黒い手袋と、夏だろうと変わらず少し嚴重過ぎるくらいに着込んで居るその服を崩すと、見えたのは義腕

今日飛ばされたりと色々あったからか、義腕に損傷が見受けられたがそれ以上に、

（葵様の左腕は、肩口辺りから綺麗に切り落とされて、いた……？）
知らなかった事实に、ショックを受けた

呆然としている私の目に飛び込んできたのは、はだけている服から除く白い肌走る、太い傷跡

今度は思考までもが停止する

（葵、様……貴方は、一体……？）

彼に、昔何があつたのだろうか？

それを聞くには、些か今の自分では役不足のように感じた
だから、何も見ていなかったように……服をきちんと正し、備え付
けの毛布を被せる

こんな、こんな酷い傷跡が身体に残るような過去を経て尚……何故
彼が、あんなに人を信じられるのか、笑ってられるのが、少し気
になった

「……お休みなさいませ、葵様……」

微かに感じた胸の苦しさの理由も分からないまま、毛布を被って目
を閉じる

彼と部屋は別なのだが、どうしても今は……離れたくなかった

——この胸の痛みには私は何と名づけて受け止めればいいんでしょう
か——

答えはまだ、手に出来ず……

静かにまどろんでいた瞬間、大きく船が揺れた

咄嗟に葵様の無事を確認し、立てかけてあつた刀を手取る

彼はまだ起きる気配が無いようだ

「……原因を、突き止めなければ」

呟き、私は葵様を残し部屋を飛び出した

帰るまでが遠足だと、誰がそう言ったのかと知らないがその通りで

……

微かに混じった『^{イレギュラー}異変』は一つや二つでは、終わらなかつたのだ
楽しい課外授業はまだ……家に帰るまで終わらない

恐怖＋支配の鎖＝届かない手

「……ふふ」

静かな海の上を進む船の甲板で一人の少女が小さく笑う
思うのはこれから行う事への期待か、それとも楽しみか……
小さく目を閉じ、彼女はアイコンを呼び出す
そして、

「開け扉……誘うは、——……」

度重なるイレギュラーの最後の一つが今、呼び出された

▲ ▼ ▲ ▼

部屋は今の生徒分しか用意していなかった為、オレは藍と相部屋……
……ということになった

だから、今後の事や……何故無人島と成り果てているあの島で一人で居たのか、能力は何なのか……詳しく話し合おうと思った
その矢先に、アクシデントが起こった

「うお、と、ととつ……?!」

咄嗟に壁に手をつき、何とか転倒は免れる

（何だつてんだ、これは……？）

オレが今操縦しているのに、船が大きく揺れた
そりゃまあ海の具合にもよるが、今は凪いでいる……にも関わらず、
この有様だ

同じく、壁に手を当て揺れに耐えたらしい藍が少し困った顔をして
オレを見る

「っと……ジャンス先生……一体、これは？」

「オレにも分からん……けど、何か起こったのは確か、だっ？！」

さっきよりも激しい揺れに、これは本気でヤバイと頭の中で警鐘が
鳴るが、
ゴチンツ！と、大きな音が聞こえ思考を中断し、慌ててそちらを
見ると

「クリ、ティカル……きたあ……っ」

「お、おい藍？！」

頭を壁にぶつけた状態で、ずるずると座り込む藍はどうやら揺れに
耐えれなかったらしい

（って、それもそうか……コイツ、両足両腕全部……）

理由は教えて貰えていないが、偶々葵が左腕が義腕なのを知った時
でさえ驚いたというのに、藍はそれ以上だ

何をすればこうなったのか……少々ドンくさい面があるので、案外
事故とかだろうか……？

考えているとまた小さく揺れ、それによって我に返る

「取り合えず……オレは原因を探る、お前は……此処で待機」
「つつ……って、へ？あ、ちょ、ジャンスせんせ」

何かを言いたげな藍を残して部屋を飛び出した

生徒達から聞いた話だが、藍はずっと椅子と一心同体だったらしい
そんな状態だったなら、歩行にも少し支障が来ているかもしれない
……そう思っただけの判断だ

出来るだけオレも、新たに仲間になるかもしれない奴を危険に晒し
たくは無い

（オマケにアイツ……妙に、葵に似てるんだよね……）

葵程ではないが、馬鹿だ

時たま、話を理解しているのかしていないのか分からない所もそっ
くりだ

似ている所を探せば探す程、可笑しいくらいに見つかってくる……
ふと、一瞬だけ

（まさかアイツ……葵の、実の兄貴かなんか、か？）

頭に過ぎったが、すぐに否定する

葵曰く、アイツは孤児ボーイだからだ……まあ、アイツが知らない
だけかもしれないが……そんな事を言い出せば、葵の親父という線
も疑わねばならない

もしそうなら、随分若い親父だ……藍の見た目は、上に見積もって
26、7だ

葵が今15だから……明らかに親父という線は無い
むしろ、兄貴という線が濃厚だ

「って、オレ何考えてんだよ……集中しろ集中」

呟きながら制御室へ入り……異変が無いか確認する為、自らのイコ
ンを船の制御装置へと繋いだ
その瞬間、

「なっ……っ?!」

ボタン、と音を立てて扉が閉まる

それと同時に、アイコンに凄まじい勢いで文字がスクロールされていく

(く、一体何が……まさかこれは?!)

流れる内容は、制御装置の内容の変更の詳細

恐らく能力を使つての乗っ取り行為だ、普通に打ち込むだけではこんな素早くは選択出来まい

つまり、誰かが本気で……この船の所有権を奪おうとしている

「はっ、オレと勝負しようつてのかい? いい度胸じゃないか……アクセス!」

<アクセスポイント、模索中……発見、5秒後に開始します>

アイコンから響く言葉に、無意識に口端が上がる

(何処の誰かは知らないが……)

<残り3秒>

(粹なことしてくれんじやないか)

<2>

(最近仕事と言や教師かただの機械弄りだったからな)

<1>

(だから、礼がてらに思う存分)

<0>

「後悔させてやんよ」

高揚する心のままに……

生徒達の安全を脅かした誰かへの、復讐劇を開始した

●
●
●
●

「楓、お前は部屋で待つてるんさ!!」

「い、いやっ……私も、鴻苑クンと一緒にいきますう!!」

固い決意の意志でオレを追ってくる楓に内心舌打ちしたい気分に陥りながら、先ほどから強い気配のする甲板へと走る

まだ、楓はオレの力を理解してはいない

出来れば一生……隠し通したいと思っている

何故なら楓の力を呼び出す為にはオレの力が必要だからで、

(本質知っちゃ……楓が、戦えなくなっちゃうさっ……)

ただ彼女からもう何も、奪いたくないだけなのに

握り閉めた拳は何時の間にか白くなって……

能力の代償である軽い発作に、胸を掻き毟りたい衝動駆られた

けど、それでも、オレは

楓を傷付けたくはないから……隣に並んだ彼女に小さく頷き、甲板へ続く階段を駆け上がった

そして、そこで見たのは……

「何で……っ」

「う、うそ……だ、だって、私達があの時皆で頑張っ……倒した筈ですよねぇ?!」

昼間、無人島で倒した筈の真っ黒な触手が、堂々と甲板の一部を陣取っていた

何故か甲板の床は所々穴が開いており、
すでに応戦していた5人も、深くは無いが傷を負っていた

「鴻苑！楓！気をつけろ、コイツは甲板の床からいきなりその身体の一部を出現させる！！」

「床の穴はそういうことか……了解！こっちには気にしないでいいさ！！」

（とは言ったものの、厄介さねえこれは……！！）
敵からの攻撃は予測不可能
最早反射神経で避けるしか無いのだが……

「つぐ、はっ……」

「こ、鴻苑クン？！」

息が苦しい

思わず膝を付くと、慌てて楓が駆け寄ってくる

（く、そ……こんな時に発作が……！！）

じんわりと嫌な汗が浮き出る……と、その時

「こ、鴻苑クン！楓ちゃん！危ない！！」

フェルの声が響き、咄嗟に楓を抱き締め横に飛んだ
直後、下から触手が床を突き破って現れる

「っはは、穴設定されてねえモグラ叩きさね、こりゃっ……！！」

「も、モグラ叩きは好きですけど、これは楽しくないですよぉ！！」

「違いねえさっ……っっ？！」

（ウソだろ、触手がまだ伸びて……？）

どれだけの長さがあるというのだろうか

甲板を突き破ったそれは、まだまっすぐにオレ達へと向かって、

「っ守れ我が扉よ!!」

ガキッ!と、帷が出した盾にぶつかり、激しい火花のようなものが散る

その隙に体勢を立て直し、フェルを中心として戦っている皆の下へ合流した

「サンキューさ、帷……一体これは何なんさ?!」

「某達も知らん、ただ異常事態であることだけは確かだ」

「これだけの長さを誇るとは……一体この触手はどれだけ長いで御座るかなあ……」

ぽーっと、柚李が向かってくる触手を弾きながら呟く

「ふふ、きつとこの星を一周できるわね……あら?!ならこの触手を橋にすればタダで世界一周も夢じゃないわ?!」

「わぁ、本当ですう!!」

「おお、真に御座るか!」

キラキラと目を輝かせる三人に思わず

(……きよ、今日のイレギュラーのせいで頭が葵並みに馬鹿になってきてるさ……)

合掌しつつ、真面目に応戦している三人に向き直る

「本体を何とか叩かねばならないが……如何せん、近づこうにも埒が明かぬ」

「折角、フェルディーン様が察知してくださるのですが、数が多い

ですからね」

「う、ごめんね……」

「いや、貴殿のお陰で何とか凌ぐ事が出来ておるのだ」

「そうですよフェルディーン様、貴女の能力がなさければ今頃海の藻屑と化しています」

冗談でも笑えない事をセイレンが言う

一瞬本気で想像して背筋が凍ったが、

「こ、鴻苑クン、後ろに五歩！」

「っ、とー！」

フェルの言うとおりの場所から飛び出してきた触手に持っていたトンファアを叩きつけると、引っ込んでいく

（なるほど……昼間より弱いさね……分裂してる分、能力も分散されるのか……）

これなら能力を発動せずともオレや楓でも、凌ぐ事が出来る

アイコンを開き、音声認識モードに切り替え皆の言葉が何処からでも拾えるようにし、トンファアを構えなおす

「現状、五分五分辺りさね?!」

「ああ、そういう所だ！だが、」

「先ほどから教師ジャンスに通信が通じません、ですので此処は私達が……」

（何とかするしかない、か……はあ……）

ただの課外授業だったはずだ

何時ものような、サバイバルゲームをして終わって帰って休める……

…筈だったのに

<今日とはことん、キツイ課外授業になりそう>

誰が呟いたのか知らないが、アイコンに現れたその言葉に同意しつつ

……

機を待つ為に迫る触手と相対した

▼ ▲ ▼ ▲

「ん……」

船が、揺れている

皆の気配が甲板に集中してる、ああ……行かなきゃ……

ぼんやりとそう思い、揺れまくる船の壁に何とか手を付き、立ち上がった

「つて、あれえー……」

（俺ってば……いつの間に気配とか分かるようになったっけ……）
徐々に覚醒していく思考の中でそう考え、ああ俺すげえじゃん！！
と思った瞬間、感じていた気配が消える

「え、えええ皆一気に消えたのか？！つてそれはねえから……俺の
察知能力って寝起き限定かよ？！」

意識が覚醒してねえ方がすげえって俺どんだけなんだ！！
ガビーン、と少々落ち込みつつ甲板に向かう

さっきの感じたものがただの寝起きの錯覚じゃなければ、皆の他にも何かが居て、そいつは……

「怯えてた……」

怖いと、痛い、助けと……声無き声で、泣き叫んでいた
ただの錯覚かもしれないが、確かにその悲痛な声は届いた
だから、

「救いにいかねえとっ」

ソイツは俺を信じてる
だから必ず俺はソイツを助けだせる……何故なら、

「俺は俺を信じてる、んで、そいつも俺を信じてる……なら俺、最強じゃん？」

そつだ、俺は最強だ
無能だけど最強だ、何もすげえとこねえけど最強だ、世界一だ、俺は最強最強最強……
昔からずっと続けてきた、何が何でも、何があっても全ての事を信じ続けること
それが俺の……

「俺の唯一の才能だぜ!!」

叫び、一気に甲板への階段を駆け上がる
見えたのは穴だらけの床と、疲労が現れている仲間達の姿、そして
……

「おまえか……俺を、ずっと呼んでたの」

助けてと、悲痛な声無き声を上げていたのは昼間会った時と同じ種類の触手だった

「葵、様……?!」

驚いたようなセイレンと、目が合った

所々かすり傷のようなものが見えたが、どうやら無事なようで安心した

皆も似たようなモノで……驚く視線を浴びながら、俺は『怯えている』そいつに話しかける

「なあ、俺の言葉分かるよな？俺、おまえを助けに来たんだ」

何を、といったげな顔で俺を凝視する皆

普段と違い、呆れたような視線じゃないのが新鮮だ
そして一歩、俺が踏み出した瞬間

『イヤダ、コワイ、コナイデ』

幼子のような声が頭に響き、同時に触手の一本が俺へと向かってきた
ああ、思った以上に早いなあ……視覚は問題なく触手の動きを細やかに捉えるが、如何せん俺は運動神経が皆無だ

（あれは痛いな、ぜってえ……あー、嫌だなあ……当たる）

一発KOとかカッコわりいから耐えろよ、俺……歯を食い縛り、来るべき衝撃を受け止めようと歩みを止めた、瞬間

「遠方より来るは疾風……軌道を逸らしなさい……!」

セイレンの声と共に、真っ直ぐ俺の額へと伸びていた触手が少し逸れた

それは、ピツ……と掠った頬に傷を残していく

「何を考えているのですか葵様！！逃げて下さい戦闘では役立たずと仰ったはずです！！」

「はは、相変わらずセイレンきついなあ……」

『コナイデ、コナイデ』と叫び続けるそいつから目を離さず苦笑すると、他の皆からも怒鳴り声のようなものがあがる

「おい葵！！ふざけてる場合じゃないんだ、お前は下がれ！！」

「それで御座る！！危のう御座るよ葵殿！！」

「其処に居ちゃいい的になってんさ！！下がるんさ、葵！！」

皆の声を受け止めながら、また一步踏み出す

それと同時に叫びも大きくなり、触手が向かってくる

「あ、危ないですう！！」

ビュ、と音を立てながら比奈乃の撃った弓が触手に当たる

先についているトイレのすぽすぽの感触に怯えたのか、触手の狙いが少し外れ、肩先を掠めていく

一層皆の声が大きくなるが、俺はただ……目の前に居る触手が、ただ怖がっている子供にしか見えないだから、

「大丈夫だ、な？俺は、おまえを傷つけねえよ……コイツ等だっておまえに驚いたただけで皆良い奴なんだ、大丈夫だ、何も怖くね

えよ、な」

手を差しだし、異形の触手に安心させるように微笑み近づくその行為に、何一つ恐れは感じなかった

「……ドレウイー……」

ふと、姉ねえちゃんが静かに俺を呼ぶ

視線を向けると、まるで仕方ないわねえ……と言いたげに苦笑される

「貴方のその妄想に侵食されてる頭では、その子が怯えてる可愛い美少女に見えるのかしら」

「んー、可愛い美少女ってか……小さい、子供みてえな？」

俺の言葉に皆、固まる

その表情は一樣に……あ、頭ついにぶっ壊れたのか……って、失礼だなあ皆……俺まだ妄想とリアルの中間点に居るって

口に出して言うと、更に引かれた……皆俺を苛めて楽しいのかこの野郎……！

沈黙する空間に、姉ねえちゃんが相変わらず、

「まあドレウイー……！貴方いつの間に子供好きになったの！？まさか将来の為の妄想し過ぎて頭の中でだけパンになってたりするのね？！そうなのね？！」

ぶっ飛んだ発言をする

時折姉ねえちゃんは俺よりすげえんじゃねえかって思う……ナニがって言うと、もう自明の事実だろ

だが何故か周りの視線が痛い

痛すぎだろこの野郎……

「ち、ちげえよ姉ねえちゃん！！あーもう、だから……」

なんと言えはいいのだろう

選択肢？：俺はアイツを助けたいんだ！！↑触手なのに？

？：アイツはただ怯えてるだけなんだよ！！↑だから、触手なのに？

？：ただアイツは怯えて、助けを求めてる子供なんだよ！！
↑頭可笑しいんじゃないの？

（やべえ、どう言っても俺変人扱いだぜ……）
今日ほど自分の何時もの言動を反省した日はない……そう思っている、

「分かってるわよ……葵」

ふいに、姉ねえちゃんが静かに笑う
不覚にも、ドキッ……とするほど綺麗な微笑だった
そして、形の良い唇が告げた言葉は、

「私様は、貴方の姉ねえちゃんだから……頼りなさい、私様は貴方を信じているから」

その、一言

「……はは……サンキュ、姉ねえちゃん……これで俺は、誰よりも完璧に俺を信じられるぜ！！」

ぐっ、と親指を立て合い、やはり言葉を理解しているらしいそいつ

に向き直る

（待ってたって事は、救って欲しいんだよな、お前は）

そう思いながら一步を踏み出そうとした瞬間、俺の隣でフェルちゃん
のアイコンが現れる

其処に書かれていたのは……

<み、皆ひすいクンの事信じてるよ？ほら……>

<よく分からんが、某もお前を信じてやっているからな>

<カツコつけ過ぎなんさ、お前は……信じてるから思うようにやる
んさ！>

<葵クン、私達だって信じてるんだよぉ？だから、思いっきりゴー
！！>

思わず、苦笑してしまう

俺の仲間達はなんて良い奴なんだろう……悔しいが、そう思ってし
まう

口を開こうとした瞬間、セイレンのアイコンが俺の目の前に現れた
そこにあつたのはただ一言

<葵様を信じます>

「……っ、はは……」

（やべえ、何か、何て言っていていいか分かんねえくらい……）
親指を立てて、小さく頷く皆に胸が熱くなる

（ああ、最高だぜおまえら皆っ……！！）

一步、踏み出しそのまま待っているソイツに走り出す

『イヤ、コワイ、イヤ、イヤ、イヤイヤイヤっ、コワイ』

向かってくる触手を、皆が弾き飛ばしてくれる
それでも何本か身体に掠り、傷を付けていくが……時には眼前すれ
すれで弾かれるものもあるが、歩みは止めない
(俺は死なねえ、絶対死なねえんだよ!!)

「おまえ、聞こえてつか?!俺はおまえを助ける!!だからお前も
今以上に信じる!!俺を、皆を信じる!!」

——必ず助ける……!!——

ふいに、一瞬触手の姿がブレ……幼い少女の姿へと変わる
その子は涙で濡れた顔で、その小さな手を必死に伸ばし、

「たす、けて……!!」

はつきりと……

頭ではなく耳にその声が届いたと同時に、遠くから冷たい声が聞こ
えた

「開け扉……ふふ、邪魔は、させない……さあ……」

目の前の少女の身体に鎖が巻きつき、その瞳が絶望に染まる

「に、ゲテ!!」

『貫け』

直後、身体に衝撃を感じ世界がぶれる

(あ、れ……なんで……)

其処まで思った瞬間、ゴポリツ……と何かが口から溢れ、

（あ、あ……なんだ、よ……まっか、じゃん……）

少女へと伸ばしていた右手が、赤く染まっていた

まるで見えない壁に縫い付けられたかのようにそのままの体勢で静止していた体が、

ズルリツ……と突き刺さっていたソレが抜けていく小さな衝撃が合図だったかのように、沈んだ

（なんだ、俺……はは……）

痛い、ものすごく……死にそうなくらい、痛い

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイ
イ……

（死ぬ、死ぬのか？痛い、イタイイタイ痛い死ぬ？イイイイタイ、死ぬ、イタイ、イヤだ、こんな、こんな……おれ……は……）

急速に狭まっていく視界に、鎖に絡め取られ姿が変わっていく少女の姿が目に入った

彼女は、必死にこちらへと手を伸ばしていて……

その目にあるのは救済を求めるものじゃなく……逆に俺を助けようとしているかのようで、

「いやああああああっ！！！！」

何処からか響いた悲鳴を合図に、彼女が鎖に飲まれ形を変えた
(と、り……?)

大きな黒い……鎖に絡まったかのような、鳥

(ああ、たすけ、ないと……ないて、る、いまも、あそこ、ないて
……)

左腕を、何とか持ち上げ彼女へ伸ばす
そして無事だった右足だけで、床を這う

「たす……たす、け、る……から……」

前が段々と見えずらくなっていく

それでも俺は、泣いてるあの子を助けなくてはいけなくて
何が何でも助けなくちゃ、いけなくて……

進めているのか止まっているのかすら分からない
ただ分かるのは、あの子が、『彼女』のように……手を伸ばしてく
れた人を傷つけた事で狂いそうな程苦しんでいること

「葵様……っ！！……れ……か………を……！！」

ふと、セイレンの声が聞こえた気がした
その後皆の声も響く

何を言っているか分からないけど、泣きそうで……

（おれ、また……）

見えていた筈の何かが、消えていく
それと同時に、深い深い闇に意識が沈んでいった

命題？：『最善』ならば『不可能』を覆す事が出来る

触手だと思っていたものが、少女の姿へと変わり叫んだのは、

「たす、けて……！！」

ただ一言だった

だから私達は彼を信じてよかったと、心の底からそう思った
その油断が、こんな事態を招いたのかもしれない

（な、にが……）

何が起こったか分からない

それは私達も同じだった……ただ、彼の身体をいきなり現れた鎖が
貫いた

脳がそれを認識するよりも早く、彼の身体から鎖が抜かれた
当然、それは彼の血で赤黒く染まっていた……

ドサツ……と床に伏す彼の口から大量の血が溢れたのが見えた瞬間、

『……………！！！！！！』

ただの音なのか、それとも声なのか……

聞こえたのか自分が言ったのか分からない程大きく悲痛な悲鳴が辺
りに響いた直後、身体がやっと動き出す

「葵様……！！」

まだ、生きている

その証拠に彼はまだ、彼女——鎖に絡め取られた鳥——に手を伸ばし、床を這うように進もうとする
口からは絶え間なく血が溢れるが、焦点の合って居ないその虚ろな目はまだ彼女へと向けられている

（っ……！！）

何故かは分からない

怒りに似た、けれどももっとドス黒い何かが心に溜まっていくのを感じた

それは誰に、何に向けたものなのかは分からない

けれど、彼が私を微かに見た瞬間それは収まって……

（一体、何だっけ言うのですか……こんな……っ今はそれどころではありませんね）

「誰か、治療を……！」

自らを痛めつけるかのように船に何度もぶつかる大きな鳥を横目で見ながら、叫ぶ

叫んだ後、思わず舌打ちしたくなった

生憎とこのクラスには治療を本業とする者は居ない

そんなことは、分かりきっていたはずなのに……

（っ落ち着いて下さい、動揺など……私らしくもないですっ……）
取り敢えずは止血をするが、ただ宛がった布が赤く染まるだけで、意味など一つもなかった

「っ……この、傷はもう……」

多少の治療の心得がある鴻苑が、唇を噛み締める
その先は言われなくても分かっていた
誰の目から見ても、もう……

「な、何を言っているで御座る！！皆……なんでそんな、黙るで御座るか？！そんな、そんなことありっこないで御座る！！兄者、違うで御座るよね？！葵殿は、葵殿はまだっ……！！」
「っ……」

詰め寄られ、帷様は苦悶の表情を浮かべる
その様に、柚李様の瞳から大粒の涙が溢れ始め、

「あ、兄者……？ど、どうして、どうして何も言って下さらぬ？！何か、何か言ってくだされっ！！」

縋るように叫ぶ
微かに、震えた帷様の言葉が聞こえた

「すまぬっ……」

誰もが一番言いたくない、聞きたくない言葉だった

「そん、なあっ……」

押し殺したような泣き声が聞こえて、それが段々と伝染するように
広がっていく

（ああ、悲しみというのは痛いのですね……）
自分ではどうしようもない無力さの果てにあったのは、痛みで

何かが、頬を伝って……目を閉じる彼の瞼に、落ちた
その直後、彼の瞼が微かに震えた

「葵様……?!」

思わず跪き、近寄った
僅かに開いた瞳が私を捉え、

「せ……れ、ん……」

掠れた声は、上手く言葉を成さない
だけど何故か彼が『セイレン』ではなく、今聞こえたように『せれ
ん』と呼ぼうとしたのだと頭が勝手に認識して、

——ああ、起きたのかセイレン……——

一瞬脳裏を過ぎったのは白く長い髪をした少女
大きく厚い眼鏡を掛け、冷たい表情で何時見ても古びた本を手に大
事そうに抱えている……

……『何時見ても』?

何かを思い出しそうな、何か大切な事を忘れているような……そんな錯覚のような感覚から抜け出せない
何かを知りそうで、知りたくない何かを思い出しそうで、身体が震える

頭のどこかで警鐘が鳴った、その直後、

「あー……こりゃー……派手に遊んだんだなあ」

私の思考を遮るかのように掠れた声が聞こえた
そのざらざらとした声質と、困ったように義腕で頬を掻く来訪者に
乱れた心が静まっていくのを感じた
理由は違うが、皆も少し落ち着きを取り戻したように見えた

「藍、様……」

悠然と、優雅とも思わせるような足取りで私達の元へと近づき手を
挙げ笑う

「ん、よおセイレン」

「よお……では、ありません……葵様がっ……」

また胸に痛みが甦って来る

どうしようもないのだと、頭では分かっているのに……

「ひっく……助けて……」

ふいに、フェルディーン様が藍様の服にしがみ付き、

「あ、葵、クン、をっ……助けてっ！！」

叫びを、上げた

それを合図に、口々に彼に縋るように私達は……葵様を助けたいと、
叫んでいた

そんな私達に、少し困った顔をした後彼は、

「……俺、確か今日から教師だよなあ……よし、じゃあ一つ授業をしようか」

誰もが予想していなかった言葉を、口にした

「……………は……………」

固まる私達を他所に、彼は鼻歌混じりにアイコンを起動させ、

「それじゃあ皆さん、授業を始めようか」

ニヤリと不敵に笑った

そして彼が左手を上げると、同時に二つのアイコンが現れ……

「なっ……………?!」

「う、うそ……………い、アイコンが同時に……………」

「三つ……………?!」

驚く私達の前で彼はニツコリ笑い、

「一人に扱えるアイコンは生涯多々ある可能性がある……………お前達が今目にしているように、な?その種類は同系列だけではなく……………例えば、」

葵様の前に手を翳し、

「開け扉、我望むは癒しのヒカリ……………」

「っ……………!?!」

みるみるうちに、葵様の傷を治していった
言葉を失う私達の前で、彼は……

「つーことで、と……ほーら起きろ、俺の授業では居眠り厳禁」
「うぐっ?!」

葵様を蹴り上げて目覚めを促した

「ちょ、え、あ、藍?!」

「ん、なんだ?」

「な、何だじゃないさ! ええええと、葵は今まで重症でっ」

「ああ、みたいだな」

「みたいだなって……」

ああ、どうしよう……藍様はやはり何処か葵様に似てらっしゃる
何処かといえば……いや、止めておこう
何故か一気に脱力感が体中を襲ってきた
すると、

「つつ……い、てえ……」

「っ葵様?!」

蹴られた葵様が薄っすらと目を開ける

顔は血が足りないのか蒼白だがどうやら大丈夫そうだ

「よし、起きたな」

「起きたなって……あ、れえ……? 俺……ああ……?」

「説明は……そうだなあ、皆に聞いてくれ、さて、今日の講義内容
だけだ」

其処まで藍様が言った瞬間、ぶつかり続けていた鳥の動きが止まる
心なしか意思というものが感じられなくなっている
それをただ静かな笑みで見た後、彼はゆっくりと話を再開する

「……さて、『最善』ならば『不可能』を覆す事が出来るかどうか、
って謎を今日は解いてみようか」

「そ、それはいいですけどお……って、藍さん危ないですうっ!!」

楓様が声をあげたと同時に、背を向けている藍に向かって鳥が襲い
掛かるのが見えた

(っ、早い……!!)

触手だった時に比べ段違いの速さ
今度こそ本格的に……

(葵様と藍様だけは、何とかお守りしなければ……)

咄嗟に彼の背に躍り出ようとしたが手で優しく制止される
彼の背に鳥が飛び掛るまで僅かな時間しかないというのに、何故か
時が遅くなったように感じ、

「あーあーあー……だからなあ……授業中はちゃんと大人しくしな
くちゃいけません、めっ」

振り返る彼がゆったりとした動作で鳥に向かって手を翳し、

「授業中は席立ち厳禁……ほら、」

手が、鳥の額に触れた瞬間

「座りなさい」

ズウンッ……！！

まるで地響きのような音を立てながら鳥が床に這いつくばる
呆気に取り残れている私達の前で、藍様は……いつの間に取り出した
のか大きな分厚い本を手に持ち、朗々とした声で言葉を紡ぐ

「最善ならば不可能を覆す事が可能か……この命題は、偽だ」

話している間鳥がもがくが、もがけばもがく程床に押し付けられて
いく

一体これは何の術式なのだろうか

彼の翳した手の先に小さく現れているのは見たことのない陣の紋様
で、どういったものかさえも分からない

「判例を挙げるならば、命あるものはどれだけ研究を尽くしても不
老不死を望めないといった所だなあ」

けどまあ皆強欲だから、何かと噂聞きつけては手に入れようとすん
だけだなあー

クスクスと……何かを思い出したように藍様は笑い、翳していた手
を下げ指を鳴らす

直後、

ガキーンッ……！！

（鎖が……）

「先も言ったけど、最善では不可能とされたものを覆す事は出来ね
えんだあ」

鳥の鎖に亀裂が走り、それが徐々に全体へと広がっていく

「最善もただ初めから決められた道筋だからだ、なら、不可能を覆す事は出来ねえのか」

ピシピシと音を立て、鎖が微かに砕けた

「これは人によって色々だけどなあ……ま、俺から言わせて貰えば必要なのは願い、イメージだなあ」

クルリと、私達が、鳥が、聞いているのを確認するかのように辺りを見渡し笑う

「ならば、不可能を覆す事は出来ないのか」

まるで藍様の言葉に呼応するかのように、何かを待っているかのよう
に鎖はひび割れて、

「その命題が導くのは、」

鳥の姿が揺らぐ

「問う者が乞うならば真為り得る扉への鍵」

そして其処に現れたのは、

「これにて簡単な講義は終わり、復習は各自するように」

藍様がアイコンを仕舞い優雅に一礼をする

その視線の先に居るのは先ほど見た少女……

「っ、お、まえ、さ……」

よろけながらも葵様が立ち上がろうとする

何が言いたいか、その時だけはすぐに分かった

肩を支えながら立ち上がらせると、彼は息を吸いゆっくりと先ほどは届かなかった手を差し伸べ笑う

「来いよ、こっちに」

手を伸ばしかけるが、少女は不安げに私達を見てから彼を見て、

『――、――……』

音を発した

彼には言っている事が分かるのか、苦笑しながら

「大丈夫だって、皆怒ってねえよ……なあ？」

笑いながら私達を振り返った

少し、皆で顔を見合わせた後……当たり前だと、頷きあう
それで少し安心したのか少女がゆっくりと手を伸ばし……

彼の手に、触れた

直後、

「……ついよっしゃああっ！！！！」

葵様がガッツポーズをしながら大声で喜びの声をあげる

(……先ほどまで死にかけていて、皆で涙したというのに……)
少し現金過ぎやしませんか……同じ事を思ったのか皆が苦笑する
中には脱力の余り、膝を付く人も居たが……

「いやあ良かったぜ！！ん？あ、お前ルナリスっつーんだな！んー、
んー……じゃあルナだな！！」

「ん、そうだ！俺は葵、葵『ウィンデル』ひすい！宜しくな！！」

『……、……！』

少女を抱き締め心底嬉しそうに笑う彼を見ると、何故かイライラとしてくる

ああそういえば、だ

今日は彼に色々と隠し事をされていたり彼が勝手な事をして死に掛
けたり今も……

(……原因は分かりませんが、葵様の今の行動は私をとて不愉快に
しております故に、)

「おお？そうか、ルナは見た目ちつくくて可愛いのに俺と同年か
ー……って、うん？どうしたセイレン？」

「……葵様、何か言い残すことはありますか」

「へ？って、セイレン何その握り締めて今にも殴り出しそうな拳……
あ、もしかして嫉妬か？そうなのか？！ってことは俺もまだ捨て

たもんじゃねえって事だよなあ!!」

「っこの破廉恥男っ……言い残すことは無いと判断しますいいですよね、ええそうします」

「は、へ、えと、セイレン……?」

この鈍感男は私が……私達がどれだけ心配したと思っているのだろうか

それを礼の一つは、まあいいとして少し殊勝な態度を心がけるとかくらいしてもいい筈だ

(いえ、するべきです)

私が殴る体勢を整えた瞬間、

「そうだ、皆……ありがとな」

葵様が嬉しげにニツコリと、笑った

「その、なんだ……あー……あれだ、あの……あの言葉が、すごい嬉しかった……」

思わず体勢を正し、照れたのか少し俯きがちになってしまった葵様を見る

顔は見えないが耳まで真っ赤になっている

後ろに皆から、忍び笑いのようなものが聞こえ……それが耳に入ったのか彼が勢いよく顔を上げる

羞恥のあまりか少し涙目になっていて……不覚にも可愛いかもしれないと思った直後、

「と、とか仕方ねえから言ってやったんだからな!!か、感謝感激雪霰だこの野郎!!」

色々と限界だったのだろう、言うだけ言って

「畜生馬鹿にすんなよ馬鹿野郎ーっっ！……！」と、走り去ってしまった

（……っふふ、分かり易い人ですね……）

彼のそういう所は、嫌いじゃない

何故だか少し穏やかな気分になりながら……ルナリス、と彼が言っていた少女を連れて彼の部屋を後で訪ねる事にした
ふと、空を見上げると薄っすらと明るくなってきていて……

「今年もまた、課外授業があつた日は帰宅出来なかったな」

「まー……中等部の時からだから、毎年恒例さねえ……」

「そうですねえ……でも、キツイものはキツイですう」

苦笑しながら船が進んでいる先を見ると、

遠くの方にやっと見慣れた島国が見えてきた

ああ、今年は例年に比べて大分ハードな内容だった……そして、思うのはやはり

「あー……お風呂に入りとう御座るー……」

そう、入浴の事

家に帰って早く汗を流したい……そして少し遅くまでまどろむのだ
温かい陽だまりに包まれた感覚を思い浮かべていると、

「そうねえ……少しべとべとだしね、ふふ……ドレウィーに何時も
のように洗って貰おうかしら？」

（っ?!）

思わず、自分の耳を疑うがフェルディーン様も同じ様に聞こえたらしく耳まで真っ赤にして動揺していた

付け加えて言えば、ルナリス様も真っ赤になっていた

「え、えええ？！あ、あ、アイシス先輩、おふ、お風呂、あ、ああ
葵クンと入って……！？」

「っ……あ、アイシス様、は、破廉恥で御座いますよっ……！！」
『――、――！！』

三人で抗議すると、ニツコリと彼女は笑い

「あら、ナニを想像してるのかしら？私様はただ、何時ものように
服を洗ってもらおうと思ったんだけど？」

そう勝ち誇ったように告げる

ああ、やられた……！！

物凄く大きな敗北感が心を占め、正直立ち直れなくなりそうだ

（……アイシス様は、人が悪いです……）

溜息と共に聞こえないように呟き、ふと……講義終了と言った後か
ら何時の間にか藍様が居なくなっていたことに気付いた
どうやら甲板には居ないようで

（何処に、行ったのでしょうか……？）

可能性から言えば部屋に戻ったと考えるのが無難だろうと結論付け、
少しずつ近づく自分達の帰る場所へと目を向けた

●
●
●
●

制御室……そう書かれた扉に静かに手を当て鍵を外す
中に居たのは、やはり……

「……こんな所で寝たら風邪ひくだろお、普通……」

ぐーぐーと寝こけているジャンス先生だった

（あんだだけ揺れてよく起きなかったよなあ……）

苦笑しながら何とか肩に担ぎ上げる

少しよろけるが耐え、立ち去る前にジャンス先生が格闘していた制御装置の内容を念のため確認する

記憶に間違えがなければ問題ない内容だ……さすが、機械関係強いだけはある……

小さく微笑みながら部屋を出ようとした
その瞬間、

「……俺に何か用かなあ？」

後ろは振り返らず、呟く
すると、

「さすがですね……驚いちゃいました、アレも、コレも」

クスクスと楽しげな甘い声が耳元で響いた

（ああ……）

「そんなことねえ癖に……口が上手いんだなあ、———」？

（俺はまた一つ、歴史を変えてしまった）

嘲笑とも自嘲とも取れる笑みを浮かべた俺の耳元で、

「お褒めにお預かり光栄でありますわ」

声の主が妖艶に微笑んだ

晴れ+雨〃モヤモヤとした天気（前書き）

今回は特にダラダラとした、日常（？）をメインで書きました！
「ダラダラとか嫌よ！」や「さつさとお前お得意の中二病出せやゴ
ラァー！」な人は今回のお話は見なくても特に影響しませんので…
…って、そもそも見てる人居るのかな（笑）
↑

晴れ＋雨＝モヤモヤとした天気

（鳥の声が聞こえる……）

微かにそう思い、身を包む温もりを抱き締め身を丸める
まだ少しまどろんでいたい……そう思った瞬間、少しだけ意識が覚
醒した

「ああそうか、俺は何時の間にか眠っていたんさね……」

昨日の課外授業は色々と重かった……

思い出して少し苦笑して、日課である水遣りをしようと微かに肌蹴
ていた薄い着物の前を直し外に出る
木々の間を風が駆け抜けていく

「ん……気持ちいいさね……」

母が生きていれば洗濯日和だと笑っているのだろう

花が咲き乱れる横にある、小さな母の墓を見てそんな事を思った
そして目を閉じ、一つ息を吸う

新鮮な空気で肺を一杯にしてからゆっくり目を開けた

桶に映ったのは見慣れた自分の顔……それを見つめながら一言、小
さく呟く

すると、

「ん、今日も狙い通りさ」

黒から碧へ瞳の色が変わった
それを確認し、ニツコリと微笑む

昨日大分譲与の方に力を注いだが今日も衰えては居ない

それに安堵しながら、桶に水を入れて母の花に柄杓で撒いていると

……

風が、見知った気配を乗せて届けてきた

「……来た、のか」

振り返らずとも分かる、この気配は……

「来るな、って言いたげだね……酷いなあ、一応僕は……君のお兄さんなんだけど、な」

アスベル「ロワード」ウィンダス、この国——ウィンダス——の第一王子……俺の、腹違いの兄

（何度、来るなって言ったら分かるんさ、ね……）

無視して水遣りをしていると、苦笑しながら近寄ってくる音が聞こえ、

兄は俺の母さんの墓に小さく手を合わせた

「喜代美さん、亡くなってからもう5年、か……はは、通りで僕達も大きくなる筈だ」

「……そうさね、大きくなった……なのに何時まで、ロワード家は王位継承を先延ばしにするんさ？」

「そうだな……何時までも、かもしれない……」

何を馬鹿な事を……そう思い兄を見るがその視線は真剣そのものだった

何が言いたいのか何となく察し、

（アスベルも父さんも馬鹿だ……）

ただ思った事を心の中で毒づく

幼少より身体の弱かった兄

だから彼は並みならぬ努力をした

全ては王に、この国の未来を背負う為に……なのに……

「僕も父上も、王位を継ぐのは僕より君の方が良いと……」

「っ、黙れっ!!」

叫んだ拍子に、桶の中の水が零れた

それすらも予想はしていたとばかりに、アスベルは動揺しない
それ所か……

「鴻苑……考え直さないか？君が知らないことは全部僕が教える、
側で手伝うから……」

王宮に戻っておいでと、そんな事を口にする

もう何度目の事か……怒鳴ることなど意味が無いと、分かりきる程
繰り返された平行線の要望に力なく首を振る

「オレは、東……東 鴻苑だ……」

「……分かった……今日の所は、引き返すよ……でも僕は、諦めな
いからね」

意思の籠った強い瞳……

真っ直ぐに見つめ返す事は出来ず、ただ黙って俯いてその背を見送
った

「……オレに、王なんて……」

（ああ、くだらない話さね……）

何故、努力したのにオレに譲ろうとする？

昔語った夢をその手で叶えられる所まで来たというのに

何故……？

「はあ……関係ないさ、全部……オレは、東家最後の一人なんだから」

空を見上げると雲ひとつ無くて、まるでアイツみたいだと思った
ふと……こんな話を話したら、

「王様？！いいじゃんいいじゃん！！え、おまえなるの嫌なのかあ？なら俺に王様ならせろよ……」

そう返してきそうだなあと、そう思った

「はは……アイツは、相変わらず馬鹿だから、なあ……」

少しだけ、笑えた気がした

▲ ▼ ▲ ▼

香ばしい匂いがキッチンに広がっていく

鼻歌混じりに料理をしていた私は、出来上がったジャムを一口味見
する

「うん、美味しく、出来たっ」

父が家の農園で作っている果物を使ったのだから、当然といえば当

然なのだが、嬉しくなる

（だって、今日は……今日から、増えたもんね）
居候……という括りらしいが、それでも新しい住民が増えたことに喜んでいると、

「おや？なんだいフェル……今日は一段と張り切ってるじゃないかい」

「ふふふ、きつと昨日から住むようになった『男前』さんのお陰かねえ？」

クスクス、と笑いながら頷き合う父と母に思わず顔まで真っ赤になっ
てしまう

否定してもただ「はいはい、冷やかしさんは退場しますよー」とニ
ツコリと出て行ってしまった

「も、もう……お母さんもお父さんも……」

確かに、新しい住民が増えたから張り切って朝食を作った
それはそうなのだが……

（好き、とかじゃ……な、ないもん）

昨日、勢いで彼を面倒見ると言ってしまった時には驚いた
皆も驚いていたが……あまり詮索されずに決まってしまったのは正
直有り難かった

「……葵、クンに……ちよっぴり、似てる……もん、ね」

大切な大切な幼馴染の彼に似ていた
だから、困った顔をさせていたくなって……笑って欲しくて……

「わ、わた、私何考えてるの……！……」

これではまるで自分が、幼馴染の彼の事が……

（ち、ちちち違うもん！！だ、だって……だって、葵くんは……）

「セイレンが、好きだもん……」

小さく呟いてから後悔した

どうしようも無く、胸が痛んだ……だから、やっぱりそうなのだと、自分の本当の気持ちに気付いてしまって

「……どう、しよう……」

葵くんの笑顔を見るのが好きだ

彼が自分に笑いかけてくれると、すごくすごく嬉しい

けど葵くんはセイレンの事が一番……そう思うと、泣きたくなった
その時、

「……フェルさん、何がどうしようなんだ？」

「ほ、ほえ?!」

振り返ると、藍さんが居た

朝起きてから剃ったのか、無精ひげが無くなりかなり若く……学生
でも通るように見える

「あ、えと、なんでも無いです……そ、その、藍さんご飯食べるっ
？」

「ん？ああ……頼むわ」

ニツコリと、彼と良く似た笑顔を浮かべる藍さんに心が温かくなっ
ていく

はい！と、元気良く返事を返し朝食を並べていくと、その間藍さんはニコニコと微笑みながら見ていて……
（な、なんだか……少し恥ずかしいかも……）

「ん、どうしたフェルさん？」

「はへ、な、なんでも、ないよっ！！」

頬に熱が上ってくるのが分かる……きつと今、私の顔は真っ赤だ
藍さんに見られないように気を付けながら準備を終え、席に付く

「んー、いい匂いだ……フェルさん、料理上手だなあ」

「ほえ、えと……そ、そんな事無いよ……お母さんとお父さんが、作ってくれたお野菜や果物使ったから……」

「……それだけじゃないって、フェルさんが作るから、美味しいんだよ」

カリッ、とパンを一口食べてから藍さんは微笑む
その言葉が、その微笑が……初めて葵クンに料理を作った時とそっくりで、思わず手が止まる

「ん？どうかしたか、フェルさん？」

心配そうなその瞳も表情も大好きな彼にそっくりで、
トクン、と微かに胸が高鳴った

「う、ううん……な、何でもない、早く食べて、学校行かなきゃ、ね？」

まだ心配そうな藍さんに尤もらしい理由を述べ、朝食を再開した

……この後急ぎ過ぎた私が盛大に咽せ、逆にもつと藍さんに迷惑を掛けてしまった

それでも苦笑しつつ怒らないでくれる藍さんは、葵クンと同じで優しいんだな、と……少し嬉しく思った

●
●
●
●

「ドレウィーー！！さあ、さあもつと早く走りなさい！！」

「ちょ、姉ねえちゃん！！あんまし俺の背で暴れないでって、ちょ、色んな意味でヤバイって！！」

朝、最日常と化してしまっているこの騒ぎ……

それを合図に起き出し、仕事へ行く途中のおばちゃんやおじちゃんが手を振ってくれる

が、如何せん俺両手は姉姉ちゃんの太もも辺りにある

残念ながら手を振っている暇が無い

必死に走っていると何故か羨望の眼差しを向けてくる、モテない学生が居た

「って、今ぜってえ誰か誤解したろ？！したなっ？したなっ！したんだろっ？！！」

俺の声にそそくさと退出していった

（畜生っ薄情モノめ！！アイツの名前はもう、えーと……モテ無い学生だから、モテナま！！モテナま、だこの野郎！！）
拳を握り（締めれていないが）心の中で叫んでいると、

「ふふふ、不甲斐ないドレウィーの代わりに貴方の分も振ってあげるわ！！ハロー隣人さん達っ！！」

姉姉ちゃんが背中であた暴れる

何とか落とさないように頑張っていると、

「ははは、大変だな葵……んじゃ、オレはさっさと行ってきまーすっ」

「あ、ちよっ……汚えぞジャンスせんせええっ！！！！」

ジャンス先生が、軽やかに姉姉ちゃんを負ぶって走っている俺の隣を走り抜けていった
起きたのは俺より遅かったのに
家を出たのも俺より遅かったのに……

「大人って汚ええええ！！！」

毎度叫ぶ俺の言葉に、おばちゃんやおじちゃん達が笑っていた
疲れてるけど、ちよっとしんどいけど、

（ああもう仕方ねえなあっ！！）

俺を見て、馬鹿してる俺を見て、誰かが笑えるなら……

「今日も遅刻なんだぜこんちきしょおっ！！」

俺も幸せだ

そう思い、背で同じく楽しげに笑っている姉姉ちゃんと何時ものように学校に急いだ

そして……

「はい、今日もお前等二人、連続遅刻新記録更新と……学校入

つてから遅刻の皆勤って馬鹿だわ、お前等、はははっ」

ジャンス先生の笑い声と共に、皆の笑い声が聞こえた
やっぱり俺達は何時を通り、一限目に遅刻し廊下に立たされた

「あー……何か廊下に立つの、慣れてきたぜ」

「ふふふ、ドレウイー……貴方まだ慣れてなかったの？未熟者ね、私様はもう慣れ慣れよー！」

「おお、なれなれ……何だか破廉恥な響きだぜ姉姉ちゃんー！」

二人して叫ぶと、教室の中からチヨークが飛んできた

胸の中心にクリティカルヒットし撃沈しながら暫く待っていると、

「よし、お前等入ってこーい」

ジャンス先生の声が聞こえ、教室に入ると

「おお？！藍！！おまえ、本当に教師になったんだなあ！！」

「はは……まあなー」

ニツコリと笑っている藍が居た

教師服のロングタイプを着込んで髭も剃り、無雑作だが髪もちゃんと束ねており、割と普通の教師に見えた

「なあ、なあなあ？藍は何教えるんだ？」

「ん？俺は……」

「あ、分かったわー！」

ふいに、少し大人しくしていた姉姉ちゃんが声をあげる
そしてそのままズイッ……と藍に顔を近づけ、

「破廉恥な内容の授業ね?!」

とんでもない事を口にした

「な、え、は?!」

「は、はれ……っ!」

「え、ええええええっ?!」

何を想像したのか顔を一齐に真っ赤にして言葉になって居ない皆に、
姉姉ちゃんは笑う

「ふふふ、皆初心ね!! 此处は私様が先輩として、」

理解が追いつかなかったのか、若干固まっている藍にズズイッ……
と更に近づく

そう、まるで……この勢いはまるで……って!!

「お、おいおいおい姉姉ちゃんっ!?! だ、ダメだって!! 藍今日が新任初日だし?! いきなり毒牙に掛けちゃダメだろ、こういうのはちゃんと手順踏んで教え込んでやらねえと!!」

「えええそっちいつ?!」

更に顔を真っ赤にした皆から突っ込まれる

（あれえ、俺何か間違っただこと言っただかあ?）

首を傾げるが、別に間違っただけのような気がした
そうこうしている内に、復活したらしい藍が困った顔をしながら、

「え、と、俺はそういう授業教えるんじゃないで、だなあ……って、何笑ってんですかジャンス先生!!」

腹を抱えて笑っているジャンス先生に憤慨する

「ぶはは、悪い悪い……プククッ」悪気度マックスなその返事にホトホト困り果てたのか溜息を吐く
そして、

「ああもう……取り合えず、授業始めるから」

すう……と、右手を顔の位置まで上げ、

「取り合えず立ってる皆、着席」

指を鳴らした
直後、

「っうわ?!」

「わお?!」

立っていた俺と姉姉ちゃんの身体が、重力に逆らい浮いた
呆気にとられている間に浮いた体が自分の席の上まで勝手に移動し、
椅子の上まで来たらゆっくりと下降し椅子に座らされる

「よし、皆……座ったなあ」

何事も無いように笑う藍を呆然と見つめた後気付いた

「っ藍!!!い、いいいい今の何だ?!俺浮いたぞ?!浮いた、マジ浮いたぜ?!」

（ヤツベエ俺人類の夢達成出来ちゃった的な?!こんなあつさり良いのかよ?!）

混乱する俺と違って姉姉ちゃんは……

「ふ、ふふふふ!ヤバイわ、私様の身体が軽過ぎていとも簡単に浮かされてしまったわ?!いやん、なんだか破廉恥で素敵!」

興奮し過ぎて途中から願望が入っていた気がしない事も無い

他の皆も驚いたらしく、呆然と藍を見つめていた

すると、笑っていたジャンス先生が立ち上がり、藍の隣まで行き笑う

「見ての通り、藍は俺等の知らなかったアイコンの力の扱い方を知ってる……聞く所によるとな、これは何とか大陸つつ……まあ、俺等の知らないところじゃ、普通にやってるらしい」

「何とかって……まあいいか……そう、その大陸ではさ、普通に色々そこちじゃ『有り得ない』こと出来るんだよね」

例えば……そう言い、アイコンを同時に二つ起動させる

「こうやって、多い人は同時に二つとか……扱っちゃってたり、な?」

ニコニコ笑いながらアイコン二つ同時起動を見せてくれる藍だけど、ふと脳裏に甦るのは昨日の事……

（あり?そーいや、昨日って……）

カタ、と小さく音を立ててセイレンが立ち上がり発言する

「……多くて二つ……なら、三つ扱った藍様は凄い、という事になりますね」

「っ、ちょ、それ言っちゃダメだって!!」

すると何故か、藍が焦る

何故そんなに焦るのか……訳が分からず皆で首を捻っていると、

「……ほお？お前、自分も扱えるのは二つまでです、って言ってたよな？」

「いつ……」

黒い笑みを浮かべているジャンス先生が、藍の肩をがっしりと掴む
セイレンはソレを見て、手を叩いて

「ああ、そういう事でしたか……申し訳ありませんでした」

カタン、と小さく音を立てて座った

顔に「いや、ちょっと頼むお願いだからそれ以外に何か言って?!」
と、ヘルプミー的な表情を浮かべる彼に、

「オレにウソつくたあ……いい度胸だなあ、おい？」

「ちょ、いや、あの、い、いやだなあ、はは……う、ウソだなんて
っ」

黒い笑みを浮かべ迫り来るジャンス先生にたじたじの藍

トン、と背が黒板に付いた……逃げ場はもう無い

彼の顔が青ざめた、瞬間

「あ、あ、あのっ!!」

フェルちゃんが、大きな声を上げた

(え、あ、フェルちゃん……大声、上げたのかあ……)

皆も同じ様な所に驚いたらしく、果然と……ジャンス先生までもが、注目する

が、途端に彼女はオロオロと視線を彷徨わせ始めた

（あ……そう、か……フェルちゃん、優しいもんなあ）

きつと藍が困っていたから声を上げたんだろう……やっぱりフェルちゃんは優しいなあ、うん

微笑み、

ガタンツッ！―ワザと大きな音を立てて席を立つ

「せーんせ、授業、押してるぜ？俺等つてば、普段何もしなくても中々進まねえんだからさあ、俺等が大人しい時くらいだろ？授業進められんのさあ」

笑って言うつと、溜息と共に額にチョークが飛んできた

「あでっ！―！」

思わず額を押さえて椅子に座り込むと、

「お前なあ………だったら、オレの時も大人しくしろよな」

呆れたような笑ったような声が聞こえた

そして、

「はあ、二人に免じてお咎め無しにしてやるよ、藍先生………けど、隠し事とかはよくない、だから今後すんなよ？」

厳重注意、とだけ言って軽く小突くだけだった
それに藍は軽く頭を下げ、呟いた

「……すいません、気をつけます」

「おう、気をつけるよ……あー、じゃあ残りの授業はオレが乗っ取ってやる」

「つて、はあ?!」

（ちよ、いきなりだなおい?!）

さっきまでちよびつとシリアス……じゃ、なくて俺ってばいい人だなあ的なオーラが漂ってたのにブチ壊し?!え、マジ生徒の努力を打ち壊しすんのこの人?!

意義有り、と手を挙げようとしたが、

「文句ある奴は便所掃除な?」

「大人しく授業を受けさせて頂きます」

やっぱりジャンス先生には勝てなかった

そして……今日も割と平和に賑やかな一日が過ぎていった

ずーっとこう、くだらなく続けばいいなあ……

窓の外の青空を見て、心の底からそう思った

▲ ▼ ▲ ▼

雲ひとつもない昼下がり

葵達が住む小さな島国、ウィンドスと遥か離れた古びた塔のあるその場所で一人……

黒いローブを目深に被った人影が空を見上げ、

「ああ……今日も雨が降る」

晴天、と呼べる天気にも関わらず溜息を吐きながらそう呟く
そして塔の扉を開けその嚴重な扉の鍵をかけた、直後、

ポツ、ポツポツ……

灰色の雨が降り始める

そしてあつと言う間に土砂降りとなり、地面に小さく芽生え始めた
若葉を全て押し流していった

まるでこの場所に咲こうとする事が間違いだと、嘲笑うかのように
……

「……ああ……何時か君と俺だけで、同じ雨を浴びたいよ……」

塔の中で呟かれた小さな声

それはすぐ、雨音に掻き消され誰にも届かず消えていった

そして今日も、

孤独な天才は幼き日を夢見て……心を殺せず命を壊す

全てはそう、世の為人の為……

非道で無慈悲な正義を盾に、多くのモノを壊し尽くしてその先へ進む
足元の屍を見つめても、ただ一言

「運が悪かったね」

眩きバキリツと踏み潰していった

喧騒＋距離＝傍観者（前書き）

喧騒＋距離〃傍観者

「よし、今日は此処までだ！お前等、予習と復習を忘れんなよ」
「お疲れ様だった！！」

授業の終わりを告げる挨拶を済まし、一息付く
そして、

「ああああ！！授業終わったぜっ！！」
「煩いです、馬鹿さ……葵様」

「はは、息苦しい授業が終わったからなあ！……って、ん？セイレンお前、俺の事馬鹿様って言いかけた？！」

葵が細かい所に気付きたまた何時もの痴話喧嘩が始まる

周りを見ても、ああ何時ものが始まった……と言った具合だ

（アイツ等も毎日毎日、よく飽きないさねえ……あ、椅子スイング
参連続ヒット、痛いさねえ、あれは）

数日前に自分も同じ事をされそうになった事を思い出し身震いする
セイレンは、いい意味でも悪い意味でも容赦がない

よくあれを喰らってすぐ立ち上がれるさねえ……葵の丈夫さは国一番
かもしれないと時たま本気で思う程だ

「鴻苑クン！！」

「ん……？あ、楓、どうしたさ？」

パタパタと走ってくる足音と声に振り返ると、居たのは楓と……

「あ、涼……今日はA組の方も、あがり一緒だったんさねえ」

違いは眼鏡を掛けているか否かだけ、と……楓と色んな意味で瓜二つの双子の姉、涼が居た

何が瓜二つかは言うのが憚られるので察して欲しい

誰に言い訳しているのか分からない状態のオレに気付いていない涼は、上品に笑う

「ええ、確か……藍先生？彼が新任として来られてから、日が浅いので……先生達も、会議というもので忙しいそうですわ」
「なるほど……会議、ねえ……」

（大方、飲み会って所だろうさねえ……無駄に騒ぐの好きな奴ばっかだし）

酔っ払ったジャンス先生が藍に絡んで困らせている姿が容易に想像出来る

思わず苦笑していると、何を勘違いしたのか涼が赤くなる

「あ、あの……私、何か可笑しな事を言いましたでしょうか……？」

殿方と話す機会などあまりありませんので……そう言い、少し俯く……って、

（ちよ、そのアングル地味にヤバイさっ……てか、涼また制服……）
とても清楚でおしとやかな性格をしているにも関わらず悲しいかな、涼のある部分はそれを吹っ飛ばすくらい成長していて、

簡単な話が俯いたりするだけで少し肌蹴ている制服の間から大きな

……

「おお！おまえ胸おっきいのな、谷間までくつきりだなあ！！」

「っ馬鹿！！お前馬鹿、女性にんな事言う奴が何処に居るさね！！」

いきなりオレの後ろの、良く見える位置に現れた葵が破廉恥な事を
大声で言う

ああほら、涼が真っ赤になって固まって……って？

「……と、殿方に……そんなにストレートに褒められたこと初めて
ですわ……」

何故に、今の何処にウツトリする要素があつたのだろうか

（女というものはよく分からんさ……）

少し脱力しながら、帰り支度を終えたらしい皆が集まってくるのが
見ていると会話が耳に入ってくる

「んで、胸のデッカイ楓似のお前は誰？何か清楚な雰囲気＋御嬢様
口調とデッカイ胸＋制服の肌蹴具合とのギャップで俺ドギマギしそ
うなんだけど」

「そ、そんなに褒めないで下さいまし……」

赤くなつた頬を押さえ、少し体を擦るとそれに合わせてある部分が
揺れて……って、いだったっ？！

急に頬を引つ張られ、引つ張つた本人に抱き締められる

てかハッキリ言うマジ窒息しそうだ、なんだこれ、オレを殺す気
なのか……とまで思いそうなほど、顔を胸に押し付けられる

押し付けている張本人……楓は少し不機嫌な顔で、「鴻苑くんは見
ちゃダメなのっ」と押し付ける力を強くしてくる

なんだ、あれはオレだけ有料なのか……酸素が足りなくなってきた
頭は、残念ながらそんな事しか考えてくれなかった

オレが地味にピンチな間も、葵と涼の話は続いてた

「あ、申し遅れました……私は涼、楓の双子の姉で御座いますわ」

「へー、どつりで似てると思ったぜ！なあ、セイレン、似てるよな？」

黙って待っていたセイレンに葵が笑いながら声をかける

微かに不機嫌そうに見えるのはオレの気のせいじゃない……と言い切れるかどうか危ういな、そろそろ酸欠で頭が回らなくなってきた……

「はい、そっくりで御座いますね……ですが……」

セイレンは其処で言葉を切り、真っ直ぐ……涼の胸を見据えて、

「女の価値は、ソレの大きさでは決まりませんから」

睨みつけるように言い捨てた

（……セ、セイレン……）

やっぱり悩んでたんだ、本気で……デリケートだもんな、ソレについてには女の子って……

楓の力が緩み、少しだけ自由になった思考でそんな事を考えていると、葵がああ、と手を叩いて笑う

「大丈夫だぜ、セイレン！俺はおまえがどんな胸のサイズでもストライクだぜ！！」

「……そんな事を聞いてなんて居ません、そもそも……破廉恥です、消えてください」
「うぐっ?!」

（あー、腹に決まったさねえ……はは、ご愁傷様さねえ……って、あれ）

腹を抑えて痛みに呻いている葵の横に憮然とした表情で立つセイレ

ンの頬が、薄っすらと赤いまさか、

（セイレンが……照れ、てる……？）

それ故に頭ではなく腹に打撃、と……へー、こりゃあ葵苦労するさなあ……

どうやら見ない所でこの二人、少しは進展しているようだ尤も、

「あ、葵くん、大丈夫っ？」

「ふふ、ドレウィー、愛の一撃は重いものよ？さあ立ちなさい！！立って愛を受け止めたと証明するのよ！！」

「あ、葵さん大丈夫ですのっ？」

葵に気があるのは他に三人も……ああ、自宅待機してるらしいルナも居た

兎に角沢山居る、アイツは何気にモテるからなあ……ダメなところが良いのだろうか？

ふと、そんな事を思ったが復活したらしい葵が顔を上げ、

「あ、鴻苑兄貴じゃん」

オレの後ろの通路を指差し笑って言った声に、思考が停止した

（今、アイツ……何て言った……？）

ゆっくりと、もう完全に力を入れて居ない楓の腕から離れ後ろを振り返る

葵の言葉がウソでありますようにと、ただそれだけを願って振り返った先に居たのは、

「っ……なんで来た、アスベルっ」

「……はは、そんなに怒らない欲しいなあ」

苦笑しながら言葉を紡ぐ、葵の言葉通り……オレの兄だった
(一人ならともかくっ……みんなの前で何で……)

「何度も言った筈さ、オレはならないっ!!」

「あはは、真っ向から否定されると辛いものがあるね」

「茶化すなっ!!」

兄が、どんな意図を持っているかは知らない
だが……

(オレは、幼かったとはいえ……自分の判断で王宮から離れた)

「オレにはもう、あの場所に戻る資格なんて無いに等しい」

だからもう、諦める

そう告げようとした瞬間、

「ひっがーしこーうえんっ」

真後ろで間抜けで馬鹿な声が聞こえた

しかも、オレを呼んだであろうその発音は……

「……だれが東公園だ、葵……」

「お、気付いたのか! さっすが公園!!」

「だから公園じゃないっ!!」

馬鹿にするのもいい加減にしろっ

そう言いかけた所で何故か首に腕を回され、頭を突き合わせるよう

な形になる

離せ、と怒鳴ろうかと思ったオレに葵が小声で

「おまえ、切羽詰り過ぎだぜ？口調、変わってる」

それだけ呟き、あつさりと離れていった

思わず振り返った所で見たのは、

「鴻苑兄貴さあ、あんまし俺の友達苛めんなよお？」

「苛めてるつもりはないんだけどね……そう見えたかい？」

「おお、見えた見えた、バリバリな！だから……今日の所は此れで帰ってくんねえ？」

俺に免じて、さ……そう言いニツコリと笑う葵と、

「……仕方がないね……それじゃあ君に免じてまた何時か、って事にしておくよ」

苦笑して去っていく兄の姿だった

兄の背を見送り、

何時までも固まったまま動けないオレに、葵が少し呆れたような顔をして突付いてきた

「お前さあ……なあに呆けてんだよお、も、もしかして……俺が東公園って言ったのが相当シヨックだったのか？！」

うわー、俺親友の心に消えない傷跡残しちゃったよ！！ヤベエヤベエ！！

本気なのかワザとなのか分からないが騒々しく騒ぎ出す葵に、漏れたのは苦笑

「お前なあ……そもそも、オレ等親友だったんさねえ……」

「つちよー！突っ込むとこ其処にされちゃ俺滅茶苦茶悲しいんだけどー！ちきしょう、泣くぞこの野郎ー！」

「おー、泣け泣け、泣き叫べ……何なら地面に這いつくばるがいいさ」

「え、Sな鴻苑久々に降臨ー！ヤッベエ俺なんだかゾクゾクすんぜっ……ー！」

ドMかこの野郎

取り合えず背中に一蹴りし（その後はセイレンが何時も通りに相手してやっていた）普段通りが戻った教室を見て、

（……有難う、さね……）

唯一事情を、オレの素性を知っている葵の行動に心の中で感謝した何故なら……

「ほう、葵様はドMになられたのですか、なら私はもう手加減なしにしていると言う事ですね？」

「い、いや、ドMになった訳じゃ……って、痛っ！！せ、セイレン、マジ痛えってー！」

「ええ、葵様なら……痛いと言ってくれと信じてました」

「な、何だこのなんとも言えないこの感覚っ……バイオレンス的な行動の後に信じてた発言はギャップ魂が刺激されて萌えるぜー！」

「……なら燃え死んでください」

「どわっちー！ちよ、マジセイレン、マッチ近づけないでえっ！！」

（………はは、今日も平和だ……）

触らぬ神に祟りなしだ

気にしない方が長生きできる……そう思い、苦笑しているだけに留めていると

ぎゅっ……

微かに楓に服の裾を握られた

だけど、まだ今のオレは何も答えることが出来ない……

だからその手を取って握ってやる事も出来ず……ただ黙って、段々と参加者が多くなっていく目の前のドンチャン騒ぎを眺めた

ふと、何時からアイツはあんな風に馬鹿をやり始めたのだろうと……喧騒の中心で弾けるように笑うアイツを見て、そう思った

喧騒＋距離Ⅱ傍観者（後書き）

先生：藍Ⅱイディーア

呼び名：藍、先生、イディーア

参考：葵達が無人島でサバイバルしてる時に椅子と一心同体になるべく鎖でグルグル巻きになっていた、結構必死に自分の名前は藍と名乗った青年。異国を旅した事があるらしく、様々なジャンルの知識が豊富。髪の色や仕草や言葉等が葵そっくりな変なところで馬鹿な、新任となった先生で、今はフェルディーン宅に居候中

ヒロイン：ルナリス

呼び名：ルナ、ルナリス

参考：サバイバルの帰りの船で、触手〓鳥へと変形したその物体の正体……見た目はロリ系な少女だが、葵と同じ年。詳しいことは分かっておらず、普段はジャンス先生宅でお留守番

王子様：アスベルⅡロワードⅡウインダス

呼び名：アスベル、王子様、鴻苑兄貴

参考：葵達が住む島国『ウイダス』の王様の息子。第一王子で、将来は王になる為に幼少の頃から病弱にも関わらず努力し続けてきた人。なのに何故か今は腹違いの弟である鴻苑に王の座を譲ると言っていて聞かない、鴻苑から言わせれば理解不能な人物、葵と知り合い

ヒロイン：比奈乃 涼ひなの しょう

呼び名：涼、比奈

参考：眼鏡を掛けていて口調御嬢様、雰囲気清楚だが豊乳で着ている服は何時も少しはだけてるといった訳の分からないギャップを持った、楓の双子の姉。少し、いや大幅に常識からずれる時がある

公式?：馬鹿は空気感染していく

葵様が馬鹿になってしまった

……ワザワザ再確認する必要があったかどうかは別として、だ
兎に角、葵様が激しく馬鹿になってしまった

何故かと言つと、

「よし、おまえらアレだ!! 今日祭りしようぜ!!」

「……葵、仮に今から準備するとして、間に合うと思っているのか
?」

「そ、それで御座るよ……た、例え、万が一間に合ってもシヨボイ
祭りにしなければならないで御座る」

「ああ? んー……じゃ、明日! 明日の夕方辺りからさ、祭りしよう
祭り!!」

先ほどからずっとあの調子だ

触発されるような何かがあった訳でも無いのに祭り祭り……

「……祭り馬鹿にまでなってしまうて、馬鹿の頂点でも極めるつも
りですか」

「お、祭り馬鹿って何かいいな!! いや、これぞ男!! って感じた
ぜ!!」

(ああ、馬鹿に馬鹿と言つても聞かないのと同じ原理でしたか……)
(悲しいことに) 慣れてきたとはいえ、いきなりの提案に少し啞然
としている皆様にも関わらず、一人で鼻歌を歌いながら、

「よし、ちつこい国だし、皆巻き込んで祭りしちまおう!!」

とんでも無い事を笑って告げた

一瞬停止し、下校途中の為鞆しかなかったので、

「寝言は寝てから言ってください」

「おぶつ?!」

一回転しながら、遠心力を利用し後頭部へ鞆を直撃させた

(……ふむ、今日も絶好調ですね)

地面に無様に転がった葵様の背に足を置き、せめて話だけは聞く体勢を取る

「……それで?何故、祭りをしたいのですか?」

「せ、セイレン痛えっ……ってか、この体勢ってアレだな!!上を見上げたらセイレンのスカートの中身、が、あぐうッ!!」

破廉恥な事を口走りながら上を見上げようとしたので、体重を掛けて背を踏むと少し大人しくなる

取り合えず勢いで後三発程踏むと、皆様からのストップを受けたので最初の体勢でちゃんと喋るよう促すと、

「いててっ……えーと、それはなあ……何てかさ、最近この国微妙じゃん?だからさ、景気付けにパーッとしてえなあって!!」

「……うわ、オレ馬鹿の口から割りと真面目な言葉出てきてビックリさ……」

「う、うん……ね、熱でもあるんですかねえ……?」

恐る恐る……と言った感じで発言する皆に葵様が抗議しようと動くので、取り合えず踏み潰しておく

（地面に這いつくばるのがいやに似合う人ですね……）
ふと、そんな事を思ったがまだ起き上がろうともがいてきたので再度踏み、大人しくさせる

「確かに、年中冬のような所が多々ありますからね……」
「……こ、こちら辺は割と活気があるんだけど、ね……」
「王宮が、見える位置にありますものね」

王宮、と聞いて微かに鴻苑様の顔色が曇る
何か嫌な思い出でもあったのだろうか……
少しそう思うが、三度葵様が動くのもう踏むのも疲れたので退くと、

「橋の辺りでさあ、花火しようぜ！！水にこつ、二重に花火映って綺麗だと思うだよな！！」

ニコニコと笑って言う彼に暫し沈黙し、

「ああ、またマトモな意見を葵様が……明日辺り、雨でも降るのでしょうか……」

「いや、いつその事雪でも降るのでは……」

「いやいや、霰とか……」

「雹とか……」

しばらく彼だけを置いて皆で話し合っていると、

「あ、藍！！丁度いい所に来たなあ！！」
「ん？……え、何、お前等何やってんの？」

少し困惑気味な藍様がやって来た

何気に長い髪を束ねている紐のようなものが蝶々結びになっているのは……

「ご愁傷様です」

「え、皆して何？！てか、蝶々結び^{こっけ}見ただけで分かるってあの校長やっぱり何時もこんなことしてるのか……」

少し遠い目をし出した藍様に皆で合掌した後、

「なあ、藍藍！！あのさ、広域に声届ける術的な何かってねえのか？」

またもや不可解な事を言い出す葵様に首を傾げる

その間にも「あるなら早く早く！！」と急かす葵様に藍様は苦笑しながらアイコンを起動させた
そして、

『あーあー！！！皆聞こえるか、聞こえてるかあつ？！』

どういう原理かは知らないが、葵様の声が国中に響き渡る

「ど、どういった技で御座るかこれは？！」

「わ、分からん……だが、一つ心配なのは」

「国中に聞こえてる中でドレウィーが何を言い出すか……ってことよね？！ふふ、ドキドキするのは素敵ね……」

途中から逸れたアイシス様を皆でスルーし、ふと……

「こういうのはフェルディーン様がやった方が宜しいのでは？」

そんな事を思った

『おまえら聞いてるか？聞いてるよな、うん、今日はさ、お知らせ
ーって奴があるんだよなあ！！』

自宅に帰っているにも関わらず、すぐ其処に居るかのような音量で
聞こえる葵の声に動きが止まった

アイツはアイコンやら術やら全然習得していない

オマケに、こんな技を持つている生徒もない……なら、

（藍……何考えて……ってか、オレにこんな能力あるって報告して
ないじゃないか！！）

後で絞めるっ……悪態をつきつつ、大人しく葵の声を聞いているル
ナと一緒に耳を澄ませる

『あのさあのさ！！明日の夕方辺りからさ、比奈乃神社で祭りすっ
から！！』

「ちょ、そんな事聞いてないですよー！！」

「た、確かに……葵さん、そういうのはその、事前に言っただけ
つたですわ、心の準備とか有りますし……」

（って、何故に涼は其処で顔を赤くしてるんですかあ？！）

自分も相当ズレているとは知っているがそれ以上にズレている姉に
心の中で叫び、急いで此れを聞いているであろうお父様に連絡する
と、

「ああ、一週間ほど前から葵くんから聞いておるよ、準備万全だわ

い」

と、返ってきた

（……目の前で楽しげに喋っている葵クンをこんなにも！！弓で撃ちたい衝動に駆られたのは久しぶりですねえ……）

思わず弓を構えかけると、やんわりと苦笑している鴻苑クンに止められた

彼は、私がこの笑みに弱いのを知っているのか知らないのか……私も苦笑を返し、弓を仕舞った

『んでさー、屋台とか色々並べてさ、後花火！！暗くなってから花火しようぜ！！ほら、神社の近くって川流れてんじゃん？綺麗だと思っただよなあ！！』

また皆の度肝を抜くようなサプライズを容易してた葵クンが嬉しげに誘う姿に、私も何だかワクワクしてきた

（花火なんて……とっても、久しぶりだもんね）

前に花火が夜空を彩ったのは何時だったろうか

思い出せない程に幼い頃だったような気が……セイレンやエリスちゃん、ウルルー君が居なかった頃、皆で見たのが最後だったと記憶している

（ま、また……皆で見れるかな）

あの頃と違って増えた友人達と、皆で一緒に……

『つーわけで明日！！明日祭りな！！来いよおまえら？！てか、なんだあ？来てください？』

（おいおい、慣れない敬語なんて使うなよ）
クスクスと笑うと、ルナが首を傾げてくる

「ああ、葵が慣れないお願いなんてしてっから、可笑しくってな？」
膝に乗せて笑うと、ルナも分かったのか……大きな黒い瞳を細めて笑った

『だー！！もうめんどいなあおい！！あれだ、おまえらよく聞けよ！！！！』

大きく、息を吸うような音が聞こえ、

『俺が明日の夜、デッケエ夢見させてやる！！おまえ等ぜってえ馬鹿だなあコイツって思うだろうぜ！！だから……』

声だけでも関わらず、得意げな顔で笑う葵の姿が見えたような気がした

相変わらず馬鹿なまま全然変わってないなあ、と……皮肉とも賞賛とも取れる笑みが自然と浮かび、

（ああ、アイツなら続きは絶対こう言うな）

——我こそは真の馬鹿だと思っ馬鹿は来やがれっ……！！——

呟いた言葉と聞こえた言葉が全く一緒で……

オレも相変わらず馬鹿だなあ、と目を閉じそして思うのは、

「ったく……オレが心配するよりもずっとアイツは強くて、」

一息、そしてニイツと

「馬鹿だったんだなあ!!」

声を上げて、笑った

* * *

「あー、すつきりしたあ!!サンキユ、藍!!」と、礼を言う大馬鹿……もとい、葵はオレ達を見て笑う

(ああ……ほんとにコイツは、)

「馬鹿だなあ……」

見事に皆でハモリ、それに抗議する馬鹿を笑いながらあしらった

ああ、オレ達は何だかんだでこの馬鹿に救われているのかもしれない
戦闘能力、知能もほぼ皆無……だけど、

今まで見てきた誰よりも馬鹿で放っておけない……どうしようも無い、友人

(っはは……コイツの馬鹿は伝染するんさねえ)
だって、ほら

「おいおいおいおい！！皆、俺見て笑い過ぎだぜこの野郎っ！！」

皆が皆、笑ってる

コイツと、皆と……誰かと居ることがこんなにも楽しくて仕方がない
そう思えるのはきっと、時代遅れの理想を追い求め続ける無能な馬
鹿のせいだから

追いかけてこのような無駄でしかない……だけど、楽しい時間を少
し過ごして

ふと、

「そついや葵……とうさ……王に許可は取ったんさ？」

行事を行う時は必ず居る王の証明書……

それを持っているか疑問に思い確認すると葵はニッコリと、

「あ？んなもん……取ってねえよ？」

満面の笑みで親指を立てみせ……笑った
直後、

「っ馬鹿かお前はあああつつ！！！！！！」

皆の蹴りが、綺麗に決まった

問?：伸ばされた手を取る方法、そしてこの世界の病気とは。

「おおー!!! デツケエなあ!!!」

長い階段や廊下を歩くたびに葵様が大きな声を出し、キョロキョロと辺りを見渡す

(田舎者丸出しで、ありますね……)

ぼんやりとそんな事を思ったが、頭を占めるのは別の事

(……皆様は、知っておられたのですね……)

鴻苑様が王の子だという事を

八割方、鴻苑様がこの国の未来の王となる事を……

藍様はこの間来たばかりなので仕方ないが、まるで自分だけ除け者のようだと感じた

独りぼっちになったかのようなその感覚に苛まれ……何時の間にか歩みが遅くなっていたのか、

「セイレン?」

随分先に行っていた葵様が、一人で私の隣まで引き返して来た

「……葵様」

「うん?」

どうしてだろうか?

こんなこと思うなんて自分らしく無い……ましてや、思いを声に出すなど……

「私は……皆様にとって、信用出来ない……者でしょうか……」

何故か、声が震えた
そして何故か……

「ばーっか」

「……あおい、様……？」

優しく頭を撫でる彼の手が、温かいと感じた
何時もと違い、真剣でいて……そして優しい笑みを浮かべ葵様は、

「おまえは俺等の仲間だよ、セイレン」

力強く、言い切った
そのまま私の手を取り、指を絡め……苦笑する

「ほら、見てみるよセイレン？俺が不安がってるおまえに何かしねえか、皆心配してるぜ？」

顔を上げて見えたのは優しく微笑む皆の姿
そして、

「馬鹿を放っておくと貴殿が危ないからな、セイレン……」

「そうよ、ドレウィーは狼紳士なんだから警戒しなさいっ！」

「そ、そういう訳じゃないと思うけど……セイレン、皆、友達だよ？」

「そうですよお、セイレンは友達ですう！！だから、セイレンが危ない時はブスッと葵クンをやつつけちゃいますから！」

「ええ、楓の弓は凄いですのよ？」

「……二人とも、なあんか話ずれて来てるさよ？」

「確かに……相変わらずと言えば相変わらずで御座るが」

皆が、手を差し伸べてくれる

「……差し伸べてくれる手を握る方法は分かるだろう、セイレン？」

慈愛に満ちたような藍様の声に一つ頷き、

私は一歩踏み出す

「こちらの手を、伸ばせば……届きます」

この手を取ってくれたのは誰が一番初めだったのだろう

それすらも分らないくらいに皆が……受け止めてくれた

「ほらな、俺の言った通りじゃん」

おまえは俺等の仲間だよ、セイレン

だから何も遠慮しなくていい

仲間って、そういうもんだろ？

そう笑う彼に頷いて、微笑みを浮かべる『仲間』に囲まれて……
一つ気付いた

（そう、だったのですね……この世界は、今……）

私のように病気なのだ

踏み出す事を恐れ、かといって置いて行かれることを何よりも恐れる

だから、

（だから無理に進んで、無理に立ち止まって）
笑えない、何が本当なのか分からない

自分は一体何処に居る？

そんな闇の……何も無い、虚無に飲み込まれ戻れなくなる
何も、全て無くなってしまふ
そんな悲しく寂しい……病気

「……葵様……」
「うん？」

彼の左手を握り、小さく

「教えて下さい、様々な事を……貴方のことも、貴方が見せようとする……」

大きな大きなユメの事も……

ゆっくり、彼が頷き……
その顔にあるのは、

「もちろんだぜ、セイレン」

強くて優しく……守りたいと思える、大好きな笑顔

公式？：馬鹿が誘うは人の笑み

島の中央に位置する王宮……

其処の最上階にあるのは王の謁見の間

そして、今オレ達の目の前には其処に繋がる大きな扉がある

（……此処まで来て、手が震えるとか……オレはどれだけ臆病なさねえ……）

別に父が怖い訳でも何でもない

それなのに、いざ対面……と、なると中々踏ん切りが付かない

逃げたい、そう思う心に溜息を吐いた

その時、

「なんだあ鴻苑？武者震いか？」

からかうような葵の声が聞こえて、

（ああ、コイツは何時もどうして……）

「大丈夫だ鴻苑、俺等の無敵計画はワクワクするまでもなく……結果なんざ、目に見えてんだ！」

どうして何時も、こんなにも馬鹿なんだ

目をキラキラと輝かせる葵に、苦笑を一つ返して

「そうだな、無敵さね……」

黒い大きな扉を開けた

そして王の、父の目の前に跪き

「お久しぶりで御座います王……突然の参上をお許し下さり、真に有り難く存じます」

10年来の言葉を掛けた

小さく、面を上げよ鴻苑……そう聞こえて、ふと……

（あれ、アイツ等は……）

振り返ると、何故か扉の向こうで隠れるように此方を見ていた

（なっ……お、オレに全部任すつもりか?!）

目が合うと、全員に親指を立てられた

後で見てるよ……そう念じながら立ち上がると何時の間にか目の前に居て、

ガシリツと……肩を掴まれ、

「鴻苑!!大きくなったのだな、うむ、母さんによく似て……立派になりおったなあ!!」

先ほどまでの威厳は何処へやら、ニコニコと笑いバシバシと背中を叩いてくる

（っ、10年経ったのに何も変わってないさ……）

一人だけ時を止めていたのではないか、そう思える程に変わらない父に苦笑いしか……出てこなかった

* * *

「……なるほど、この国の王は親馬鹿に御座いましたか」

「ちょ、しーっ……!」

隣で凄まじい事を言い出すセイレン殿に注意を促すと、大人しく黙ってくれた

しかし最近思うのだが、セイレン殿のこの空気やその他諸々を全く無視した発言などは、

（……葵殿と一緒に居るせいで御座ろうか……）

そう思わずには居られない

感情が面に出てきたのは大いに良い事だが、悪い方にも影響が出てきている気がしてならない

これは要するに、

「突っ込みが大変で御座るなあ……」

「……？」

首を傾げる者5人……他は、

言わずとも分かるだろうが苦笑しかしていない

そして視線の先……

にこやかに会話をしている王に少し困っているような鴻苑殿が、とうとう本題を切り出した

「……王、オレのお願いを聞いて下さいますか？」

「むむ、鴻苑からのお願いか……わははは！10年ぶりじゃのお！

」

軽く流されかけ、思い出話が勃発しそうである

（が、頑張るで御座るよ鴻苑殿！！）

思わずこっちが拳を握っていると、

「んでな、セイレン……この国は、王様だけ何人でも側室ルール有りなんだよ羨ましい事に」

「なるほど、それでアスベル様と鴻苑様は姓が途轍もなく違い過ぎるというのに、腹違いの兄弟ということなのでしょうね」

「あれえ、セイレン俺の後半の台詞無視？」

「複数の相手が居なければ意味の無いことだと判断しましたので……それより、どうして鴻苑様は王に躊躇いのようなものを持っているのでしょうか？」

「んー、そりゃあ親馬鹿過ぎて困ってんだ」

「ああなるほど、過保護過ぎる親というのは厄介だと聞きます、逆もまた然りだそうですが」

「お？セイレンよく知ってんなあ……あれだなあ、セイレンいい母さんになれるなー！」

「……読んだことのある本では葵様、それはプロポーズに繋がるであろうシチュエーションを作れる言葉だそうですね？」

「え、俺そのつもりだけど？」

「……今は、聞かなかったことにしておきます」

「えええ？！ちょ、セイレン待ってって『今は』聞かないって何時かまた言ったら聞いてくれんの？！」

また（主に馬鹿約一名が）騒ぎ出した

（な、なんで今このタイミングで色々教えてるで御座るか葵殿？

！しかも後半ずれ過ぎてノロケみたく聞こえるで御座るよ！！）

背後の会話に気取られていたのは自分だけではないらしく、

兄者と楓殿、藍殿を除く皆が集中していた

（分かり易過ぎるで御座るなあ……）

あまり人の事は言えないが、そんなことを思ったと、

「……鴻苑、お主王宮に戻らんか？」

急に、王のそんな声が聞こえた

慌てて視線を戻すと真剣な王の顔と

「何度も、言った筈です……オレは、東 鴻苑です……ロバート家とは、関係ありません……」

苦しそうな鴻苑殿の顔が見えた

（ああ、少し不味いで御座る……）

王は鴻苑殿の返事を予測していた筈……なのにこのタイミングで切り出した、それはつまり、

「そうか、残念じゃのう……お主が王宮に戻れば、否定された提案も通る可能性が出ように、のう？」

此方の提案を自分の要求を叶える交渉のカードにするつもりだ

王が一旦提案を却下すれば、もう二度とその提案が通ることは無いのを利用して……

つまりは早い話が

脅し……

意図が分かったのか微かに表情を曇らせ俯く鴻苑殿に、王は口を開き言葉を発した

その言葉は、

「おいおいオッサン、鴻苑脅して苛めてんじゃねえよ、ばーっか」

あまりにもこの場に、王に向かうには不釣り合い過ぎる声に掻き消された

そして声を発した彼は、堂々と王の前まで歩いていく

そのまま王を睨み、

「ばーっか！っか！！」

もう一度叫ぶように言い、不敵に笑った

「葵……お、お前っ」

「つば、馬鹿かお前!!」

「あでっ?!」

たつぷりと5秒は過ぎたであろう後に、

一番早く硬直の解けた鴻苑殿と兄者が規格外の馬鹿をしでかした葵殿を殴った

その音に我を取り戻した拙者達も慌てて出て行くと、

「ほう?ワシを馬鹿扱いとは……いい度胸じゃのお、小僧」

扉に隠れていたの知らないフリをしていてやったのに、と言いたげな表情をした後、笑う

正直に言おう、不味い

（や、や、ヤバイで御座るよちよつとちよつとお?!）
何してくれんだ馬鹿この阿呆!!と、皆で詰め寄ると不機嫌そうな顔で葵殿は、

「ああ?友達苛められて黙ってられる訳ねえだろ?てか、小僧じゃねえよ親馬鹿ヤロー!!」

思いつきり、王に指を差し言い放った

「ぎゃああああっ?!」

「ちよ、お前一回黙れ!!」

「あ、あわわわっ……こ、これ反逆罪とかありませんかねえ?!」
「ど、どうなのかしら……もしなったら、死刑……うーん、困りますわ……」

「死刑、しけい、詩形!? ふふ、意味分らないけど何だかロマンティックね、素敵ッ!!」

「うーん、まあ、確かに……死刑なんて宣告されるのって久しぶりだしなあ……」

若干三名、全然困ってないような……
つて、今ちよい発言可笑しな人が居た様な?!

「ちょ、あ、藍殿?! し、死刑宣告されたことあるで御座るか?!」
「うん? ああ……昔何回かねえ……はは、とっても懐かしいなあ」

は、鼻歌オプシヨン付きそんな勢いで御座るよこの人!!
拙者が思わず突っ込みの言葉さえ出なくなっている中、

「え、えと……結構皆、困ってないように見えるのは……な、何でかな……」

常識人の呟きで何とか皆暴走状態から我に返る
そんな拙者達をじっ……と見ていた王は、兄者に胸倉を掴まれたままの葵殿に目を向け、

「親馬鹿はまあ……認めるが、お主の方が馬鹿じゃとて」

(もったもなことを言っておられるで御座るよ!!)

心の中で叫び、ふと、

案外王って寛容な方で御座るな……そう思い、

何故そんな王がそうまでして鴻苑殿の王宮入りにこだわるのか……

それが気になった

「ああ？あー……まあ、それはいいや……それよりも、おまえ鴻苑困ってんの分かって言ってるだろ！ー」

「そうじゃな……じゃが、本人の為を思っ言っておるのじゃ、今この国は他国から脅されておる」

「……脅し？」

若干ハラハラしながら見ていると、王が気になる事を言つた

まだ喋ろうとする葵殿を皆で抑え聞き返すと、王は静かに頷き……話し始めた

「この国は……お主等も知っておると思うが『風の翼』と呼ばれる種族と親交があり、ワシ等と同じ、命ある者として多くがこの国に住んでおつた」

「『風の翼』……って、今は何か『生きる兵器』として戦争とかで暴れてるって種族ですよな？」

「え、えと……もう、大きな国とかが……その、『五年前の事件』で……」

「うむ、他の国の言葉を借りれば、『狩りつくされた』と言つた所じゃろう」

『生きる兵器』、『五年前の事件』……そして、『狩りつくされた』その言葉に、微かに葵殿の顔色が変わる
心なしか、震えているようにも見えて……

（……葵、殿……？）

フェル殿が『風の翼』と間違われ片目を失つた事件を思い出して怒っているのだろうか？

それとも……何故か、彼自身が何故か左腕を失い瀕死の状態で倒れていた時の事を思い出して？

そういえば、だ

その二つが起こったのはちょうど五年前だった

（偶然……で、御座るのか……？）

考えながら、話を続けている王の声にもう一度耳を傾ける

「各地で戦争はまだ起きとらん……じゃが、近い内に起こる筈……ならば、『生きる兵器』は今の内に集めておけば有利と考える国が多くなるのは当然じゃろう、壊れれば使えんのじゃから」

其処まで言い、俯いて黙っている鴻苑殿を、ただ黙って王を見つめる葵殿を見て問いかけるように、言う

「そして、この国は島国故に何処にも属さぬ中立国、オマケに『風の翼』が大勢住んでおった国じゃ……分かるじゃろう？」

王の言う通りだ……その先は言われなくても分かる
そして考えている事が起こった時、脅威はこの国を統括している王族並びに、

「これは鴻苑だけでは無く、お主等を守る処置でもあるのじゃ」

拙者達、王族と友好のある一般人にまで及ぶ
だから身を引け……そう言ったことだろう

王の言うことは正しい、だから、誰も何も喋らない
その時、

「あのさあ……」

「なんじゃ？」

ただ静かに、葵殿が口を開いた

「だから何で、最初から負けーみてえな、もう打つ手なし的な感じになんの？」

王から返ってきた答えは、沈黙だった

▲ ▼ ▲ ▼

「だからさあ、やる前に結果見えてます、だからもうダメです、的な理由で俺から友達引き離さねえでくれる？」

「お、おぬし……言ってる意味が分かっておるのか？」

王が、私達の前で初めてうるたえた

それはそうだろう、何故なら葵様が言っていることは

「たった一人の友の為に其処に居る全員、強いては学校全体、その全ての家族の命さえも危険に晒すと言うのか?!」

一つの、自分の命を差し出す事など容易く思える程の横暴過ぎる要求
気付いて居るのか居ないのか、

「あー、取り合えず叫ぶなよ、血圧上がるぜ?」

真面目な顔を崩し、何時ものようにヘラヘラと笑う

(……短い真面目モードでしたね)

また何か怒鳴る王に、軽く返す葵様……正直収拾がつかなくなりそうなので、

（取り合えず叩けばまたスイッチ入るでしょうか？）

そう一抹の疑問を胸に、蹴り飛ばした

あうぐつ！？と、いい声で地面に伏してくれたので少しスッキリしたふと、視線を感じ顔を上げると親指を立ててニコニコしている藍様と目が合ったので私も親指を……

「ちょ、いい仕事した的な顔で親指立ててる場合じゃないだろう？！」

「え、ええええと、だ、大丈夫、葵クンツ……！！！」

「ふ……ふふふ、いい声ねドレウィー！！やられ役にピッタリよ！！！」

「き、綺麗なフォームでしたわ……」

「りよ、涼……喰いつく所そこなんですねぇ……」

「ななな、何だか今日一日色んな事があり過ぎてついていけないで御座る……」

「あ、ああ……オレもそう思うさ……」

すっかり雰囲気吞まれていた皆様が少しだが、ペースを取り戻すこれで例え、葵様がふざけモードでも何とかなるだろう……そう思い、彼を助け起こすと、

「この国、てか世界はさ、今病気なんだよ」

言い放つように告げ、真剣な顔をする

どうやら真面目スイッチが上手く入ったようだ

「病気……？」

「ああ、病気、臆病な病気だ……初めからダメだ、これしか無いん

だ、失敗だ無理だ後悔しか残らねえって……失っただけだって決め付けてる馬鹿じゃなく、臆病愚か者病にかかってる」

「最善を見極めて、何が悪い……？」

「あー……俺らな、授業で習ったんだよなあ！」

王は急にニコニコ笑う葵様に理解が出来ない、と言いたげな顔をする（……でした、ね……『最善』……その意味を教えてくれたのは、）私達の視線を受け止めた新任教師は、ニコリ笑い頷く
そして葵様は、

「最初から行き着く場所決め付けるから、『最善』も『不可能』なんてものも存在すんだよ……だから諦めるしかねえ……あのさあ、」

あの時の藍様のように、

圧倒的な自信という名の自信を持つて

「デッケエ夢、イメージしてみ？んで馬鹿みてえなくらい信じてみるよ、そしたら……失敗なんて後悔なんて、不可能なんてもん存在しねえよ、だって」

不敵な笑みと共に、

彼だけが言えるセリフを口にする

「何かあっても、信じ続ける前には終わりなんて、んなマイナスなもんなんて存在しねえんだしさあ……！」

そして最後に……

と前置きを置いて大きく息を吸い、

「俺は最初っから何も信じれねえような奴と友達苛める奴なんてダ

イツクライだ!!」

噛み付くように、言い切った

どうだこの野郎!!と、踏ん反り返るかのようなその態度と言葉に
王は……

「っ……せ、世界最大級の馬鹿じゃの、お主っ……く、くくくっ……
…ははっ、わはははっ!!!!」

大声を上げて、笑い始めた

その声に釣られたのか葵様も笑い始め、謁見の間に忍び笑いのよう
な声が溢れ出しやがて……

何処でどうなったのか分からないが、王宮中に笑い声が響いた
そして、

「いいじやろう、お主の提案、受けようぞ!」

快く引き受けてくれた王に礼を言い残し、王宮を後にした

その帰り道

皆色々あったが、

そもそも何故、ただ花火の許可を貰いに行っただけなのにこんな事
になったのだろうか……そう苦笑し合いながら皆自分の家へと帰っ
ていった

そして、「やだ、もうこんな時間?!見たい映像録画してないわよ
?!いやんっ!!」などと言いながらアイシス様が先に帰り……葵
様と二人きりになった

しばらく世間話のようなものを、葵様が話しかけてきていたが、

「あのさ、セイレン」

真面目な声で話しかけてきた

「……なんでしょう?」

「ん、なんてかさ……明日な? 明日、俺……」

少し照れたように視線を迷わせた後、
大きく息を吸い

「俺、デッケエ夢語ろうと思うんだ」

真っ直ぐ、私を見つめて言った
だから私は、

「葵様が願うなら、きっと……途轍もなく馬鹿で、どうしようもな
くて……」

「ちょ、セイレン!! キツ過ぎだぜその台詞!! なんか、斜め45
度じゃなくて90度くらいから掘り下げてきてる感じだぜ!!」

「葵様はこういうのが好きでしょう」

「いや、キライじゃねえけど……って、け、決定事項かよ?!」

それ以上に、素晴らしい夢でしょうね……と、それを抜かして告げ

……

苦笑しながら騒ぐ彼と歩き、何時ものように家路に着いた

「明日が、少しだけ……楽しみかもしれません」

小さく呟いた言葉は彼に届ける気はないから、
自分の胸にだけ仕舞って……静かに、眠りについた

祭り＋不穏な空気Ⅱ開始の合図

空が薄っすらと暗くなってきた頃

比奈乃神社周辺に並んでいる屋台が賑わい始める
皆口々に言うのは、

「ああ、あの馬鹿本当にやる馬鹿だったんだなあ」

そんなこと

だが皆楽しげに、嬉しげに、久方の祭りに笑っていた

「祭りが行われるのは何時以来だろう」

「王妃が亡くなってからずっと……この国の王は元気が無かったからな」

「ああ、今日はなんていい日だろう」

「そういえば、葵の馬鹿が今日何か大それたこと言うらしいな」

「そうだな、きっとまた馬鹿なことだろうけど……」

——楽しみだなあ……——

声を合わせてそう言って、

彼を知る皆は声を上げて笑い出した

「……すっかり期待の星って感じだなあ、葵」

屋台から少し離れた橋の上で、俺達は女性陣を待ちながら笑いながら話している屋台の皆を見ていた

そして、橋にもたれかかっている俺に笑いかけながら藍がそんな事を言うから、

「あー、何かドキドキしてきたぜ……」

余計に緊張してきた

らしくは無いが、俺は今マジ本気、マジにマジの大マジでビビッてる（まあ……あれだなあ、大勢の前でなんて話すことあんましねえし）そもそも俺馬鹿だし？

大見得切った後で怯えるのもある意味馬鹿らしいのかもしれないそんな事を思っ居ると隣に居た鴻苑と帷が、

「おいおい、どっちかというとかクガクなんさろ？」

「……ブルブル、にも見えるがな」

なんて笑えないことを言ってきた

だから、「うるせえ公園にトバッチリ!!」と返すと背中をしばかれた

セイレンよりは緩い力だが、痛かった

「ははは、あんまし苛めてやるなよ?……大勢の前って、始めは割と緊張するんだし」

見ていた藍が、クスクスと笑ってそんな事を言う

ふと、藍もそんな時期があったのか……と思い、気になったことを聞いてみた

「そっぴや藍ってさあ、若いのに割と色々経験してんよなあ……てか、ぶっちゃけ藍幾つ?」

「え、あ?……あー……俺は……22くらい?」

「つて、オレ等に聞くんじゃないさ……」

「あれかあ？年数えるの飽きたくらいの年とかか……？」

「あー……割とそうかもなあー」

ニコニコとそう言う藍に、一言断ってから男三人で円陣を組むむさい絵に見えなくは……ないはずだ、だって俺等って割と細身だし？

「オレ思っただけださ……実は藍って相当年いつてんじゃないさねえ？」

「確かに、各国を渡ったと言っていてその知識も本物……しかも、能力も豊富過ぎるしな……」

「んーと、取り合えずあれだな、10歳以上来ねえと国から外出れねえからなあ……それからだとして、一国分の力と知識吸収すんには……」

「少なく見積もっても10年くらいは要と思うさ……」

「……ちょ、ちょっと待て、世界にはなんだ……この国入れて、大まかに分けると4つの国に属しているはず……」

「……え、50以上?!」

三人で振り返る

藍はどうやら今日の花火のデザインでも考えているのか、アイコンを呼び出しパチパチとやっていた
故に俺達は円陣に戻る

「ちょ、50に見えなくねえ？」

「……もし50代なら、究極の若作りということになるさねえ」

「世の女性が羨むだろうな……」

「確かに……てか、そうだったらあれか？藍は俺等のお爺ちゃん的な感じになの？」

「何処をどう間違ったか知らんが、若過ぎるだろ」

「てか、逆にあんな爺様居たら居たで怖いさ」

ふと、感嘆するような声が聞こえ三人で顔を上げると藍がまだ真剣にパチパチやっついていて、

それに気付いたらしい人達が藍周辺に集まり手を叩いていた
ちなみに藍は集まっている人に気付いておらず、無心状態である

「って、おいおい藍!!」

「……右の炎はもう少し赤く、逆に左はもう少し薄い青使えば……」

どうやら声は聞こえていないらしく、次々と小さく火の花を咲かせていく

正直凄い、本当に凄いのだが……

「藍!!おいこら!!」

「……後高度2、3、密度は1.25上げて……」

「あーおーっ!!……!!」

「色素はやはりもう少しこう……ならもう少しアイコンで光を展開してバックアップして」

（ああ、こりゃあダメだ）

半分、いや、完全にあっち側に行っている

ブツブツブツ……と、喋り続けながら模索している姿に何だかあれなので……

「そっとしておこう」という結論に落ち着き、三人で溜息を吐いている、と

「あ……みなさんも、お祭り見にきていたのですね」

「あ、皆、今晚は」

ふいに、声が掛けられた

振り返ると見えたのは、浴衣を着て車椅子に座っている小さな女の子と、それを押す何ら特徴の無い青年

「エリスちゃん！……と、モブ男」

「ひ、酷いよ相変わらず！！」

涙目で抗議してくるモブ男……もといウルル―を無視し、エリスちゃんに駆け寄るとニコニコ笑みを返してくれた

（あー……マジで癒されるぜ……）

最近、何だか癒しが足りない気がして……

いや、フェルちゃんという癒しはあるのだが、それを掻き消す程の最近の女性陣の行動が……其処まで考えて背筋がゾクゾクして振り返ると、

「ほう？ 葵様は幼女を誑かすようなお人でしたか」

思ったとおり、浴衣を着ている……少し不機嫌そうなセイレンが居た（って、俺全然誑かしてねえ……って、あれえ？）

何時もは不機嫌そうな顔をしないセイレンが、微かにだが不機嫌そうだ

それってもしや……

「セイレン、もしかして嫉妬した？」

一瞬の沈黙の後、

こめかみ辺りに凄まじい衝撃を感じリアルに吹っ飛んだ
ふと思ったのは……

（あ、セイレン否定はしなかったなあ）

そんな事で、ほんの少し幸せな気分になった……所で、地面に叩きつけられ息が詰まる

最近これも慣れてきたが、痛いもんは痛い
むせながらも何とか立ち上がろうとするが、四つんばいになった所で踏まれ撃沈

「いだっ?！」

「あ、すみません、今日は下駄を履いていました」

(謝るとこ其処かよ?!)

取り合えず満足したのか退いてくれたので起き上がると、皆揃っていた

おまけにどうやら藍も意識が現実世界に戻ってきたらしく、あまりの人だかりに照れたように一礼し、拍手喝采を浴びる始末である

「ついてて、と……皆揃ったのか……んじゃ、花火………てか、俺のすばらしーっ!! 演説まで、屋台回るかあ!!」

俺の言葉に一樣に「素晴らしいかは別として、」と手厳しい事を言いながらも皆賛同してくれた

そして、

賑わってきた屋台で射的をしたり食べ物を買ったり……

途中、ルナとジャンス先生やライム校長と会って一悶着あったり……

……したのだが、

「……あれえ?……皆何処だよ?」

辺りを見渡すが、さっきまで一緒に歩いていた皆が居ない
何時の間にか俺一人になっていた

「まいったなあ……」

（いい年して俺迷子かよ……うつわ、俺だっせえ！！）
だー！！と、頭を思いっきり掻き……少し落ち着いたので、

「取り合えず……誰かに皆見てねえか聞かねえと」

そして、少し多過ぎやしないか……そう思う程の人ごみを見渡して
気付いた

この場所には何故か屋台が無い
それにも関わらず人が多い、しかも

「……え……お、おいちょっと待てよ……」

この国は小さい
とてつもなく小さく……故に、殆どの顔は見た事がある筈だ
なのに、

「見たことねえぞ……誰も……？」

面影一つ取っても該当する国の住民は居ない
訳が分からない、何が起こっている？
微かに、頭の隅で警鐘が鳴り……

「あ、ちょっといいかな君……」

知らない声と共に、左肩に誰かの手が触れた瞬間、

「つて、ちっ……おい待て!!」

俺は弾かれたように森の中に駆け込んだ

何処に逃げるべきかも分からないが、兎に角走った

すぐに息が上がり、苦しくなるが恐怖に背を押されるように足を動かした

ただただ、知らない何かが迫ってきているようで怖い

（な、何なんだよっ……誰だよアイツ等っ、何で知らない奴等が一杯でっ、追いかけてっ……）

分からない、ただそれが一番恐ろしかった

「はあっ……っ、はあ……」

撒いたのかどうだ分からないが、足音も声も聞こえなくなった
近くの木に手をつき、肩で息をしながらぼんやりと……

（ああ、もうすぐであれじゃん……？重大発表って奴……の時間だぜ……）

早く戻らないと、皆怒ってる絶対……きつと蹴られちまうなあ……
無理やりにでも何時もどおりを思い……大きく息を吸い、走り出そうとした

その時、

「みいーつけた」

耳元で笑みを含んだそんな言葉が聞こえ、

「あゝっ?!」

振り向いた直後、頭に激痛が走る

咄嗟に手で頭を抑え無理やり目を開けるが……次に来た背への衝撃で全てが一瞬にして吹っ飛ぶ

全てが止まったかのような錯覚を感じ、無抵抗な身体はそのまま沈んでいく

冷たい何かが顔に当たって、目の前に地面が見えて……

そこでやっと、自分は倒れたのだと気付いた

それと同時に呼吸を忘れていた肺が思い出したかのように機能を再開させ、無様に咽せ返り、

「お、まえ……は……っ」

小柄な身体、闇に浮かぶ翼のようなシルエット……それを認識した瞬間、

何かが振り上げられる……そして、ギラリッと刃のような物が月明かりに光り……

そこで俺の意識は途切れた

「邪魔なですよ、貴方は……ふふっ」

刃が振り下ろされ、闇夜に切り落とされた何かが高く舞い……

それは地面に落ちる前に、切り落とした彼女によって受け止められたそしてそれに小さく彼女は口付けを落とし、

「さて、これからが楽しい祭りの本番ですわよね？」

ただ黙って見ていた連れに合図を送り……

<始めまして御機嫌よう、弱小国の人間様達？>

楽しい祭りの開始を告げた

憎悪＋悲しき誇り＝無力は、罪

（……葵様は、何処に行ってしまったのでしょうか？）

少し目を離れた隙に、居なくなってしまった

ちゃんと待っているように言い聞かせたというのに……世話の焼ける人だ

そう思いながら……何故か、不安のようなものが心に広がり始めるふと、設置されている時計を見ると彼の素晴らしい（自称）演説の時間が近づいて来ていた

「……困りました」

そう、本当に困った……何故ならば、

「私は、この場所に詳しくないのですが……」

早い話が、迷子だ

（……こういう時くらい、カッコいい所を見せて欲しい所でしたが、）

あまり彼に期待するのも酷というものだろう

そう思い、取り合えずアイコンを起動させ皆に連絡を取る

<えええ、そっちも葵クンとはぐれたですかあ?!>

<オレ達もはぐれたんさよねえ……>

<同じく……しかし、アイツは一体何処へ行ったんだ？>

<もうすぐ演説の時間で御座るよね？>

<うん……でも、どうしてか葵クンと通信出来ないし……ど、どう

すればいいのかな>

<ヒーローは遅れてやって来るって言うけど……ドレウィー、何だかヒロインっぽいからねえ>

一瞬の沈黙

お姫様抱っこされたり、気絶率ナンバー1だったり、最弱だったり
と……

思い当たる事が多々あるので無理やり思考の向こうに追いやる
と、

<ええと、取り合えず……葵さんも、ちゃんと付いてるものは付いてるので大丈夫だと思いますわ>

またもや一瞬の沈黙

そして、

<え、ええええと、そ、そろそろ時間が近づいてるから、皆で会場の方へ行かないで御座るか?!>

<あ、ああそうだな、もしかしたら先に行ってるかもしれない>

<そ、そうさねえ、じゃ、じゃあそこで皆落ち合つさよ>

<え、えと、りよ、了解>

無言の中に含まれていた「この話題には触れるな、話を終わらせよう」といった見解が一致し、

慌しく皆話を終わらせていった

少し疑問そうな涼様が最後に切り、取り合えず……

(会場に、行っておきますか……)

国全土が見渡せる程高い……傍から見たら崖の上のような場所が、会場だ

其処ならこの位置からも見える

そう思い、その会場に向かっていくと、

（あれは……藍様……？）

流れる人並みに逆らうように、悠然とした足取りで会場とは反対方向に歩いていく

「藍様……？」

声を掛けると、ビクリッ……と肩が跳ねた

（……様子が可笑しい？）

そう思い近づくと、

「あ、セイレンか……びっくりしたよ」

やっと私を見つけたらしく安心したように微笑んだ

その様子に違和感を感じながらも気付かなかったフリをして会話を続ける

「藍様、演説が始まる時間が近づいてますが……もしかして、迷子でしたか？」

「ああ……実は、そうなんだよなあ……俺、早めに行けって言われてるんだけど……」

そして、会場とは反対方向を指差し、

「こっちであつた？」そんなことを言う

だから、少し強引に手を掴みぐいぐいと引っ張っていくことにした

「わ、ちょ、せ、セイレン俺こけるって！」

身長差が問題だというのは分かっているので、何となく少し……

背が低過ぎだと言われている気がする

「小さい方にあわせるのが大人ですよ」

私小さいのでまだ子供ですから

そう屁理屈を並べ、そのまま会場へと向かった

「あ！セイレン殿、藍殿、こっちで御座るよ！！」

国中の人間が集まっているだけに、凄まじい人だかりとなっている
会場で着いてすぐ、柚李様が私達を見つけ手招きする

（さすが忍者、気配には聡いですね……その反面、全然忍べてはな
いですが）

口に出したら彼女が泣くであろう事を思いながら行くと、やはり葵
様は居ない

「葵様は、居ないですね」

「う、うん……葵くん、時間にはちゃんとしてるから……」

「……心配、ね」

アイシス様までもが口数少なく、嫌な予感が心の中に広がる
どうしたものか……そう思い、ふと

（藍様なら、人探しの術を知っているのでは……？）

そう思い振り返る
が、

「居ない……？」

藍様までもが、姿を消していた
一体何が……そう思った直後、

<始めまして御機嫌よう、弱小国の人間様達？>

聞いたことのあるような声が、いきなり響いた
そして、

「っ?!」

「な、でっかい……」

「まさか、アイコン?!」

<ええ、正解よ>

まるでこちらの声が聞こえているかのように、響く声は笑い……

<ハロー、皆様……ご機嫌は如何か？>

巨大なアイコンに映像が映る
其処に映っていたのは、

「エリ、ス……?」

<ふふ、正解>

ニツコリと笑っているその女性は、クラスメイトのエリス様らしい
ただ見慣れている姿と違う……幼かった筈の彼女は、今や私達より
も年上に見える

呆然としている私達に、画面の向こうのエリス様は微笑み、

<改めまして自己紹介を……私は、エリス……ディラム帝国所属特殊部隊に属する兵士……エリス＝リアライ>

(ディラム……帝国……)

その国の名は、最近藍様の授業で頻繁に耳にしていた

『生きる兵器』のいち早い導入によって、資源や領地が乏しいにも関わらず今や……

その武力によって様々な国を制圧し、他の有数の国々と肩を並べるまでに成長した、戦争に特化した帝国
そんな帝国がこの国になんの為に……

「何のために、帝国がこんな国に来たのか……と、言いたげな表情ですわね？」

「っ?!」

直に聞こえた声に振り返ると、映像通りのエリスが其処に居た優雅に、美しいとも思える足取りで王の……壇上に居る私達の目の前までやって来て、笑う
そして、

「王、ディラム帝国帝王代理、エリス＝リアライが告げる……」

冷たい瞳で告げたのは、

「隠している『羽有り』を差し出さない」

そんな、一言

(……『羽有り』?)

聞き覚えの無い言葉に違和感を覚えるが、そんな私達をお見通しだというように彼女は言った

「貴方達が『風の翼』と呼んで仲良しごっこをしている種族の事よ……さあ、差し出さない？」

「……わざわざこの国に潜入したのはその為か……？」

「もちろんですわ、『羽有り』を渴望する国は大勢ある……それを
出し抜く為には、私はなんだってしてみせますわ……帝国に逆らう
者は、殺す事も厭わない」

（……この人は、敵です）

正直、帝国や世界の事情等あまり知らない
だけとただ一つ分かった

「エリス様、貴方は敵です……私達とは相容れません」

この人は敵だ

告げた私に賛同するように、皆が言う

「そうだ、お前は敵だ」

「拙者らは、皆が仲良く暮らせればいいと願っているだけで御座る」

「ええ、其処には種族など関係ないわ」

「そうですう！」

「う、うんっ、皆、同じ大事な命、持つてるもん」

「そうさ……それに、例えばオレ等がそれを是としよう……」

「ふふふ、是と出来ない馬鹿も居るのよ!!」

国中の皆が頷く

彼をよく知る皆様が、例えば誰が『風の翼』であろうと断固拒否する
とそう叫んだ

「……帝国の者よ……これが、我らの意思じゃ」

ただ黙って、王の言葉を聞いていたエリス様が微かに俯き、

そして

「ふふふっ……貴方達が是と出来ない馬鹿、と呼ぶのは………これの事かしら？」

そう言いながら彼女が私達の前に見せ付けるように取り出したのは、肩口から切り裂かれた左腕

（え……？）

それには見覚えがあつて、

それを確かに私達は何時も間近で見ている……息をするのも忘れる程に、思考が止まる

皆の時間が、止まる

「全部持つてくるのはさすがに重くて……」

クスクスと笑うエリス様の声だけが、響き渡る

与えられた情報を、飲み込むことを脳が拒絶して……そして、

「本当にいい声で泣いてくれましたわよ？久しぶりにゾクゾクしましたわ」

彼の左腕に口付け妖艶に微笑む、彼女を前に何かが音を立てて崩れた誰が、何が最初だったのか分からないだけ、

「お前はだけは絶対許さないっ！！」

心のままに叫んだ言葉はだけは同じだった

（許さないっ……よくも、よくもよくもよくもよくもっっ！！！！）
浮かぶのは、何時も何処か抜けている彼の姿
馬鹿をやって、我俣と思える理由で騒いで……怒って、

「お前だけはっ……！！」

何時も最高の笑顔で楽し気に幸せ気に、
心の底から笑いかけてくれた、優しい優しい……

「許さないっ……許さない許さない許さないっ！！許してたまるかあっ……！！」

心が、頭が、ぐちゃぐちゃに混ざり合って分からなくなってくる
ただ一つだけその中でぶれること無い感情があって、それが肥大し……行き着いた先は、

（憎いっ……）

たった一つ、それだけ

（ただ怒りに身を任せて突撃してくるなど浅はかだ）

怒りなど、憎悪など……ただ殺気を垂れ流して動きを察知してください、と言ってるようなものだ

やはり、人間など所詮はこの程度……

命のやり取りも戦争も、理不尽という名の略奪も経験したことのない人間など、

（私の足元にも及ばない）

さあ、

「身の程をしりなさい？」

弱小国が力ある強国に楯突くとどうなるかということをし、手遅れになる前に身を持って教え込んであげましょう……

「あああああああつっ！……！」

ああ、まるで獣みたいだ

真っ直ぐに向かってくるなど……折角、アイコンという力があるのに台無しだ

（まあ、仕方ないのかもしれないわね）

こうなると見越して挑発したのは自分

思い通りのこと

「『支配の扉』よ……風操りて吹き飛ばせ」

夢物語など、所詮キレイゴト……風の前の塵と同じ

「っ！」

「ぐっ！！」

本当に頭に血が上っていたのであろう……

向かってきていた面々、あっさりと吹き飛ばされ地面に叩きつけられた

なんて浅はかな……最早笑いしか出てこない
この程度の力で、誰かを救いたいなど反吐が出る

「もう終わり？大切な人を奪われて私が憎いんでしょう？」

「くっ、『享樂の扉よ』！！」

やはりまず立ったのは彼の姉か
だが、悲しいかな

「火の粉舞い踊り焼き尽くしなさい！！」

自らのアイコンの性能をまだ理解していない
（あらあら、それはそういう風に使うんじゃないのよ）

「舞え、氷の花……無効化してしまいなさい」

炎と氷なら、氷を溶かしてしまえる炎の方が強い
故に、属性劣等のペナルティがこちらに付与される……だが、

「なっ……」

「扉はね、ただ開けるだけじゃ意味なんてないのよ？その先を見極めなければただの飾りでしかない」

全ての炎を氷が包み込み、ゆっくりと溶けていく

（……まあ、貴女は割と頑張ったわよ）

最愛の弟を失った憎しみの中で、冷静な判断が出来たのだから

「お返しは、3倍返しがいい女のセオリーよね……氷の礫よ、さあ……降りかかれ」

「っ！！」

「危ない！！」

全弾、アイシスに命中する筈だったが……

突如割り込んで来た彼の背に命中した為、どうやら不発ただけど、面白い

「……あらジャンス先生、家族には優しいんですね？」

「ぐっ……」

「きよ、教師っ……」

強者が弱者を庇い、戦闘不能に陥る
これだから人間は見ていて飽きない

「今の……待て！！貴様、人間じゃないな！！」

この国の王子……アスベルが、声を上げる

（……よく、分かったわね）

どうやら彼は『本物』を見た事があるようだ

ならば彼から聞くのが手っ取り早い……だがその前に、

「ええ、よくお分かりね」

此方には絶対に勝てないと、思い知らせておく必要がある
小さく目を瞑り力を解放させる

「私は帝国所属の『生きる兵器』……」

そつだ、私はただの兵器

使う者の意のままに力となるただの……

「忌み嫌われる『羽有り』の一族の一人」

「っ……黒い、羽……」

「本物を見るのは初めてかしら？」

そつだ、ただの意思を持たない道具

驚いている皆を前に、見せ付けるようにクルリと回り……

「これが『羽有り』として蔑まれてきた、ただの兵器として生きる
道を選ばされた者の姿よ」

昔は悩んだ

まだ、幼かったから……まだ、夢を見ていたから……だけど、今は
もういい

ちゃんと理解した

強ければ認められる、強ければ、全てを手に入れる事が出来る世界
なのだ

「対価は払いましたのよ？」

見せつけるのは両足

奪い取ってきた彼の左腕と同じ、作り物

「『羽有り』は、初めは力なんて、翼なんて無い……けど、ある時のある瞬間の……心の底からの喪失と絶望……それと同時に、自らの何かを対価に差し出して始めて最強の力を得るのよ」

勝ち誇ったように笑ってみせるが、先ほどまで憎悪しか宿って居なかった皆の目にあるのは、

（……哀れみ、といった所かしらね）

滑稽なもんだ、人間というものは

先ほどまで殺したいとまでも思っていた相手に、同情してしまうとは……

ああ、なんて愚かしい

「だからね？ 私達、『羽有り』は……」

そつだ、私達は違う

アイコンの全てを理解し扉を先の先まで進む事が出来る

犠牲とは何たるか、対価とは何たるかを知っている強い存在

「犠牲を是としない人間なんかには負ける訳がないの」

力こそ全て、愛など幻想、全ては力、力はウソを付かない人間には負ける筈ない

だから、

（もう、終わらせようましょうか……）

皆も分かった筈だ

どれだけ思いが強かろうと、力有る者の前では意味の無いものだと

……

「此れを機に、帝国の一部になる事を考えなさうたらどうかしら」

今ならこの反乱も黙っていてあげる、もちろん、『羽有り』を差し出すならばね？

そう告げ……持っている力の半分を総動員し、アイコンを起動させた

兵器＋人間Ⅱ暗転

圧倒的な、力だった
もう指一本動かせない

唯一立っているのは、『生きる兵器』として任務を果たそうとする元
クラスメイト一人だけ

（無理、だったんさ……ねえ……）

地に伏してぼんやり思うのは、そんなこと

自らを友と、デッカイ夢を見ようと……そんなことを語ってくれた
親友も、もう……

（絶望というのは、こういうものなんだろうさねえ……）

ただ心に穴が空いたような喪失感が広がるだけ

「……さて、私は人間に興味なんてないの」

ふと、彼女がそう言いながら辺りを見渡す
そして静かに、

「出てきなさい『羽有り』……さもなくば、皆を殺す」

アイコンを起動させ、先ほどと同等くらいの力を起動させた
思わず、目を瞑る

（ああ、此处で死ぬのか……呆気ないさねえ……）

これで終わるのだ、全部全部……終わる
ただそう思い、その瞬間を待つ……が、

凄まじい光に包まれるけど衝撃は来ない

(っ…………?)

一体何が……そう思っ
て目を開けて見えたのは、黒い羽の生えた兄
の姿

アスベル

「アス、ベル……?」

アスベルは、オレの声に振り返り悲しげに笑った
それは見たことの無い、笑みだった

「ごめん鴻苑……僕は、『風の翼』の一人だ」

告げられた言葉に理解が出来ない

(『風の翼』の一人?アスベルが?)

何を笑えない冗談を……そう思いかけるが、ただ見えたのは父の悲
しげな顔とアスベルの静かな決意の顔で、

(おいおい……笑えねえさ……)

何一つ、言葉が出てこなかった
そして、

「僕の母は『風の翼』の一人だった、だから僕にはその血が流れて
いる」

アスベルは淡々と語る

まるで人事のように……書かれている文章を読み上げるように、何
の感情も含まない声

(本当に、アスベルなのか……?)

違うと、誰か言っ
て欲しい

その願いは虚しく、

「混血が生まれるのは稀で、生まれてもすぐ死ぬかどっちかだったけれど……父の尽力で何とか生きながらえたんだ」

ごめんね、隠してて……

そう言う時のその笑みは、何時も通りだった

そして、

まるで最後までも言いたげに……オレに、皆に、背を向けた

「やっと見つけた、選びなさい、共に帝都に来るか、此处で死ぬか、合理的な判断は出来るでしょう？ 貴方は心なんて無い『羽有り』なんだから」

（合理的判断？心なんて無い『羽有り』？）

会話に、頭が付いていかない

ただ思うのは、『羽有り』と呼ばれている者は文字通り、『生きる兵器』と認識されているのだろう、ということ

（あす、べる……）

ただ見守るしかなくて、

黙って余裕に笑ってみせるアスベルの背が、何故か遠い

まるでもう近づくなど、そう言われているかのように遠くて……

「『羽有り』は全て生け捕りか、無理だと判断すれば抹殺の命令が出ているわ」

「其処には罪の無い人を殺すことも含まれて居る？」

「基本は無い、けれど……邪魔するならば殺して良し、そして場合によっては、帝都と全面戦争になるわよ」

（ああ、分かったさ……）

最初から、アスベルは知っていたのだと
全て知っていた……

自分の正体も、他国から『羽有り』と呼ばれる者が居ればどうなる
かも……だから、

「アス、ベル……お前は、『風の翼』だから王位継承を断っていた
と……？」

眩くようなオレの問いに、アスベルが振り返る
其処にあるのは、何時もの困ったような顔じゃなく……

「……僕は、汚らしい血を引いているから」

さつきみたのと同じ、諦めたように穏やかな笑み
（なんなんさ、それ……）

どうして、種族の違いで何もかも諦める？

受け入れられないとでも思ってた居るのか
それほどに、それほどまでに……

（そんなにも、オレは、弱く……見えるんだろう、か？）

言葉よりも先に目から何かが零れた

何も守れないのだと、何も力が無いのだと……言われているようで、
そして思った

ああ、この手を伸ばす事さえ許されないのだろうか……と
諦めるしか、無いのだから……頭にそう過ぎった
その時、

「ざっ……けんなよ、てめえっ！……！」

そんな声と共に、二度と聞く事は無いだろうと思っていた声が響いた

●
●
●
●

「あ、ああ、い……？」

呆然と、ただ呆然とした声が響いた

それに思ったことは一つ

（ああ……少し時間を掛けすぎたようね）

そんな小さな後悔

そして表面上は笑みを浮かべ、心の中でだけ溜息を吐く

折角彼は死んだと印象付けて戦意も、抵抗の意思さえも奪い取った
というのに……全てが無駄だったと、悟った

「折角、生かせてやっていたのにわざわざ命を捨てるなんて馬鹿な人間ね」

（彼は……殺したくないのに）

言えない言葉飲み込み、冷たい目で睨んでも彼は此方を見やしない
それどころか、何かを見ているのかすら危うい

（それもそうか……）

彼にしたのは所謂半殺しというものだった

気絶した後も、すぐ目覚めないよう……死なない程度に痛め付けた
想像を絶する程のスピードで目覚めたのには驚いたが、ただそれだけなのだ

「はあ……っ、『風の翼』の血が汚い……？ふざけるのも、いい加減に……しやがれっ……！！俺等、と、同じ人間じゃねえか……っ！！」

その証拠に、足を引きずり、右手で左肩を抑えながら焦点の合っていない瞳で……

彼は、私に無防備に背を向けアスベルを睨んでいる

（今ならこれ以上余計な事を言う前に殺せる……）

頭の冷静な部分は囁くが、身体が動かない

まるで……その先が聞きたいかのように、微動にしない

「ただ笑って、泣いて、怒って……っはあ……違う所、なんて何処にもないっ……！！」

まるで遠くに居る誰かに届けるかのように声を張り上げる彼は、ただ必死で、

「羽が、あるから、とかっ……無いから、とか、んな理由で……死んでいいとか、ねえんだよっっ！！！」

泣き叫ぶようなその言葉に、純粹に葵は馬鹿だと……皮肉でも何でも無く、素直にそう思った

彼は息を整えるように大きく吸い、微かな血と共に空気を吐き出して今度は、

私の方へと向いた

まるで、安心させるように笑う

「な、あ……エリスちゃん……っ俺は、君の事……信じてる」

そんなありえないことを、平気で言った

（ああ、彼は何を言っているのだろう……）

こんなにもボロボロにしたのは私だと言うのに、恐怖の対象でしかないだろうに、

何故か真っ直ぐで……私から目を逸らさない

「エリス、ちゃん……悪い子、じゃないもん……なあ」

何を思い出しているのか、小さく彼は笑った

（どうして……どうしてこの人はこんなにも馬鹿なの）
訳が分からない

第一、少し考えれば分かる筈だ

私は今、殺そうと思えば彼をすぐさま消す事が出来ると
なのに、

「苦しいだろ、今……」

また一步、無防備にふらりと近づいてくる

唇が、無意識の内に動きかける……だけど、

（……今更、もう……私にはそんな事を言う資格なんて……）
拳を握り締めて、無理やり嘲笑う

「何を言うの？死に掛けの状態で、それだけ言いに来たの？」

馬鹿馬鹿しい、折角拾った命なのにね

吐き捨てるように言っても、彼は優しく笑うだけ

「大丈夫、だ……エリスちゃん……俺が、助ける、から……」

そしてまた一步、踏み出し告げる

「みんな、俺の……友達、だからっ……皆……俺の、大事な……仲間、だから」

だから、大丈夫

何の恐れもなく、かといって自棄になっている訳でもない……正気の瞳が、私を見る

純粹過ぎるその目に思わず、身体が勝手に後ずさる

そして理解してしまった

今、何故身体が勝手に後ずさったのかを……分かってしまった

（弱い、癖に……っ）

私より遥かに弱い、搾取されるだけの弱者な癖に、

（どうして私に怯えないのよ?!）

どうして、私はこんな人間に怯えている

許せない、こんなの許すわけにはいかない

死を前にしても屈しなかったというのに、

（こんな人間一人に、こんな……ただの、言葉なんてっ）

「煩いっ!! 誰も助けなんて望んでいない!! これ以上近づくな、人間風情が!!」

今更助けてなんて、少女のように縋れる訳がないでしょう?!

逆上する心のままに、荒れ狂うそのまま私は、

（こんな……こんな人間っ、力を使うまでもない!!）

常備携帯している鉈を握り……今度こそ首を刎ねようとした瞬間、

「つと、つとととと!?!」

「っ?!」

近くで大きな爆発音した
思わず動きを止めそつちを見ると、

「ケホ、ケホッ！……あー、はははー……花火モードにしていた
の忘れてたよ」

「ふざけてる人間にしちゃ、やるね……藍先生」

所々切り裂かれている藍とウルシエンが居た

（つウル、ルー……）

数少ない、仲間、同族……

そう思いながら縋るような目で見つめると、少し驚いた顔をした後
手を握ってくれた

その温かさに荒れていた心が少しずつ落ち着き、息を吐く

そして……

（もう、大丈夫）

もう、ブレないと……

もう一度、『敵』として皆の前に立ちはだかった

▼ ▲ ▼ ▲

「藍？！」

「な、なんでウルルーが？！」

弟の副担任と同級生が何故か揃って出てきた

しかも、お互いに傷を負って……だ

ただ普通の衝突……と、いうのはありえないだろう

あの切傷は明らかに何らかの能力によるもの……

そして、辿りついた結論は一つ、

(……まさか彼も僕と同じっ……)

視線の先で、ウルシエン君がニツコリと笑みを浮かべる
そして、

「知らなかったの、馬鹿だねやつぱ君達はさあ!」

そんな嘲りと共に、

契約済みの『風の翼』の証……黒い羽をその背に現した

「お前も、『風の翼』の一人?!」

『生きる兵器』は疲労や傷も普通の人間のように溜まっていく
にも関わらず、帝国は平気で何年も二人同時に送り込んでいた
帝国は其処まで本気だったという訳、か

ならばかなり不味い

『風の翼』二人を相手にするにはあまりにも分が悪い

オマケに、此処までの本気……此処で失敗したとしても、恐らく
(彼女の言ったとおり、前面戦争へと発展させるつもりだ……)
そう思った矢先に、

「さて、と……正体も状況も皆飲み込めたっばいし……あ、でもその前に、」

言葉を切り、立っているのもやっとな葵クンを見て笑う

(っ、不味い、)

細められた目にあるのは、獲物を見つけた狼のそれと同じ……

「エリスちゃんを惑わす悪者は、殺さないと、ねえ?」

素早くアイコンを展開し、そのまま力を発動させた

（っ、守らないとっ）

今此处で葵クンを失うのは惜しい……

『風の翼』としての合理的判断なのか、人間として友を守る為の判断かは正直分からない

だけど、脳の指令のままにアイコンを呼び出し

（なっ……このままじゃ、）

振り返り見えるのは、腰の抜けている群衆

（皆巻き添えになってしまっ）

起動を躊躇った、その瞬間

「危ない！！」

そんな声と共に藍さんが葵クンを抱き締めるようにして此方の防御範囲に飛び込んで来た

（っ、ナイス！！）

心の中でだけ賞賛を送り、力を惜しみなく注ぎフル活動させるただ、

（間に合え……っ）

と心に念じながら、

「我が願うは友を守る力！！『救済の扉』よ、蔽え！！」

ボックス状の盾を展開し、爆発や爆風から皆を守り、

（っ、やっぱり専門じゃないから長くは持たないか……なら、）

「帷クン、柚李さん！！二人は戦えない者達を守って！！」

そしてそれが消え去る前に、大分回復している二人に指示を飛ばした

やはり学生といえど、実戦をメインに扱う彼らはすぐさま反応し此方の意図を察知してくれた

「了解致した！！『守護への扉』よ、共に歩む者を守れ！！」

「『活かしの扉』よ、強化するで御座る！！」

二人がほぼ同時に叫び、

一瞬にして薄い膜のようなものが観衆を包み込んだ

（よし、此れで無関係な人達に危害は……）

それに安堵したのも束の間、

「……礼を言うよ、帷クン、柚李ちゃん……」

ニツコリと、心の底からの笑みを浮かべたウルシエン君が可笑しなことに礼を告げた

一瞬の思考停止の後辿り着いたのは

（彼らは……国の民を、巻き込みたくない……？）

おそよ戦闘慣れしている『風の翼』に相応しくない、人間的な思考

（まだ、彼らは人なのか……）

そう思った時、

彼がアイコンを起動させ終え、

「これで思う存分殺れるよ！！」

直後、突風が僕等を襲った

（くっ……！！）

前が見えなくなるほどの風……恐らく彼は風を扱うのが得意なのだろう

彼女の方も、鉈は持つてはいるが主に使っていたのは体力に関係の無い術式だけだ

（なら、接近戦の方が有利か？）

そう結論付け、

「『救済の扉』！！僕に力を貸せ！！」

自らに力の倍化術式を施し、レイピアを手に接近戦へと持ち込む狙い通り、二人は遠距離戦を得意とするらしく、何とか二人分捌き切る

が、

（っ……細振りの剣じゃ、マトモに受けたら折れるかつ！！）

此れが、戦争国と非戦争国との違いだろう

勝つ確率を限界まで追い求めた彼や彼女に与えられている武器はそれ相応のもの

つまりは、

（正面から向かえば圧倒的フリ……）

其処まで思った瞬間、

「はあー……」

戦闘の場に似つかわしくない深い溜息が聞こえた

思わず力が抜けかけるが、何とか持ち直す

すると、溜息の主はもう一度溜息を吐いて

「あんましこれ好きじゃないけど、なあ」

愚痴のようなものを呟いた

危ないぞ、という声が口々に耳に届くのは恐らく、溜息の主が防衛区域から出たからだろう

だけど、

「藍さん！遅過ぎる、よっ！！」

心配など、しない

何故なら彼は覚醒してなかったとは言え、それでも種族補整のあったウルルー君と同等レベルの力を持っていたならば、彼は十分に戦える

「あー、悪い悪いー……うん、そうだな、贅沢は言ってられないよなあ」

彼が苦笑したような気がした
そして、

「具現化せよ、全てを縛る鎖……」

そんな声と共に、次に耳に届いたのはジャリツ……と、まるで鎖が擦れるような音
そして続けざまに、

「我望むは疾風を止めるが如き拘束……縛れ」

具現化と起動とをほぼロスタイム無しでやりきった

（藍さん、やるねっ）

人間ではかなり上位の位置に付くであろうその速度に内心舌を巻く
そして、

僕の横をすり抜けるように目の前の二人に鎖が迫った

「なっ……」

「ちっ!!」

気付いた二人がほぼ同時に羽ばたき、垂直に逃げるが、直後……

聞こえたのは、獲物を追い詰めた狩人のような

「逃がすかよ」

そんな、捕食者の声

そして鎖は意思をもっているかのように追っていき二人の翼を絡め取った

もがくが簡単には外れないらしく、彼らの動きが中途半端に止まった

「藍さん、ナイスプレイだよ!!」

彼がどういう原理でこの鎖を操っているのかは知らないが、チャンス好機だ

そして羽を羽ばたかせ、飛び立つ

見えたのは驚いたような彼の瞳……

そして庇うかのように隣に居る彼女を抱き締めた姿

だから、決めた

（これで終わらず、よっ）

狙うは彼の利き手の右腕

そしてそのまま狙い通りに……突き刺した

「ぐうっ!!」

押し殺したような呻き声が響いた

そして、歯を食い縛って耐える彼が何故か此方を見た目と目が合ったその瞬間、

（笑った……？）

思わず停止する僕に、ウルル―君は言葉を発した

「ぐっ……君、は……確かに、強い……だけど、一つ……間違った、ね」

それは、予想外の言葉

一瞬思考が停止し、思わず彼を凝視した瞬間、

――僕の、勝ちだ……――

唇だけでそう喋り、もう一度彼は言った
君は、強かったと……

頭の中に反響する言葉……そして、賞賛の混ざった笑みを浮かべた彼の表情を見て、

一つの可能性が過ぎった

（つまさか帝国は……）

『生きる兵器』の一部分を欠損させてでも、他国に渡したく無いと判断しているというのか……？

そう思った瞬間、

「契約をつ、我が右腕を対価と差し出す！！」

彼が叫び、可能性は肯定された

（不味いっ……）

直後、何かに噛み切られたように右腕が？げ其処から血が溢れ出す途切れ途切れの悲鳴を上げながらも、彼は叫びをもう一度上げた

「ぎ、が、ああ、ぐっ……けい、やく、はっ、果たされたりっ！！

！血よ、我が意思に従えっ！！」

その声に、覚悟に答えるように溢れ出した血が刃となり
（甘かったのは……僕だったか……）

僕の胸へ吸い込まれるように迫り
そして、

ドスツ、と……あまりにも軽い衝撃と共に……
（やは、り……僕は……）

——兵器にも、人間にも、なれなかった……——

そして、

「アスベルっっ！！！！」

名を呼ぶ悲痛な声に包まれて……身体は自由を失い、
（おち、る……）

かつて憧れた空の上とは正反対の場所へ……
ゆっくりと、落ちていった

喪失＋覚悟Ⅱ語りし夢は果て無き希望

何が起こったのか分からない
ただ落下するアスベルへが見えて、ほぼ無意識の内に手を伸ばして
駆け出して……

（とど、かない……）

手は、あの時のようにまた空を切って、
飛び出そうとした瞬間、オレより早く動く影があった

「っ父さん?!」

躊躇いもなく崖から飛び、
落ちていくアスベルを捕まえぎゅっと頭を抱き締めたのが見えた
（このままじゃ二人とも死ぬっ……!!）
頭を過ぎった最悪の結末に思考が凍り付く
その瞬間、

「っ、鎖よ我が意に従え!!」

オレの横を凄まじいスピードで鎖が過ぎ……
振り返ると、走りながら藍が鎖を具現化させていた
そのまま崖下へ向かった鎖は、寸でのところで父とアスベルの身体
に巻きつかせ落下を止めた
が、

「ぐっ!!」

落下が止まった瞬間、その衝撃からか藍が崖下に向かって引きずられていく

（このままじゃ三人とも、落ちる……!!）

ほぼ無意識の内に身体が動き、引きずられる藍の身体を捕まえた直後、

「みんな、なっ……」

我先にと守られていた皆が飛び出し、鎖に群がり……父さんとアスベルを引き上げていく

「アスベル様、しっかり!!」

「王、もうすぐ上がるからな!!」

「皆もうちょっとだ、全力で引けええええ!!!!」

その必死な掛け声と共に、徐々に二人の身体が引き上げられ、そして、

「アスベルっ!!」

引き上げられた時には血を失い、真っ青になっていたアスベルに駆け寄った

血を軽く吐き出したが、オレに気付いたのか、静かに……
何時もの困った様な笑みを浮かべた

「ごめ、んっ……げほ、かはっ!!」

「アスベルっ!!っ……もう、喋るんじゃないさ……」

何か喋ろうとして、また血を吐きだした

そんなアスベルに、思わず声が震える

言葉を紡ごうにも、嗚咽が先に出て邪魔をし、何一つ言葉をかけてやれない

（っ、何でオレは何時もこんなさ！！）

大事な時に何時もそうだ、何も言えない

今だってそうだ、言いたい事が沢山あるのに

「どうして今まで黙ってたんだ」、「今度から隠し事は無しにしろ」

、「勝手なことばかり独りで抱え込むな」

沢山沢山、あるのに……

「助けてくれて、ありがとう」、「今度からはオレも力になる」、「

「もう独りで悩まなくていい」

（あるんさっ……沢山、たく、さんっ……）

何も言葉が出ない

ただ、そんなオレを見かねたのか……涙だけが、言葉の代わりに止まる事無く溢れ続ける

そして、やっと絞り出せたのは

「にい、さんっ……！！」

たったの四文字で……

それでも、アスベルは心底幸せそうに笑った

「は、は……10年……まえ、みたく……やっと……やつ、と……きよ、だい……もど……れ……」

ああ僕は、幸せ者だ……

吐息に紛れるようにして呟いたその言葉がオレの耳に届いた瞬間……
ゆっくりと……アスベルの頬を涙が伝って地面に吸い込まれ、
そしてアスベルは、

「あす、べる……っう、くっ……あああっ、うあああああっつ！
！！」

全てを守り、人としても、兵器としてもなく……
ただ一人の、世界でただ一人のオレの兄として、息を引き取った
後に残るのは……誰のものとも言えない叫びの木霊だけ……

* * *

悲痛な声がまだ木霊している
そんな中僕は、

（彼は……たった一つの存在として、一生を終える事が出来たんだ
ね……）

最も僕らしく無い事を考えた
何時もなら、そうだ
同族の死が、貴重な『生きた兵器』が死んだ
惜しいものを亡くしたと……そう思っただけだというのに……

今思うのは、ただただ……

彼は最後の瞬間、幸せだったのだと
心の底から、合理的判断などなくああ言っただと……
そして行き着いたのは、

（彼は、最後まで……）

最後まで人間だったのだ
結論でも答えでも何でもなく、ただ抽象的な『思い』だった

「……帰ろう、か……」

ふと、

此処に居るべきではないとそう思った

幸い血はもう、種族特有の治癒の高さで止まっている

恐らく帝国に着くまではもつだろう

だから、一刻も早くこの場所から去らねばならない

なぜならば、彼の死を……穢してしまうような気がしたからだ

（『羽有り』は……此処には、居なかった）

そう思っ背を向けた

直後、

「っ……待て、よ……」

ふいに、声が掛けられた

幾分か回復したのか、その声は芯を取り戻していた
案外、彼もタフだ……そう思った瞬間何故か、

（これから、彼の声も聞けなくなるのか……）

そう頭に過ぎり、

一瞬足が止まりかけるがそのまま歩みを続ける

すると、もう一度だけ……待てよ、と声が聞こえた

だから……立ち止まった

強いて言うなら、気まぐれだった

そんな僕達の耳に、

「俺、は……王に、なる……」

叫びが、聞こえた

それは止まることなく紡がれていく

「おまえ、等の、帝国の……っ王さえも、従える程の王に」

そしてそれは段々と力を帯びて、

此処に在る静けさと絶望を塗り替えていくかのように

「誰もがっ……誰もが自分を誇れるような世界を作るから」

反射し、大きく大きく広がっていく

（これ、は……）

思わず振り返る

見えたのは真っ直ぐに此方を見る強い瞳……

「もう誰も……泣かないように」

その瞳が見据えるのは何なのだろうか

どうして彼は、失って尚信じることを諦めないのだろうか……
分らない

合理的に、ただ最善を求める『羽有り』には……

（彼を、理解出来ない……）

そして、

僕達を越えた先にある何かに向かって叫ぶように、彼は言い放った

「悲しませるしか能の無い世界、俺が全部ぶっ壊して綺麗にしてやる……誰も悲しみなんて望んでねえ……皆が、俺が、望むのは……
後から先にも笑顔だけだ」

ゾクリとするほどの力のある瞳……

まるで先に息を引き取った彼が、乗り移ったようだと……そう感じた

（……これは……帝都と、正反対の……）

彼の思想は危険だ

感覚的にそう思った……

そして、彼を此処で殺しておくべきなのも、理解した
だけど、

「詭弁だね……」

出てきたのは言葉だけだった

(……僕も、まだまだ甘いな……)

最善を今此処で選べない

だけど、もしも……彼が言う、そんな世界があつたならば？
そう考えてしまう

「詭弁で、しか……ないよ」

だけでもしも、

本当に彼の言う世界があつたなら……

(僕達も、共に……殺し合いなんてせずに、笑い合えてたかもしれないね)

そして、

きっとそれは誰もが心の奥底で望み、

誰もがその儚さ故に諦め……そしてそれを信じる者を羨望と共に潰
そうとする、微か過ぎる希望

藁に縋るよりも馬鹿な……

其処まで考えて、ふと納得した

(ああ、彼は馬鹿だったね……)

彼は馬鹿で真っ直ぐで、純粹で……そして、綺麗だ

(……壊れて、欲しくないね)

合理的判断を超えた理論よりももっと先のような……
おぼろげな場所で、そう思った

だから、

「だから、」

君が、不可能だと、絶望を、喪失を知る前に

「此処に宣言する、」

せめて僕等の手で、

「我がディラム帝国は、」

その綺麗な心のまま、

「ウィンダス国に宣戦布告を行う」

殺してあげる

「降伏は、認めない」

それが、僕等に出来る君への最大の恩返し

返ってきたのは、沈黙

それを了承と受け取り、振り返らず歩き出す

それはきつと、二度と交わることはない道……

「……ウルルー、エリスちゃん……今は、さよなら」

微かに、聞こえた声

それにただ黙って頷いて、僕等は足を止める事無くしてこの国を出た

船の上……

小さくなっていく温かだった思い出くれた島を見て、
先ほどの言葉を思い出した

——『今』は、さよなら——

（今は、か……）

ふと、空を見上げると島の方で花火が上がっていた
恐らく、藍先生が上げているのだろう……上げ損ねていたらしいから

それを見ながら、ただ思う

(なあ、葵クン……)

君は彼の喪失をどう受け止めたんだい？

恐らく彼が目の前に居て問いかけても、答えは返ってこないだろうけど

いや、違った……

全て、最後の言葉に答えはあったね

恐らくこの先、彼に対する疑問が生まれ続けるだろう……

だけどきつと……あの最後の言葉が彼なりに出せる僕等への、僕等のこれから抱く疑問全てへの回答だろう

だから、

(あの言葉に込められた思いは……まだ『今』は、知らなくていいんだろう?)

時がくれば分かったと、そういった事なんだろう

結論付けた答えはなんの根拠も無いのに納得してしまっていて、

(……可笑しな人だよ、ほんと)

見上げる先の空に、赤と青の火の花が咲いた

綺麗だと……素直に、思えた

だから、それに答えるよう小さく呟いた

彼にはきつと……後一度、結末がどうだろうと同じ事を口に出すのだろうと……確信めいたものを抱きながら……

もう一度だけ、心の中で呟き目を閉じた

(……さよなら、僕等の友達、葵くん)

喪失＋覚悟Ⅱ語りし夢は果て無き希望（後書き）

取り合えず……

此処までで、序章的な何かが終わりました！↑え

当初この回（世界の王になるぜー的な下り）は、ギャグで終わるつもりだったんですが……

ちよっと、てか大分調子に乗り過ぎましたね！↑乗り過ぎ

まあ、そんなこんなで……やはりグダグダですが……

どうやら見てくださっている寛容寛大仏様がいらっしやるので頑張ります！（ノリが続くまで（笑））

それでは失礼致しました、敬礼ッ！

変わりなくやってくる朝＋決意＝享受の先へ

「……朝……やっぱり、何時も通り、だよねえ……」

目覚めたら、何時もと何ら変わらない朝が来た
昨日あれだけのことがあったというのに、

昨日世界で一人しかいない、かけがえの無い人を失ったというのに

……

（それでも、この世界は……まるで気にも止めていないように）
何度も繰り返し朝はやってくる

（ああ……私は、弱い）

溜息と共に零れたのはそんな言葉だけじゃなくて、

「私はっ……なんで……なんでっ、こんな……弱いんですかあっ！
！」

泣くまいと、昨日必死に堪えていた涙

それが今頃になって心に波を生み乱していく

（止まらないですよあっ……）

誰のために、何のために泣いているのか分からない
けれどただただ、

「ふえっ……ひっく、うあっ……うっく……」

胸が押しつぶされそうなくらい、苦しかった

泣いて泣いて泣いて泣いて……

ぐちゃぐちゃになった思いを外へ追いやらないと、どうにかになってしまいたい……

怖くて悲しくて悔しくて……

彼に、申し訳なくて

（鴻苑、クンっ……）

浮かんだのは、大好きな人

家族を失い、喪失の中無理やり微笑んだ強くて脆い彼……

分かっている、一番辛いのは彼だ

なのに自分は彼を支えること所か……泣く場所にさえなってあげられない

昨日、藍さんが上げた追悼の火の花をただ黙って見つめていた彼は、思わず目を逸らしたくなる程に、虚ろだった

「私じゃっ……鴻苑クンの、力にっ……！！」

——なれないのっ……？！——

叫んだ言葉に返ってきたのは……

「っ……ひっく……うう、あっ……」

押し殺したような微かな嗚咽だった

そして気付いた

（涼……も、泣いて、るんです……ねえ……）

皆一緒なんだと、

この喪失の痛みは、空虚は、皆共有しているのだと……

（前をつ、向かないと……）

強引に涙を拭き、身支度を整える

今日は、学校だ

無理やりにも何時も通りを演じなければ、耐えられない
昨日一致したのはそんな見解
だから、

「行か、ないとお……」

一人だけ、立ち止まる訳にはいかないのだ
何らかの形で皆必死に喪失を受け止めようとしているのだから

「っふう……涼！学校、行きますよお！！」

苦しい、悲しい、辛い、悔しい
自分たちが強かったならば、彼は死ななかった
だからもっともっと、

（強くなりたい……）

二度とこんな喪失を出さないように

（強く、なろう）

今よりもっと、彼を支えられるように
そして……

願わくば、

「世界の王となる葵クンが歩む道を」

——ただ繋げるのではなく、共に歩めますように……——

小さく呟き、まだ泣いている涼と共に何時も通り何ら変わらない日
常へと、

確実に迫り来る非日常へと、一步を踏み出した

例え、

この先何がどうなろうと

支え続けるのだと、守り続けるのだと、共に……

（共に、皆で歩み続ける）

それが彼への饞

それが自分への、覚悟だ

ふと見上げた空は青い

全てを見透かすかのように全世界に平等に広がっていた

何処までも何処までも、壮大に……広がっていた

私達は、

昨日一つのかけがえの無い人を失った

それによって手に入れたのは喪失

生まれて初めて理解したのは犠牲

だから、

（負けない）

強く……強くなるんだ

このまま無力なままでは終われない

そして……

「絶対に、絶対に負けない」

失い続ける戦いが、今始まった

温もり＋涙〃明日には笑って見せるから

比奈乃　楓達が戦いへの決意を固めたその日
重症と診断されている葵は学校を休んだ
性格に言えば起きない為、休まされたのだが……

教室の皆は、
まるで日常をなぞるかのように過ごす時間に、居るはずの彼が居ない事を

居るはずの二人が居ない事を、ただ黙って受け止めたフリをしていた
それは、

火を見るよりも明らかで……

（いくら決意があっても……厳しいわよね）

己もそうだと、嘲笑と共に思い静かに……教室を抜け出し、弟が眠っているであろう我が家へと向かった

* * *

静か、だなあ……

ぼんやりとする視界で思ったのはそんな事で、次に思ったのも

（あ……あれえ？俺何時寝たっけ……）

そんな……何処が無理やりに何時もの日常と関連付けたようなフワフワとした物だった

気付いて、そして、

(……昨日……)

微かな後悔と共に思い出すのは、
痛みと喪失と、去り行く友に叫んだ誓い……

「そ、か……」

(俺、言っただ……)

思い出すのは昨日のこと

幸せだったと、微笑み息を引き取った……

最後のその瞬間に、たった一人……世界でたった一人の兄、という
存在として生きた彼と、

『羽有り』だと、『生きる兵器』だと……だから共には居られない

……

背中ですう告げ去っていった友人二人

そして彼らに告げた、誓いの言葉

——世界の王になる……——

(……俺、言っただ……)

ベットの上、真白な天井に手を翳す

その手の色だけが、薄い白の中に鮮やかに映える
そして、ふと思う

そういえば『風の翼』の羽はこれと正反対の黒だったと
だけど『風の翼』と言われてすぐ浮かぶのは黒の翼ではなく、

(アイツ、は……白かった……よなあ)

一度だけ見た、大切な友達だった彼女の翼
穢れ無き純白の色

そして、

(……何年前だっけ、あれ……あー……五年、前か……)

思い出すのは他国による『翼狩り』が行われる前のこと
俺の左腕が、まだあった頃の事

正直色々有り過ぎて思い出すのも億劫だが、一つ……
たった一つ、

「……初恋、だったかなあ」

(ああそつだ、あれは……甘酸っぱい……)
赤と黒が、血だけが……

全てを塗り替えた昔々の過去の中で、ただ一つ消えずに残った希望
の灯火

『羽有り』だったと、告げられてもどうでもいいと叫び、
手を伸ばしたあの思い出

「あれって、振られちゃった……ってとこになんのかなあ」

結局伸ばした手は、届くどころか無くなってしまった
そして気付くと彼女は居らず、

彼女を連れ去ろうとしていた男が一人死んでいただけ

(……あれ、俺ってよく生きてたよなあ……)

倒れていた俺を見つけてくれたらしい姉姉ちゃんや、フェルちゃん

……幼馴染達が言っていた

夥しい量の血に塗れていた、と

色々と分からない事も、知りたい事も出来たがあれはあれで後悔は無い

ただあるのは、何故あの時

（腕落とされて……なんでそこで……）

無様に気絶したか、だ

あの頃からどうも俺は気絶癖があったらしいく、唯一の残念な所は其処だ

溜息を吐き、

寝返りを打とうとして体中に走る激痛に悶えた

俺ってば滅茶苦茶カッコわりい

「あー、これだから何時も皆に……」

其処まで呟いて、

（あ、やべ……）

今かなり不味いと思った

何故なら、

（俺今、）

昨日の事を記憶の隅に追いやるように別の事考えていた

それはつまり、

ただ逃げているだけで……見ないフリをしているだけ

（……ダメだろ、俺）

王になると、言ったのは自分だ

あれはただの勢いで言った訳じゃない……それは確かだ
なら、

「逃げんなよ俺……」

せめて自分にだけでもカツコ付けさせてくれよ
嘲笑が浮かんだ地点で相当まいってんなあ……人事のように思った
そして、

少しだけ頑張つて真面目に考えてみる

昨日の事を、あの二人の事を、アスベルのことを……
自分なりに目を逸らさないよう、考えてみる

「一つ、」

俺はあの二人に裏切られたとは思って居ない
だってアイツ等は殺せる時に俺を殺さなかった
まあ、ただの結果として殺せなかっただけかもしれないが俺は今、
生きている

ならば、

（殺す意思が……無かった、って思つて良いよなあ……）

もしも例え抗議があつたとしてもそれはこの場に居ないアイツ等が
悪い

そう、結論付けた

「んで……次、ひとつ」

語つたあの言葉はウソじゃない、語つたあの思いもウソじゃない
昨日言つた言葉は全て俺の本心

馬鹿と思われようと愚かと呼ばれようとあれは、

（あれだけは本物だ）

そして、

「……つぎ……」

一つ、そう口にしようとした瞬間頭を過ぎるのは落ちていった彼の姿
上がる花火をただ黙って見つめていた親友の姿

声を上げて、声を押し殺して……叫ぶように、吐息を漏らすように
……泣く、親友達の姿

(……っはは……こりゃあ、参ったぜ……)

そして漏れたのは乾いた笑み

静かに頭に浮かぶのは嫌な考え

ただの可能性でしかない、もはや『もしも』としか考える事の出来
ない考え……

——あの時俺が死んでいれば、アスベルは……？——

ただ、そんなこと

今更考えても何も変わらないくだらない……

そもそも何がくだらない？

(ああ……よく分かんねえけど、)

「くだらねえのは……どっちだろう……」

比較する対象無しに呟いた言葉

それは誰にも届く事無く消えていく……

筈だったが、

「っ馬鹿葵——！」

言葉が、返ってきた

それも泣きそうで……怒っているかのようで……震えている、声
声の先に視線を向ける

僅かに開かれた扉の向こう……立っていたのは、

「姉……姉ちゃん……」

微かに乱れている長い髪はそのままに、此方を睨みつけるかのように
に見ている姉姉ちゃんだった

目の下に薄い隈が出来ているのが見えて、

（あんなに……美容には、氣い使う……のに……）

アスベルが死んだことがやはり彼女も相当ショックだったのだと、
当たり前だが、改めて思った

そして、

（アスベルは……やっぱさあ……）

皆の為にも、死んじゃダメだったんだよ……ぼんやりと、そう思った
そんな俺に気付いているのか居ないのか、慄然とした足取りで姉姉
ちゃんは近寄ってきて、

大きく手を振り上げ、て……

パンツ……！！

そんな音と共に頬に軽い衝撃を感じた
痛みなんて殆ど無かった……だけど、

（重、い……？）

叩かれた所からじんわりと重みのような物が広がり満ちて……

フワフワと、まるで自分の物ではないかのように軽く感じていた身
体が、重みを取り戻していく

（なん、で……姉姉ちゃんには、そんな力なんて）

動かない左手に代わって右手で頬を抑え顔を上げると、
目があった

今まで見たことないくらい、酷く怒っている目だった
呆然と見ている俺に向かつてまた、姉姉ちゃんの手が振り上げられ
たから思わず目を瞑った
瞬間、

「ちゃんと帰ってこれた……？」

優しい声と同時に、叩かれた頬にそつと……手が添えられる
目を開けて見えたのは悲しげに微笑む姉姉ちゃんの顔
そして、

「大丈夫よ……少し学校で皆の様子を見たけど、大丈夫……」

優しく、抱き締められた
ふんわりと……甘い、姉姉ちゃんの匂いを感じた
そしてそのまま、頬を寄せ合うかのように、隙間を埋めあうかのよ
うに近づかれ

ゆっくりと押し倒され……

その瞬間思い出した

そうだ、俺はまだ……

「葵……貴方の親友は、貴方の手で救いなさい……」

そうだ、その通りだ

俺はまだ、まだ救わないと

だから俺は救われてる暇なんて、悲しんでる暇なんて……

（だって、沢山、救われてねえ人が居る……まだ、悲しんでる、人が……あ……？）

目の前が見えなくなる

手で両目を塞がれたのだと、そう気付いたのはすぐのこと……
だけど、抗議を挟む間もなく優しい声は言った

「けれどそれは明日でいいの、だから今は……」

——泣きなさい……——

「あ……ああ、あ……」

耳元にその声が届いた瞬間、

身体が震える

まるで制御を失い崩壊する建物のように、何かが歪み、何かが崩れ
落ちていく

無意識にガクガクツ、と痙攣する身体を包んだ温もりは、

この世で唯一……無条件に俺を愛してくれる家族のもの
そしてそれは……

——せめて皆が悲しみを乗り越えるまでは俺だけでも馬鹿やって無理やりにでも笑おう……——

そう決意し、押し殺したものを呼び覚ますには十分過ぎるもので

目の奥からこみ上げてくる何かは、意に反し止まる事を知らず、

「っう……あ、ああ、ああっ……」

言葉にならない声を引き連れ、溢れ始める

始めはゆるりとゆつくりと、

最後は激しく終わりを知らぬかのように流れ続けた

「良いのよ、今は……よく頑張ったわね、葵……」

呟き、

子供のように泣きじゃくる彼を抱き締める彼女……

彼から見えない位置にあるその頬を伝い落ちたのも、

彼と同じものだった

——明日には、笑うから……——

声無き声で

愛する家族に誓った誰かは、これが最後とばかりに……

最後の涙を零して目を閉じた

本当の決意＋歴史Ⅱ進む者と憂う者

終わった

何が何だか分からない内に、全てが終わった

胸にあるのはただそんな思いだけで、

あれから……『敵となった友』からの宣戦布告宣言から、あつという間に2日経った

学校に行けば皆は何時も通りの中に、過剰なまでの笑顔をオレには振り撒いて……

（まるで腫れ物扱いさねえ……）

気を遣わせているのだと、ぼんやり思った

席に着き、何もする事なく黙っていると楓の声が聞こえた

「あ、えつとお……私、今朝お料理失敗したんですよねえ」

そして、

ちらり、と皆がオレを見たのが分かった

何か言う事を期待されているのは分かる

が、

（こういう時、何……言えば良かったっけ……）

少し考えても何も浮かばない

だからただ黙った

すると、少し落胆した雰囲気の流れ、話が再開される

「そ、それで楓殿から焦げ臭い臭いがしたで御座るか」

「え、と、失礼ですよお、柚季さあんっ」

「あ、あは、あはは……すまんで御座るっ」

不自然な間が分かりやすいくらいに挟まれた会話

喋ったのは二人だけで、他の二人は喋らない

オレと同じで喋る言葉を持ち合わせていないのか、それとも……

（この先のこと、考えてるのか……）

二人いる内の王子が一人死んだ

それが意味するのは酷く簡単なことで、

（ああ、もう……）

「もう、いいだろ」

喋っていた二人が、不自然な笑顔のまま会話を止めた

だから、

（そうだ、もういい……）

吐息のように漏れた言葉が自分の物だと言う事に気付いたのはすぐだった

「……アスベルが……王子が一人死んだ、それが意味する事を、皆分かってるよな」

言葉が思いの他淡々と口から出てくる

オレは以外と薄情な人間なんだと、思った
だから、

「オレはもう……此処には居られない、だって、王位を継ぐのはもうオレしか居ない」

泣きそうな顔でオレを見る楓が、いつかこんな最悪のオレを嫌ってくれたらいいな……と、思う

アイツは優しいから、一生懸命だから……オレなんかより、ずっと強いから

だからオレを置いて、何処までも自由に進んで行って欲しい
何故なら、

——東 鴻苑は、比奈乃 楓が好きだから……——

「……さよならだ、皆」

今オレは上手く笑えているかな
今オレは悲しんでいないかな
今オレは、

「こうえっ……くんっ……やだ、やだよお……っ」

涙を流しすぎる様に震えて手を伸ばす楓を、

（オレ、は……）

振り払えるかな……

口から漏れたのは空気だけで、
だから目を伏せて、彼女に背を向けて、

(っ…………さよなら…………)
心の中でだけ、呟いた
そして、

——ダァンッ!!

ふいに、背を向けた瞬間扉が大きな音を立てて開いた
そこに居たのは、

「葵……………」

表情の無い、左腕が無くなったままの親友だった

扉を開け放ったまま、それに置いた右手はそのままに葵は教室の中
を黙って見ていた
何を思ったのかは知らないがその後、
ゆっくりと扉から手を離し

「……………っ!?!?」

オレの頬を殴り、とっさの事によろけたオレを蹴り倒し、馬乗りにな
り…………

「何してんだよ、なあ……おい……」

胸ぐらを掴んで、静かに笑ってそう言った

「なあ、」

胸ぐらを掴んだ手を離し、右手で頬を殴られる

「何でおまえ、泣かせてんの？」

また、殴られる

「俺が居ねえ間にさあ……なあ、おい、なーんで皆泣いてんのかなあ」

笑顔のまま、オレに喋る暇を与えないかのように葵は殴り続ける
何度も、何度も……ただ、殴る

見に覚えがある為暫く殴られていたが、ただ思った事がある
コイツの一発は痛くない

なのに、

（重い……）

殴られた場所からじんわりと広がるように、体が重くなってくる
それが何故か酷く不快で、まだ殴り続ける葵を睨んだら笑われた
そして、

「何時までうじってんだよ、くだらねえ」

全てを否定するかのように、言った

「くだら、ない……？」

「ああそうさ、くだらねえ」

また、吐き捨てるかのように言った

くだらない、くだらない、と……アスベルが死んだことも、この国のことも、全てが、

「どうでもいいんだよ」

また葵が笑った

そして、

「兄さん死んで悲しいね、とか言って欲しいのか」

ただ言葉を、

「兄さんは最後まで立派だった、けどおまえは何も出来なかった役立たずとでも罵って欲しいのか」

繋げてはその度、何が面白いのか笑みを浮かべ

「ああ兄さんは兄さんは、アスベルアスベル……って、自分卑下して比べて酔って……楽しいかよ」

ただ言い放つ

その笑みが、その言葉が、全てがオレの神経を逆撫でるかのようで

……
気付けば、葵を殴っていた

——お前なんか何が分かるっていうんだ……—

沈黙が下りる

殴った拍子に倒れた葵は、切れた口の端を触り、ただ無表情で言った

「軽いなあ」

「此処に居ない奴の拳なんて、軽過ぎて笑えるぜ」

意味が分からない

オレは此処に居る……コイツは何が言いたい？
分からない……

（何を、）

何を考えてる……？

「俺の言ってる意味分かんねえのか……」

葵は、オレを

「くだらねえなあ、おまえも……アスベルも、なあ？」

——アスベルを、嘲笑った

その瞬間、何かが……

張り詰めていた何かがブツリ、と切れた

「つぶざけるなよ——！」

（そうだ、ふざけるな……何も、何も知らない分際でっ）

ぐるぐると回る醜い感情の数々に後押しされるように葵に掴みかかり、力のままに殴る

それでも葵は笑うから、

「オレを愚弄するのは良い、だがな、お前にアスベルの何が分かる？！アスベルは立派だったんだよ！！ずっとずっと王になろうと努力してっ、オレなんかよりずっとずっとこの国に必要な奴だったんだよ！！」

言葉が口について溢れ押し寄せる

ただ悲しかった……ただ、悔しかった

（どうして分かってくれなかったっ？！）

誰の目から見ても明らかだった、アスベルの方が素晴らしいと、王に……

（オレなんかより、オレなんかよりずっとずっと……ふさわしかったのにっ……！！）

「アスベルは、誰が見ても立派だったんだ！！その反面オレは何も出来ないっ！出来なかった！！オレはっ……」

悔しくて悲しくて……

何を言っ居るのかすら分からない

ただ言いたいと、叫んでしまわなければ狂いそうだった
だから、

「オレはっ、世界でたった一人しか居ない兄でさえも救えなかったんだよっ……！！」

目から溢れた何かと共に、
心の奥に溜まっていた全てをぶちまけた

「オレは、何一つ……」

何時もアスベルは笑っていてくれたのに、
何時もアスベルはオレを受け入れてくれていたのに、
アスベルは何時も、何時も……

「アスベルの為に何も出来なかった……！！」

自らの願いを言うことなく、人の為に生きていた
そんなアスベルが唯一持った望み——オレが王宮に戻ってくることに
——さえも叶えてやる事が出来なかった

（どうしてオレは、）

オレは何一つ、アスベルの望みを叶えてやれなかったんだろう
アイツを、『風の翼』であるアイツを、支えてやれなかったんだろう
う……

後悔しか、残らなくて
悲しみしか、残っていないくて……涙は止まらなかった

「……それが、くだらねえって言うてんだよ！！」

ふいに、今まで静かに笑うか殴るかしかなかった葵が、
怒りを吐き出すかのように、

「何、聞いてやがったんだよおまえ……アスベルは言っただろ！
！『僕は幸せ者だ』って！！幸せそうに笑っただろが！！」

叫んだ

「否定してんじゃねえよ馬鹿野郎！！アイツの最後の言葉も、今まで積み上げたお前もアイツも、何もかも否定して嘆いて、弱いフリしてんじゃねえよ！！」

真っ直ぐなその視線に射抜かれる

行き場のない思い、悲しみ、怒り……

それら全てを暴かれていくかのような感覚に、全てが爆発した
そして、

「っ……黙れ！！誰もがお前のように強くあれる訳じゃないんだよ
！！誰もが先に進める訳じゃないんだよ！！」

気付けば葵を殴り飛ばしていた

葵は吹っ飛び、窓際まで転がって静止した

誰も何も言わなかった

それどころか、時間が止まったかのように何も動かない動けない

そして

沈黙が流れて……

「そうか……分かった」

床に仰向けに倒れている葵が一言、
呟いた

「俺が昨日あの時、死んでれば良かったんだ」

状態を起こし、静かに……本当に静かに、笑う
ゾクリとするほどの静けさを纏ったその笑みは、
背筋を凍らせてオレ動きを止める

「何、言つて……」

絞り出せた言葉はそれだけで、
葵はゆつくりと天を仰ぐように言葉を紡ぎながら、窓を開ける
そして、

「良いんだ良いんだ、そうだよなあ、おまえも皆も優しいもんなあ、
面と向かつて言えねえよなあ」

クツクツク、と声上げて笑った
見えるのは後姿だけで、葵がどんな顔をしているのかも此方からは
伺い知る事が出来ない
それが余計に、怖くて堪らない
そんなオレの気持ちを察したかのように、振り返った
その顔にあるのは静か過ぎる笑顔

「俺があんとき死んでりゃ、アスベルは帝都に行つて生きてはいた、
そうだろう？」

言葉が詰まる

違う……そう言いたいのにな、何も言えない
ただ、このままじゃ

「な、そうだろう？考えてみりゃそうなんだ、俺が生きた、だから
アスベルは死んだ、簡単だ」

身を乗り出すように窓の外にある空を仰いで笑うこいつが、
何処かに消えて……アスベルのように消えていきそうな気がして

「ち、ちが……ちが、う」

自らに言い聞かせるかのように否定し、縋るように一歩、葵へと踏み出した

それでも葵は振り返らないから、もう一度否定の言葉を口にした瞬間、

「違わねえ」

オレの言葉を掻き消して葵は振り返った

その目には悲しみも怒りも、痛みもなくて……ただただ、静かだった
そして目を伏せ、ゆっくり窓の方へともたれて……

「なあ」

その目は一体何処を見ているのだろうか？

誰へと、声を掛けているのだろう

分らない、何一つ……

（同じじゃ……ないか……っ）

アスベルの時と、

（知っているつもりで何も知らなかったアイツの最後と、まるで同じじゃないかっ――！）

視線は交わっても、心は擦り抜けて行く

（なんで……）

「生きてちゃダメなのは、俺なんだよ」

葵はニツコリ、笑った

身体がそのまま重力に従い傾いていき……

——ダメだったんだよ、俺は、あの時から……あの時、死んでりや良かったんだ——

（なんで皆自分だけで背負って笑ってオレの前から消えていこうとするんだよっ！！）

眩きが聞こえた瞬間、

言葉よりも先に身体が動いた
そして、

「この馬鹿っ！！」

あの時届かなかった手を伸ばして、

落ちようとしているその身体を引き上げた

フラッシュバックのようにアスベルの姿と重なったが、それすらも
吹き飛ばし、

「馬鹿かお前は！！」

全力で叫び、殴った

「誰が勝手に死んでいいなんて言った！！誰が死ねばいいなんて言
った！！！」

（勝手過ぎんだよ、どいつもこいつも……！！）

オレに許可なく死んでいこうとする

オレに何も話さず、抱え込んで消えていく

もううつんざりだ、もう……目の前で誰かが死ぬ所なんて、

（永遠の別れなんて今はもう見たかないんだよっ！！）

そうだ、見たくない

親しい奴の死も、何も知らない奴の死も、敵の死も、全て……全て
全て全て、

（見たくないかない）

それに……この世に、

「この世に死んで良かった奴なんて居ないんだよ！！」

『羽有り』と呼ばれ、『生きた兵器』として使われる種族だったと
しても

アスベルは死ぬべきじゃなかったように
全てが違っても、

（死んで……悲しいんだよ……っ）

胸が痛い

まるで思い出したかのように、身体が重く感じる

そして、心に溶け込むように姿を見せるのは大事な……

（ああそうだ、死んでしまったのはたった一人の……）

王位継承者でもなく、『生きた兵器』でもなく、

——世界でたった一人の、オレの大事な大事な兄さん……——

やっと気付いた

オレは馬鹿だと、気付けた

悲しくないフリをして、状況をよく理解したフリをして
結局何も、自分の事一つとして分かっていなかった

（オレは……はは、ただの、）

ただの愚かな餓鬼じゃないか……

沈黙が流れる教室で、倒れたままの葵を見てただ……そう思った

「っ……ははは」

酷く長い……実際にはほんの僅かな時間が過ぎた後、
床に大の字になっていた葵が笑った
そしてゆっくり起き上がった

「その通りだ、死んで良かった奴なんて居ねえ」

いつもの様に、馬鹿っぽい表情を浮かべて
ヘラリと、笑った

「……俺、馬鹿だからさあ、皆にしてやれることって……これくらい
いしかなんだよなあ」

サンドバックになるか、仕方ねえ馬鹿だなコイツって思わせる事と
か、後……あー、なんだ？

指折りしながら数え、頭を掻いてまあいいや……と呟き、オレ達を見渡し、うん、と一つ頷く

「皆さあ、苦しいこと泣きたいこと悔しいこと、もうダメだって思うこと……全部俺に言えよ」

俺が全部受け止めといてやるから……そう言う葵は、何時もの馬鹿で全部なんて無理だろうと、お前が先に潰れるぞと、言葉が浮かんで形にならず消えていく
何故なら、

「その代わり、俺に、出来るんだって、夢じゃねえんだって……背中で、語ってくれよ？俺は弱いから、守られるだけだから、だからいや、だけど……」

一息付き、

浮かべる表情は何処までも自信に満ちて、何処までも……希望に満ちていたから

否定すべき言葉は掻き消され霧散してく
そして、

「馬鹿だからさあ、俺……何時でもおまえ等んこと信じてっから」

——だから皆俺から離れるな——

——ああ後……これから改めて頼むわ、俺の最高の親友達——

そう告げて満面の笑みを浮かべた
だから、

（ああちくしょう……）

カッコいい、さなあ……無意識の内に戻った口調は、此処に居ていと、離れるなど……言われた安心からか、全幅の信頼を寄せられた喜びからか、は分からないが

（敵わない……さ……）

凍りつかせた感情を溶かすには十分過ぎるものだった
自然と笑みを浮かべたオレに、見ていた皆も、

「……はは、は……ああ……お前は、危なっかしくて見てられんからな……」

「ふふっ……何処までもお供するで御座るよ、未来の王……」

自然に笑い、頷き……涙を零した
だから、

（ああ……このクラスの皆と一緒になれて）
本当に、良かった……そう思えた

しばらくそんな温かい時間が流れたが……
葵が思い出したように、

「っあー！！痛い！！マジで痛い、ってか口切れてるしうわぁ飯食う時俺マジ大変じゃん！！」

と殴られた頬を押さえ涙目で何時ものように叫び出した
だから、

（カッコいいんだかカッコ悪いんだか……難しい奴さねえ）
呆れたような、微笑ましいような感覚が広がりまた笑えた
しばらく皆で宥めてやっていたが、

（ああ、馬鹿だから仕方ないんさ、ね）

理由付けとしては万能な馬鹿に、

後悔は笑える程に残って……固いと思っっている決意もすぐに揺らいでいくだろう未来を思っても、怖くは無いとそう思えた

これから先どれだけ泣こうと、怒ろうと、憎もうと……

コイツが居れば、また何時でも自分に戻って来れそうな気がして

「……遅すぎる、けど……」

——これから僅かだろうと、這いずって無様だろうと……オレは、進むさ——

何時も通りでは無いけれど、

ほんの少し、前を向いて告げる事が出来た

そして、

皆から帰ってきた言葉は……

「当たり前だろう、皆一緒だ」

そんな、温かな言葉だった

（はは……良かった）

この国の未来はまだ……

まだ終わりに向かつてはいないのだと、心の底からそう思った
今はまだ、そう思えた

* * *

夕暮れ時……

下校していく生徒達の姿を屋上で眺める影が一つ、佇んでいた
吹く風に遊ぶように舞う長い髪は、光を受けて色を変える
鋭く赤い、双方の瞳は一つの小さな鏡を見つめている
其処に映っているのはその影と全く同じ姿
唯一違うのは、その両目は穏やかで、碧眼であることが……

「……………宣戦布告から、もう二日経った……………どんな感じだ」

赤き目を持つ影が、鏡の中の碧眼に話しかける
碧眼は鏡の中でアイコンを起動させ静かに笑い、

『俺達が参入した事による歴史のズレは其処まで無いようだねえ』

嬉しげに告げた

無邪気に笑うその姿に、微かに赤眼が目を細める
碧眼の映っている小さな鏡を優しく撫で、くすぐりたいよ……………と、
笑う碧眼に息を漏らして微笑む

「それは良かった……………お前が悲しまなくて済むな」

『はは、君は心配症だなあ……………大丈夫だよ、俺は丈夫だから』

ほら……………そう言い、手を広げて鏡の中で回ってみせるがその身体に
は無数の傷跡が見える
それに微かに赤眼の表情が曇るが、

カンッ、カンッ、カンッ……

ふいに、階段を登ってくる音が聞こえ意識をそちらへと向けた
大きくなってくる足音に、溜息を吐いた

「……誰か、来てるみてえだな」

『そうらしいねえ……じゃあ、交代しよう』

碧眼が小さく微笑む

それに赤眼は頷きを返事とし、鏡に手を置き、

「……俺は、お前を守る為に生まれたんじゃないねえ……俺は、お前を
守りたいから……」

——だから、自分の意思で生まれたんだ……——

最後の呟きは、

「あー？おい、皆帰ってんだ、藍も早く帰れよ？じゃないと、オレ
が帰れねえんだわ」

そんな来訪者の声に掻き消された
そして、

「ああ……すみません、ジャンス先生、俺も今帰りますんで」

屋上に佇んでいた藍は、鏡を仕舞い、笑みを浮かべた
何時もの、教師としての笑みを……そして、彼は静かに屋上を後に
した

（歴史通りなら……特訓する期間は後四日だなあ……）

歴史通りならば、五日後に帝国からの第一精鋭部隊が来る
そう、歴史通りならば……

「……それまでには、死なない程度に鍛えてあげないと、なあ」

ねえ、真紅……

先ほどの赤眼を思い浮かべ、言葉を掛ければ

『ああ……そうだな、翡翠』

思ったとおりの答えを貰え、満足の笑みを燈し踊り場の窓から外へ
飛び出した

何もせずともすぐさまマイコンが起動し、着地の体勢を取った頃には
準備は全て整っていた
だから、

（全てがこう、上手くいけばいいのになあ……）
そんな不可能な事を思い浮かべてしまった
それに気付き、目を瞑って自嘲した

（この程度の事が上手くいっても……）
歴史はそう簡単には変えられない
少しずらす事が出来るとしても、精々……

「悲しいよなあ……死ぬ順番、ほんのちよっただけ変えたただけだっ
たなあ」

死なせたくなかった人をやはり死なせてしまった
これから先はどうなのだろう？
やはり……

（ただの、歴史の再現になっちゃうんだろうなあ）

アスベル……彼が死んだように、

エリスに、ウルシエン……彼女等が裏切ったように……

そう、全ては不可能なのだ

初めから……願ひ乞う事さえもが、神々の怒りに触れる許されない罪

歴史を、世界を憂いても恐らくそれは、

変わる事無き……

「悲しいなあ」

言葉は風に掻き消され、

手に持った鏡の中の彼だけが……悲しげに優しく、見つめていく
れた

願い+信頼〃ほんの微かに開いた扉

この手に掴めるものなどたかが知れている

だから手を伸ばした

だから手を伸ばす前に諦めた

そして両方を経験したからその先に後悔と苦しみしか無いのを知った
遙か昔……今は無きこの両の手が掴んだものは、

虚無でしかなかったのだと理解した

故に思った

伸ばそうが諦めようが所詮虚無と後悔と苦しみしか手に出来ないのなら、

初めから何もしない方が楽ではないか、と

所詮意味のないものならば、

必要なんてないではないかと……そう、思った

そしてまた、世界は……

頑張っても救われないように出来ている

頑張って何かを手にしても、すぐ奪われるように出来ている

（頑張って、頑張って頑張って頑張って頑張って……）

俺の、俺達の夢を叶えた先にあったのは、

理不尽なまでの、全能とされる存在からの破壊

故に、理解した……いや、理解するしかなかった
どれだけ思いが強くて届かない事もあるのだと

絶望しか生まれない事もあるのだと
あの時の俺は、理解することでした……

「生き延びる術が、無かったなあ……」

昔を思い出しては、何の意味もないのにベットの上で呟く
そして、

こんなにも愚かな大人に成れ果ててしまったと、
時の流れは残酷だと、

溜息を吐きながらそう結論付け、過去から見つけた抽象的な絶対定
理を頭の中で暗唱するのを止めた

今は教師としての、

藍「イウィンデルとしての、思考に必要な無いことだ
それに真紅に叱られて……いや、心配されてしまう

（俺的には……最後のが一番堪えるよなあ……）

真紅は優しい

俺を守る為に、自らの意思で生まれてきたとまで言ってくれたりも
する

俺とは全く違う、本当に……

そこまで思い、ちらりとベッドの上から、机の上にある手鏡を眺める
そしてふと、

（あ……別にあれじゃなくとも、鏡がガラスとか自分の姿映るやつ
なら真紅が居るんだった……）

そんな事を思い出し、苦笑が漏れた

「……ってことで、早速……」

淡い緑のカーテンを自分の姿が完全に映る程度に開く
そして自分の姿が映っているのを確認してから手を触れ、彼の名を
呼んだ

すると、映っている自分の姿の瞳の色だけが赤く染まっていき……

『……どうかしたのか、翡翠』

真紅が、来てくれた

分かりづらいが、心配そうな顔をしているような気がする

（ほらまた、心配かけちゃったよ……あ、そういえば彼が生まれて
から、心配しか掛けていないなあ……）

凄まじい事を思い出し、窓を撫でる

恐らく今俺は苦笑が浮かんでいるんだろう、真紅がまた心配そうな
顔をした

「何でもないよ、真紅……俺は、大丈夫、大丈夫」

『……お前を、苦しめる全てを俺は……お前の許可さえあれば
俺は、』

悲しげでいて苦しげな真紅がその先に言う言葉は知っていた
だから、

「……大丈夫だよ」

窓の中の真紅の唇に指を軽く触れさせ、その先を途切れさす

（……本当、真紅は優しいなあ）

契約と『アレ』の呪いとも言える……この身の流れ続ける血によっ

て消え行くココロがまだ、

温かいと感じてくれる

それはきつと、生徒達のお陰もあるだろうけど……

（一番は、真紅……だなあ、もう云何年の付き合いだし）

「ありがとう真紅……嬉しいよ」

苦笑では無く笑みを浮かべるとほんの少しだけ、真紅が安心したような顔をした

だから、またね……そう言い、カーテンを閉めた
そして、壁に凭れ座り……呟く

「……何時か、彼を俺から……」

何年もの間縛り続けている俺から、
悲しませ心配を掛けるしかない俺から、
この、死んでいくしかない……俺から……

（開放、してやりたい……）

いや、違うか……開放しなければいけない

（真紅は、曲りなりとも真紅として生を受けた、だから……俺なんかの中に居ていい存在じゃ）

けど、俺は真紅が居なくなれば俺で居られなくなる

『アレ』の呪いに飲み込まれ……過去の、もう過去になってしまった親友達の生きた証が、
全てが消えてしまう

「そん、なのは……嫌だよ、なあ」

ああまだ俺は我俣を言っている
せめてせめて、アイツ等の存在の証だけは、と……
それだけ残せたら死のう……と、もう何十年も同じ事を繰り返し思
って

（所詮俺は思うだけ、か……）

嘲笑ともいえる嘆息が漏れた
その瞬間、

「え、と、あの……藍、先生……だ、大丈夫？」

自らの大き過ぎる失敗を悟った

（まずった……フェルさんは片目見えない代わりに耳が相当良かったんだ）

聴覚が人離れしている葵と住んでないからって油断していた……
ばれる、ばれたか？

（ばれたならもう、彼女は此处で……）

ココロの奥が凍りついたように一つの指令を下す
だから、彼女の最後になり得るかもしれない質問をした

「……大丈夫だよ、フェルさん……ところで、どうして俺が心配になったのかな」

「ふえ？え、えと……た、溜息が……聞こえたから、だから疲れてるのかなあって……思っ……」

言葉の最後になればなるほど、心配そうな気配が強まった
心の底から心配している……そういった気持ち、声に乗って届くから、

だから、

（……溜息しか聞いてない、か……ウソでは……ない）

『怪しいなら殺せ、全て殺せ』そう叫ぶ何かを抑え込み、
安心させるように声を和らげた

「そつかあ、ごめんね、心配させて……うん、フェルさんの言う通り……俺も少し疲れたみたいだね」

そう言った直後、

扉に手を掛けるような音が聞こえた

(……本当、いい子過ぎるよなあ)

そう思った

とても優しく誰にでも分け隔てなく接する

それは非常に素晴らしいこと、実に人間としては満点だが、

(そういう子から、死んでいくんだよねえ……)

割と高い確率で、

心の中でだけ呟き、扉が開いていくのが見えたから

「ちよつ、フェルさんタンマ！俺今着替え中で……ズボン脱いでますっ」

恐らく常識人のフェルさん辺りにしか効かないであろう事を叫んだ
全て演技でズボンなんて脱いでいないが、

「え、へ、あ、ふええええ？！ご、ごめ、ごめんなさあいつつ！
！」

慌てた声と同時に扉が凄い勢いで閉まり、一階へと駆けていく足音が聞こえた

(あー……純情で素直な子って、いいよねえ)

大分扱いが楽だ……変人共を相手していると、本気でそう思う

「あ、そう言った意味では、変人を難なく相手出来るジャンス先生も……」

……何故か寒気を感じたのでその先は言わないでおいた
そして、手鏡を何時もの教師服の中に仕込み用意していた服を着る

（よし、準備はOK……って、あ）
今日の予定をジャンス先生に報告することを、忘れていたのを思いだし

「……し、真紅……あはは、どうしようか」
『……殺すか？』

手鏡を覗けば、ほんの少し嬉しげにそう返してくるから、
「ごめん、それ却下」とだけ告げまた服の内に仕舞い

「……今日割と運無いなあ、俺」

溜息と共に部屋を出た

そして、

まだ顔が真っ赤なフェルさんと一緒に登校した
残り三日……

それだけでどれだけ彼らの底上げを出来るだろうか、と
教師らしい事を思い、ほんの少し楽しみながら、学校へと……向かった

▲ ▼ ▲ ▼

「あー、セイレンセイレン！あのさあ、今日の授業ってなんだかあれなんだろ？……あれえ？なんだっけ」

学校に着いて、自分の机に荷物を置いてすぐ葵様が話しかけてくる

しかも途中から可笑しいことになっているが、

（まあ、何時も通りですね）

そう結論付け、まだ首を捻っている葵様の頭を、捻っている方向へ押してみる

「っちょ、おおお？！！ギブッ、マジギブだっ！！死ぬ、首の骨折れるっ！！」

「ご安心を、痛くしているだけで折れる程はしませんので」

「い、痛えのは嫌いだって！！てか、マジギブギブ、ギブアップッ！！」

バンバンバンッ、と机に愛情表現をし出したので、何となく面白くないので放した

すると、首を押さえながら大袈裟に肩で息をして

「セイレーン……ちょ、マジでこれは駄目だぜ……」

と、ぐったりと私を見上げてきたので何となく良しとしてみた

最近、葵様のぐったりしている姿を見るのが日常と化しているような……

（……ええ、気のせいですね、さもなくば葵様は最弱の称号を……）
思いかけて、止まった

ああ、そうだ彼はもう……

（とつくの昔に、もう手に入れていましたね……）

ほんの少し溜息を吐き結論付け、まだぐったりしている葵様を復活させるべく話題を投げかける

「それで？今日の授業があれとは何ですか？」

「ああ……あのさあ、なんか藍が授業してー、俺等のクラス全員と涼は授業開始5分前までには校庭来いってー」

ニコニコといつもの様に話す葵様

だが、

（……授業開始5分前？）

ちらりと時計を見る

今此処は最上階から二階下（それでも10階）の教室で、授業開始まで残り……

「……残り4分で10階から校庭まで行けと？」

ピタリ、と周りで話をしていた皆様の動きが固まる

そしてギギギ、と音を立てそうなくらい不自然な動きで葵様を見て、

「いやあ、はは……忘れててなあ、スマーンツ！」

「この馬鹿があああっつ！！！！！」

何処から取り出したのか、ハリセーンで一通り葵様をビシバシッと叩いてから全力で教室を出て行った

（ふむ、あれが愛のハリセーンと言う物ですね）

一つ、新たな事を知った……そう思いながら、

少し状況判断をする事にした

教室に残ったのは撃沈した葵様、そんな葵様を心配したフェルディン様、ノリで残ったらしいアイシス様、私の四人だ
そして残り時間は3分30秒、相手にとって不足なし

「アイシス様、転移の陣を展開してください」

「あら？構わないけど……いくら私様と言っても3分は最低でもかかるのよ？30秒で転移出来る距離でもないのよねえ……私様の才能を持ってしても、ふふふ」

冷静に校庭に居る藍様との距離を測りつつ、無理だと判断原因を述べながらも、

「まあいいわ！元々こんな長い階段、私様は下りるつもりなんてないんだから！『享楽の扉』よ、特等席に案内しなさい！」
<了解致しました>

私の言うとおりに起動してくれた

そして、「これからどうするの？」とばかりに笑う

信頼しきっているかのようなその表情に思わず、

（さすがは、葵様の姉ですね）

そう思わざるは得ない
だから、

「フェルディーン様、此处から落下するとなるとどのくらいの時間が掛かりますか？」

「え、えと……うん、風の音、色からして……3秒、かな」

「分かりました、では……私がその時間を10倍延ばします、アイシス様、その位置ならば、」

「ええ……30秒以内でも何でも大丈夫よ、ふふ……やるじゃない、セイレン」

全力で信頼に応えるのが礼儀というもの

アイシス様に少し微笑んで返し、未だ地べたに倒れている葵様に近づくと

「……皆すげえなあー……」

微かに羨望が混ざったような声が、聞こえた

● ● ● ●

床に耳にくつつけているから分かる

飛び出していった奴等も、凄まじい勢いで走っている

多分、音からしてギリギリ間に合うだろうスピードだ

そしてセイレン達も、自分たちの得手不得手を知り、その上で間に合うように行動している

本当に、心の底から凄いと思う

だから、思ってしまう

(……俺には、)

俺には何が出来るんだろう、と

皆はすごい

本当にすごい、力も頭も満点だけど俺は、

(俺には……ねえよなあ)

俺は王になると言った、そして皆がならせてくれようとする
きつと、なれるんだろうと思う

なるんではなく、なれる……俺が何もしなくても、ならせてくれる
だけど、

(そんなの、あれだよなあ……)

他人に頼りきった王に、人に、誰がついてくる？

答えは最初から出ている、誰もついて来やしない

「……皆すげえなあー……」

眺めて、感じて……そう言うだけの自分は、何が出来るんだろう
そう思つて、ほんの少し苦しく、悔しくなつた

（あー……俺滅つ茶カッコわりい……）

カッコ悪くて、情けなくて……

皆には見えないように拳を握り締めた、瞬間

——力はイメージだよ、蔡——

頭の中に直接響くかのような声が、聞こえた

「あ?!」

顔を上げて辺りを見渡しても、声の主と思われる奴は居ない
見えるのはほんの少し驚いたようなセイレン達の顔で、

（俺だけに、聞こえんのか、これ……）

ただ、驚いた

そんな俺に構わず声は続ける

——想像し、創造出来たモノが力を得られる……君のようなモノ達
は皆、そうだ——

（俺の、ようなモノ……？）

皆とは違い、

アイコンをまともに発動させる事の出来ない出来損ないのような奴が、
他にも居るのだろうか

だけど、今まで俺は見たこと無い

でももしも、この声の主が藍のように世界を見てきたような奴だつ
たら

俺なんかより膨大な時間を生きてきた奴だつたら、

——大丈夫……君は、力を手に出来るよ……出来る……で、き……

「あ、ちょ、おい!？」

考えている間に、声は薄れ完全に聞こえなくなってしまった

(い、一体何なんだよ……)

訳も分からず、セイレン達には驚愕の顔で見られるが、

(……出来る、か……)

そう言ってもらえたのは、純粹に嬉しかった

出来るんだと、俺にも、出来るんだと……嬉しかった
と、

「……状況がよく見えませんが、残り1分、もうすぐ来ますので、」
「お、おおおっ?!」

セイレンのそんな声と共に、身体を凄まじい力で引っ張られそのまま、

(ちょ、マジ窓開いて……ってか、今気付いたけどさっきの計画色んな意味で紙一重的な?!)

焦りが全身を蝕んでいくが、セイレンが小さく

「……では、命運を共に賭けますか」

そんなことを言うから、

(……やべ、マジで悪くねえかもって思ってる、俺)

俺の服を掴んでいたセイレンの手を、そっと握り……

微かな反応の後、握り返されたから……そのまま、

「紐無しバンジーだなんて素敵ッ!」

「ひっ、こ、わ、怖いっ……!!」

「ぐえっ」

喜びを感じる前に、変な声が出た

後から飛び出した二人に空中で踏まれるような感じとなり、それに便乗したセイレンが手を繋いだまま俺の上に乗るから、

（うわ、ヤバエ、マジ色んな意味でヤベエッ！！）

俺今乗り物人間的な何かか？！なあ？！

これは得役だと思っただけいいのか悪いのか……複雑な気分のまま、落ちていった

「『進化の扉』……風よ、我等を包め！！」

俺の胸辺りに乗っているセイレンがアイコンを起動させる

ふわり、と……徐々に加速度が減っていくが……正直この位置は、

（くっ……す、スカートの中身が見えそうで見えねえっ……！！）

萌え心が刺激される、色んな意味でヤバイ位置だ

しかも右を見れば姉姉ちゃん、左を見ればフェルちゃん……二人とも同じような状況である

（おおお、俺なんかマジヤベエッ！！）

見えそうで見えない方がぐっと来るなこれっ……！！

そんな感動を覚えていると、微かにセイレンの手が震えた

「セイレン……？」

「っ……どうやら、予想外に、付加が大きいようです、ね」

何時もの声に、微かに苦しげなモノが混ざっていた
俺が何か言う前に、

「秘密に、してください……下りるまでは、持ちます、から」

そう言われた

（秘密につて……）

聞こえる呼吸音が微かに乱れてきている
手から伝わる心拍数が、上がっている
確かに、セイレンの言うとおり下りるまではギリギリ持つだろう、
だけど

（俺は……俺は、何なんだ……）

好きな子に苦労させて、目の前で苦しんでいるのに何も……

（カツコ悪すぎんだろ、俺っ！！）

少しでいい、彼女の力になりたい

少しでいい……彼女の苦しみを和らげる、そんな力が欲しい

何も出来ない歯痒さから、心の中で叫ぶようにそう思った
瞬間、

——なあ、葵——

聞こえたのは、さっき教室で聞こえた声と同じで、
だけど今度は分かった、この声の主は……

（っ、この声、藍……？）

藍が居るはずの校庭の方に、目を向けた
此方を見ている藍と目が合い、その口が小さく言葉を紡いだ

——イメージ、そして思いの強さ、だよ……葵——

そして、付け足すように

——大丈夫、おまえは……おまえは、ちゃんと出来るから——

言って、笑った

（そつ、かあ……藍、信じてくれてんだな）

なら、何も怖がる必要なんてない

何も出来ないと言わなければならない

だって、

「セイレン」

「……っ？」

（信じてくれる奴が、居るんだもんなあ！）

繋いだ手に、力を込める

ただ願うのは……彼女の苦しみが和らぎますように

ただ願い請うのは……

「俺も、おまえの力になるから」

俺の初めての友達『——』

おまえの嫌いな大嫌いな、『人』の役に立つことを許してください

その瞬間、

閃光に包まれ全てが見えなく、聞こえなくなった

だけど、

この手だけは離さぬようにと……感覚すらも消えた手で、掴んでい

る筈の何かを強く、握り締めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2550y/>

馬鹿の世界リフォーム記

2011年11月29日11時45分発行